

Fallout : Stray Ranger

文月蛇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2077年、第四次世界大戦。通称“great war”によつて世界は核の炎に包まれた。それから203年後の2281年。放射能などの爪痕は根深く残り、アメリカは生き残った人々が日々の糧を奪い合う無法地帯と化した。西海岸では旧世界の価値観に従つて建国された新カリフォルニア共和国がモハビへと領土拡大を目指す。そして、アリゾナを中心として78もの部族を従えたシーザーレギオン。二大勢力はネオンと喧騒が支配するニューベガスを中心に激しく争つた。そして、戦前から今までニューベガスを支配するMr.ハウス。三大勢力が衝突するとき、勝つのはどちらか。

その戦いのカギを握るのは一人の運び屋だった。

※これは前作「fallout」とある「一人の転生者」の次作となります。亀更新となりますのでよろしくお願ひ致します。

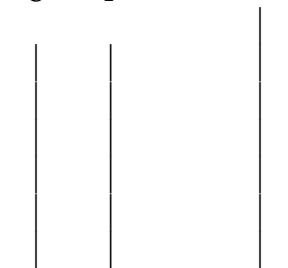
※前作を読んでなくとも読めるような構成となっています。

目次

十八話	Caesar, s conspiration																
十七話	Mis matched friends																
十六話	nighmare																
十五話	Battle of bullethead city																
第二章	設定資料																
十四話	Investigation of cases																
十三話	Untouchables																
十二話	Untouchables																
十一話	My Kind of Town																
88																	
第二章	Primm & Mojave Outpost																
十話	Private Military Company																
九話	Ghost Town																
八話	Ghost Town																
七話	Ghost Town																
六話	The Capital Wasteland																
五話	Back in the Saddle																
四話	sunny smiles																
三話	Rorschach test																
二話	What is my Name																
第一章	Good springs																
145																	
186	173	163	133	127	116	108	99	73	48	40	31	25	19	16	9	7	1

第三章  
十九話  
C a e s a r

二十話  
N o v a c  
U n t a c  
C o m e r n  
F l y e h  
W i t h e n  
M e f i l i u m



# 第一章 Good springs

## 一話 prologue

かつてこの世界がどのような文明を築いていたか、知るものは殆どいない。

人類が誕生してから、その歴史は同じ種族の血に染まつていた。戦いは人を成長させ、文明を昇華させた。剣から槍へ。弓から火砲へ。そして火薬からレーザー。爆薬から原子爆弾へと人類は戦争を繰り返し、戦争の方法を変えていった。しかし、戦争の本質は変わることはない。

2077年。資本主義と共産主義の戦いは遂に終止符を打たれた。核戦争という最悪の結果で。

アメリカの資本主義経済によつて優雅を誇る摩天楼や権力者の力を誇示する為に作られた高層ビル群、そして工場で大量生産された物の数々。これらは核の炎によつて焼き尽くされ、瓦礫と廃墟、そして数百年以上残る放射能が残つた。

人々はこの世界を「Wエaイstラeイlアnd」と呼び、人類の歴史は血に染まり続ける。

荒廃した土地は人の心を荒廃させ、法も秩序もない世界へと変貌した。戦争が始まる直前、アメリカは核や疫病から逃れるために「vアルt」と呼ばれる核シェルターに身を寄せた。そして、そのシェル

ターから出てきた人々は世界を見て驚愕した。そして彼らは旧世界のような栄光に満ちた世界を創るために国を興した。嘗ての旧世界、民主主義という価値観によつて建国された新カリフォルニア共和国。彼らは更なる資源と領土を求め、東へと進出した。

偵察隊を送り、彼らは稼働可能なフーヴアーダムを発見。慢性的なエネルギー不足を解決する糸口として、領土拡大を推し進めた。だが、西へと進出するシーザーレギオンとの軍事衝突に加え、Mr. ハウスのストリップ地区の中立化は新たな戦乱が引き起こされる。

人：は過ちを繰り返す

荒涼とした砂漠と強く日照る太陽。

凍つく氷もその熱射で溶けるような暑さの土地。

岩々と点々とある廃墟が無ければ、自分の居場所も分からなくなるであろう。そんな土地は昼間には暑苦しく感じるだろうが、夜は肌寒く感じてしまう。

嘗てあつた大国を煌々と照らす街灯類も消え失せ、大都市の明かり

も失せた夜空は多くの星々を見せていた。文明の衰退によつて引き起こされた悲劇は意外なことに、夜空を美しくさせた。

そんな星々を見上げ、一息ついて周囲を見渡すと見えることだらう。ネオンと喧騒が支配する砂漠のオアシスに見えるその町が。

## ニューベガス

かつてのラスベガスストリップ地区と呼ばれたそこは、大戦争の荒廃を感じさせないような盛況ぶりだ。多くの旅人や軍人、商人が財布の金を落としていくその場所はオアシスではなく、金を貪る蟻地獄に見える。大抵の人間ならばあの場所を目印に動くのが多く、遙か彼方の荒野でも見ることが出来た。

その荒野でも高台に位置する墓地に複数名の男達が立っていた。その内の二人は何やら会話をを行い、他の何人かは死体を入れる墓穴を掘っていた。その傍らには縛られ、気を失っている男が一人。猿轡をはめられ、ジー・パンとシャツという出で立ちだ。他の装備はご丁寧にも彼のその横に置かれていた。

「こいつの装備なら高く売れるだろうな」

「ああ、2000キャップにはなるんじゃねえか？」

男たちの会話は追剥のそれであり、彼の装備だつたものは高品質な装備ばかりだ。彼らの恰好はギヤングのそれであり、「グレートカーナンズ」と呼ばれる结束の固いそこのらのギヤングやレイダーとは違う部族にも似た彼ら。騒がしい彼らは拘束された人物を覚醒させた。

その人物は自身が縛られ、拘束されているのを確認するかのように体を揺する。それを気づいたのか、見張りの男が声を上げた。

「おい、こいつ起きたみたいだぜ」

周囲の男たちは目が覚めた人物に目線を向ける。これから行われることを知っている男たちの目には憐みにも似たものが込められて

いた。そして、少し遅れてチェック柄のスーツを着た男が火をつけていた煙草を捨て振り返った。既にカーンズの一人は357マグナムリボルバーが握られ、銃口は既に目覚めた男に向かっていたが、チェック柄の男はそれを制す。

「相手に敬意を払わないのがカーンズ流かもしれないが……俺は違う」

オールバックにし、気取った感じのスーツを着こなす男はその荒野には不釣りあいだった。すると、男は胸元のポケットからカジノのチップと思しき物を取り出した。縛られた男は目を見開き、何か言うとするが猿轡が邪魔をしてうまく発せられない。

「お前は仕事を立派に果たした」

いや、仕事は終わっていない。

拘束された男は言いたかつたが、それも言えぬままチェックの男は続ける。

「巻き込んでしまつて申し訳ない。こんな状況に置かれたら、自分の運の悪さを恨むだろう」

チップを胸元のポケットに仕舞い込むと、代わりに芸術的な彫刻が施されたカスタム拳銃が姿を現す。戦術的優位性をもたらす様なものでなく、観賞用の拳銃にも見受けられるそれはプロからしてみれば、金持ち道楽の一つに過ぎないのだろうと縛られた男は目線を落とす。

こうして捕まつたのは自分の能力不足であり、慢心が元と言うほかない。グッドスピーリングス経由の裏ルートを使えば早く依頼品を届けられると考えたのが運の尽き。

「……だが」

そう区切り、銃口は彼へとむけられる。その先は彼の頭。

彼は自分の分が来たかと諦める。そして脳裏に思い出す死んでしまった戦友。  
彼らの元に向かうのか、それともそれとは違うどこかに向かうのか。

彼は自分を殺す男の姿を脳裏に刻み込むように視線を向け続けた。

「最初から決まっていたんだ」

一発の銃声が荒野に響き渡る。

一人の命が終わつた瞬間の音であり、広大な荒野では日常である音。

だが、その音はこのモハビ・ウェイストランドを巻き込む戦いの始まりに過ぎなかつた。

「よーし、居なくなつたわね。ビクター！掘り起こすわよ」「まったく、助けなくとも良かつたのかい？君たちの力なら可能だろう？」

「それを言うなら貴方もじやないかしら？バイタルサインが弱まつて

るわ。早くミツチエルの所へ運びましょー!」

墓場に現われる何者かの人影。

一人の人間が殺される瞬間を見ていた彼らはまるで宝探しのように墓に埋められた人物を助け始める。

片方はシナトラの「Blue moon」を流しながら。

寂しく、フランク・シナトラの曲が荒野に流れしていく

## 二話 What is my Name

消毒液臭い・・・・・。

最初の感覚は嗅覚だつた。微かに200年経つた家屋の埃っぽい匂いの他に消毒液に似た匂いが周囲に立ち込める。次に布団やシーツの感触、そして瞼越しにもはつきりと感じる外の光。ゆっくりと目を開けると、そこには見知らぬ天井があつた。

「目覚めたか、気分は？」

「・・・頭が痛い、あと少し怠い」

彼はいつものように身体を動かそうとすると、眩暈を覚え、ゆっくりと体を起こす。

「おいおい！焦るんじやない、数日間意識不明だつたんだ。」

「・・・・数日間？俺は一体・・・・」

彼は口元を押さえ、考える仕草をする。周囲にあるのは長年使用した、若しくはサルベージした医療用品の類が置かれ、目の前のモハビでは標準的な服装である壯年の男はチラチラと彼の指先に付けたバイタルセンサーから読み取るバイタルサインをチェックしていた。  
「君は撃たれた、通りすがりに助けられてここに運び込まれた。・・・・つと！それには触るなよ。ステイムパックが使えなかつたから傷口を縫合しておいた」

「・・・・俺は頭を撃たれたのか・・・・」

彼は頭に巻かれた包帯を触ろうとしたが、医者らしき男はそれを止める。ステイムパックはナノマシンによる治癒力を上げ、傷口を治す先人の遺物である。ただ、脳細胞を修復することはできないため、頭蓋骨まで至る外傷に使用はできない。下手すれば、頭蓋骨の内側の細胞が再生され、脳を圧迫する危険があつた。

「治り具合を確かめてみよう。名前は言えるか？」

「俺の名前……？」

彼は答えられなかつた。自分の事を思い出そうにも、何一つ出てこなかつたのだ。

「もしかすると、撃たれたショックで記憶が飛んでいるのかもしけん。一時的な記憶障害だろう。脳自体は大した影響はない。今の状態を例えるなら記憶のキャビネットの鍵を無くした状態だろう。何か思い出せないか？」

彼は思い出す。あの夜、拘束されて荷物を奪われた時の事を。

「ああ、撃たれた記憶なら」

「……そ、うか、何かの拍子で思い出したり、時間が経つにつれて思い出すことがあるだろう。……ところで君はなんて呼んでほしい？まさか傷の男とは呼ばれたくないろう？」

自分は何をしていたのか。奪われた荷物のことを思い出し、彼は答えた。

「運び屋……今はそう呼んでくれ」

「そ、うか……私ならそ、うは名付けんがな」

「ほつといてくれ、今はこれしか言えないのは分かるだろ」

真つ当な意見に不機嫌な顔をする運び屋。自身の仕事しかわからぬ彼に新しい名前を思いついて自分の名にするのも、かなり変な話だつた。

「そうだな、私はDr.ミッチャエル。グッドスプリングスへようこそ」

## 三話 R o r s c h a c h t e s t

「ふむ、身体機能も問題ない。」

運び屋と自称した彼は身を起こして、身体機能を確かめるため周囲を歩いたりした。数か月寝込んでいたわけではないものの、意識を失つて手術で体に負荷を掛けていたからか、運び屋の身体は若干重たい。

運び屋は下着姿の自分自身に驚いたものの、着ていた服は血で汚れていて処分したと聞いてため息を吐く。

「包帯は取っちゃダメか？」

「ダメだ、二・三日はかかる」

蓄えた白鬚とは違い、すっかり不毛地帯となつた頭部が特徴の町医者「ドク・ミツチエル」は運び屋のカルテを見ながらいろいろと記入する。カルテには先ほど測つたヴィトマテック活力テスターの数値が記載されていた。

「この数値を見る限りだと、お主はN C Rレンジジャーかレギオンの熟練兵か？」

「さあな、それよりも俺の荷物は？まさか手ぶらでモハビの砂漠を歩いていたわけじゃない。追剥されたとはいえ、幾つか残つてるだろう？」

ミツチエルは部屋の隅に置かれたスチール製の箱を見やる。箱の上には革製の青いジャンプスーツが置いてあり、ご丁寧にも洗濯され、綺麗にたたまれていた。

V a u l t スーツ。

革製のジャンプスーツであるが、核戦争に際してサバイバル可能な保温・撥水性能。加えて放射能に対する防護能力も備えたそれは、ウエイストランドを生きる者にとってはまさにうつてつけの代物だ。ただ、その青いジャンプスーツは自身が「温室で育つた」と物語るよう目立ち、まさに襲つてくれと言つているような物だ。

「あれは？」

「あれが、あれは後でのお楽しみとしどう」「はあ・・・」

文無しの死にかけに治療を施した。それだけでもウェイストランドではお人よしの部類に入るのに、服まで与える。Vault出身者ではない運び屋はミツチエルの施しに戸惑いを隠せない。それどころか、話を聞けば墓穴から掘り出して彼の元に連れて行つた人物が居るという。撃たれた彼からしてみれば、撃たれる前に助けて欲しかつたとぼやきたいが、多勢に無勢だつたのだろう。運び屋は頭に巻かれた包帯を撫で、近くの洗面台の鏡を見る。

運び屋の容姿はウェイストランドでありがちな白色人種の中肉中背の一般的な体格の持ち主だ。ダークブラウンの短髪、NCR軍で流行するアンカレッジカットされた髪型。まだ、右額にはガーゼが貼られているが、その他にも切り傷があつた。

運び屋にとつてその顔が自分の顔と思えず、怪訝な表情の男が鏡に移る。顔を撫でる様はキザな二枚目が自分の顔を眺めているようで、他者から見れば滑稽に思える。

「さ、こつちのソファーに座つて」

ミツチエルに言われ、洗面台から離れた運び屋はソファーに座る。近くの椅子に腰かけた彼は鉄製の箱から様々な模様の絵を出した。

「・・・・ロールシャッハテストか？」

「ほう、良く知ってるな。NCR軍じや、Vault-test適正検査の応用で性格検査をしていると聞くが・・・。やつたことあるのか?」「いや、分からん。・・・記憶がないから判るわけないだろ」

ふと、運び屋はロールシャッハテストを顔に付けたスーパーhei

ローを思い出すが、それがコミックヒーローだつたかは思い出せなかつた。そもそもN C Rは好きじやないと、無条件で嫌悪感を示すあたり、反体制派かギャング出身の可能性があると考え始め、運び屋は頭を抱える。それを察したようにミツチエルはマグカップに淹れたコーヒーを渡した。

「代用品だが、これで勘弁してくれ」

「ありがたい、俺は……」

「自分が極悪人かもとか思つてるんだろう？？？確かに記憶を失つた人物が後に犯罪者であつたり、失つた後の人格が変わつてることがある。まあ、大した問題じやない。現に君はベッドの近くにあつた9mmサブマシンガンを取らなかつたし、近くのジエットやサイコに興味を示さなかつたぞ」

「ただ、あれは故障しているがな。」

ミツチエルは付け加え、バラモンミルクを少量入れてコーヒーを飲む。運び屋は彼の話に納得する。もし、ギャングのような者は武器をすぐに調達するだろうし、薬物中毒者であれば、無意識のうちに中毒症状が出るはずである。

ミツチエルに続いて運び屋はコーヒーを飲み、ミツチエルの「では、始めるぞ」という声と共に検査は始まった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「よし、これで手持ちは全部だ」

ミツチエルは持つっていたチェック用紙に記入して、v a u l t – t e c社が定めた身体機能測定値と各分野の適応力が出る。ただ、具体的な数値が出るにはコンピューターに入力しなければならないらしい、チェック用紙を置く。そして、テーブルに置かれたファイル、カ

ルテを開いた。

「測定値を割り出すのに時間がかかる。少しグッズプリングスを見て回るといい。」

グッズプリングス。

ニューベガスに向かう旅行者がたまに訪れる場所。綺麗な放射能に汚染されていない豊富な地下水が利用できるウェイストランドでも稀な給水場所として知られる。だが、其れほど発展している訳でもなく、発展していないのはそこの住民がNCRに属したくないという明確な意思とゆつたりとしたスローライフを送りたいという願いがあつたからだ。加えて、農耕に適する土地や家屋が余分にないことから、戦前とほとんど変わらずにその原型を保っている稀な場所であった。

住民間の密接な協力関係と西部開拓時代から続くフロンティア精神が今日まで根付いていたことはグッズプリングスを大戦争後も生きながらせていた要因だつた。

「ここから出ていく前にもう一つたのむ。書いてほしい書類がある、君の病歴の書類だ」

「……覚えていない」

「チェック形式の書類だから、わからなければそれで構わない」

ミッチャエルから渡されたそれは糖尿病や銃創、骨折といったものから重度の放射線障害。関節を外した経験があるか否かなど様々。既にミッチャエル自身も運び屋の身体についての検査は終わっているが、念の為の問診に加えて些細な事から記憶が戻ることもある。運び屋はざつと目を通す。字は読めることから学力としてはまあまあであることが判る。記憶がないことを除けば、ウエイストランドで字が読めるとなれば大したものである。NCRでは学制を敷いているが、それでも識字率は50%未満。農村に行くほど、学制が無意味と判断する農民がおり、徵兵された時には二等兵として始まることが多い。しかも、文字がよめることでいきなり伍長や軍曹など、下士官に任命されることもある。

運び屋は殆どが「わからない」にチェックを入れると、残っていたコーヒーを口に含む。口にコヨーテの嗜みタバコと揶揄されるコーヒー豆にも似た植物の香りと強い苦みが彼の舌に染みつく。運び屋の苦い表情を浮かべたミツチエルは苦笑しつつ、彼の持っていた問診表を受け取った。

「よし、ひとまず完了だ。……と、これが君の持ち物だ。担ぎこまれた時に身に着けていたものだ。とは言つても殆どの持ち物は奪われてしまつたようだが」

ミツチエルは医務室の隅に置かれた鉄製の箱とv a u l t のジヤンプスースを彼の前に置いた。

鉄製の箱の中には、ステイムパックが四つと数キヤップが入ったバラモン製の財布、古ぼけたヘアピン箱に入った12個のヘアピンと一緒にピッキングを使う工具が一式。そしてモハビ・エクスピレス配達指示書。「A」という赤いスタンプが押され、重要度が高い荷物だと分かる。そして、おまけなのか、9mm弾のホロー・ポイント弾が込められたハイパワーの弾倉が一つ。

運び屋であれば、レイダーの身ぐるみを剥がすなら全ての物を搔つ攫っていくのに。とスカベンジャーのような思考をもつが、カーンズは着の身着のまま旅をする奴らであつたことを思い出し、高価なもの以外眼中になかつたのかもしれない。

「悪いがそのメモを見させてもらつた。親族を見つけようとしたんだが、プラチナチップについて書かれていた」

「それは構わない……、支社の方で一度報告しなければならないのかな……」

もしかしたら、俺のことが分かるかもしれない……。

運び屋はモハビ・エクスピレスのことは断片的にしか思い出せないが、物資運搬や重要度の高い荷物の運送を受け持つ仕事だ。社員はリクルーターを使って、腕の立つ傭兵や元軍人などをヘッドハンティングする。そのため、成功率は非常に高く、失敗しても金銭などの補填が利くウエイストランドでも有数の運送屋である。

ただ、「A」と記されたスタンプ

書類上からみるに、依頼の六番目にあたる荷物。この手の物は重要度が高く、六つのうち五つがダミーであり、第六の運び屋である彼が本命の荷物だった。それが奪われたとなればエクスプレスの信用はガタ落ちであるし、運び屋の業界的な信用も地に落ちたも同然だつた。

しかも、契約上エクスプレスの傭兵部隊が荷物の回収に動き出すことから、「プラチナチップ」と呼ばれる物品はかなりの品であることが分かつた。

未だに混乱している頭であつたが、ミツチエルは vault のジャンプスーツと共に携帯型端末を運び屋へと渡した。

「まあ、そう思い詰めるな。外に出るつもりなら、こいつを持って行つた方がいいな。これは pip-boy。私は戦前造られた vault で育つたが、住人はこれを付けていた。私には不要だ。君には必要だろう?」

「…………いいのか本当に? ここまでしてくれるなんて……」

「いくらなんでもお人よし過ぎないか?」

運び屋の喉から出かかったところでミツチエルは声を遮つた。

「なーに、 vault 住民は皆親切なんだ。儂も息子が居ればお前さん位の年頃だろうし、ちよつとした餞別さ。次にここに来るときは患者として來るのでなく、客人として来てくれ」

と言うとミツチエルはその時コーヒーゴ馳走しようと言うが、瞼みタバコと呼ばれる豆から挽いたそれを運び屋は好きにはなれず、来たとしても彼が淹れるそれを飲むことになるのかと苦笑する。照れ隠しもあつたのかもしれない。

ふと、運び屋の脳裏に見知らぬ男女の姿を思い出しが、それは口に出さず、運び屋は感謝の言葉を述べた。

「ありがとう、ドク・ミツチエル。この借りは必ず返すよ。」

「その時はベガスの上手いワインでも持つてきて旅の話を聞かせてくればいいさ。あとこれも」

ミツチエルは部屋の隅にあつた木箱を持つてくる。若干重そうで

あつたが、その箱はその辺にあるような木箱ではなく、旧軍の支給物資のペイントと管理番号が振られている箱だつた。開けてみると旧軍のではなく、現在 N C R 軍が使用する防弾板を入れた布製ベストだ。弾倉を入れるポーチも自由に動かすことが出来るそれには、まだ何も入っていないが、組み合わせ個人の使い勝手に合わせて自由に力スタムできる、旧軍の兵器システム研究所が考案していたらしい新世代の兵装だつた。

運び屋は知識だけは覚えていたようで、それを手に取つて見てみると防弾板が腹と背中に入れられていた。

「ミツチエル……これは？」

ミツチエルの好意でもらつたジャンプスーツと p i p | b o y 。これだけでもかなりお人よしの部類だが、目の前にあるそれはどう見ても医者が自衛のために持つているような代物でなければ、会つて間もない文無しに渡す義理もないのだ。ここまで的好意は逆に運び屋が不信感を抱くのに十分だつた。表情にはださないが、ドク・ミツチエルがただのお人よしの医者ではないことははつきりした。

運び屋の心中とは裏腹にミツチエルの口から出たのは意外な一言だ。

「ああ、これはここに来た放浪者が医療費の代わりに渡してきたものさ。言つとくがタダじやない。割引はするが、ちょっとしたトラブルがあつてな」

「……トラブルう？」

運び屋は思わず、オウム返しで聞き返してしまった。ミツチエルは困つたように笑みを浮かべる。これが運び屋の関わる最初の事件であつたとは、この時本人自身、そしてグッドスプリングスの住民は知る由もなかつた。

サニー・スマイルズという女性はグッドスプリングスでは紅一点のハンターだった。ウェイストランドでも小柄な方であり、外から来た者からは暴漢に襲われてしまうのではと危惧するような赤毛が特徴の小柄な女性だ。だが、グッドスプリングスに住む者達からすれば要らぬ心配だった。

彼女が愛用するバーミンライフルは5.56mmの小口径ライフル弾を使用するボルトアクションライフルだ。彼女が扱えば、700m先のゲッコーの頭部を弾けさせることが出来る。格闘戦もお手の物であり、爆発物に対してもそれなりの心得のある強い女性だった。そして何より・・・・

クウーン・・・

酒場の隣にあるビリヤードの近くの椅子に座ったサニーは甘えてくる愛犬シャイアンの頭を撫でる。こういう時は大抵、ゲッコーの生肉をやれば喜ぶ。それか、狩りにでも連れて行けば良い「散歩」になる。ゲッコー退治としてはシャイアンの右にでる者はいない、サニーの良き相棒だつた。シャイアンがゲッコーの群れに呐喊し、サニーが中距離から狙撃する。シャイアンの毛並みを整え、モフモフとしたその触り心地に彼女は頬を緩ませる。

「良い子ね、でももうちょっと待つてて」

そういうと、渋々と不貞腐れたようにビリヤード台の下に潜り込む。先程まで振り回していたしつぽは垂れ、項垂れたように伏せる。元々、野良犬だつたせいか、狩りを一日一回しなければ気が済まないらしく、バトルジャンキーなところがたまに傷だ。ただ、野良犬であつたためか、街に来たよそ者がいればすぐにわかり、番犬としても優秀だ。

Mr・ベガスのラジオでも聞き、ウイスキーでも飲もうかとサニーは隣のバー カウンターをちらりと見る。店主が酒を取りに行つてゐる

のか、カウンターには顔見知りの農民のみ。

—今ならバレないかな？

サニーの中の悪魔が耳元に囁く。キャップはあるがちょっとぐらいくすねても問題ないだろう。顔見知りの彼は口が堅い。告げ口なんて真似はしまい。カルマがちょっと位下がるが、バレてもツケで頼めばすむと思った。言い訳を思いつくと彼女はカウンターのウイスキーに手を伸ばす。

そんな時だった。

ウウー···

普段、狩り以外なら大人しいシャイアンだが、人見知りのためか、よそ者なら威嚇して吠える。気配を察知したのか、ビリヤード台から出てきたシャイアンはうなり声を挙げて、酒場の入口にたつ。其れが意味するのはよそ者の入店。

サニーは盗むことを諦め、扉の向こう側にいるであろう人物を待つ。シャイアンは今にもとびかかりそうな雰囲気であり、彼女は愛犬の様子に戸惑いを隠せなかつた。人見知りはいつもの事。だが、ここまで唸り声を上げるのは初めてだ。バーミンライフルはいつでも撃てるよう近づけ、腰のホルスターに収まっている9mmピストルを触る。

扉が開き、シャイアンはその人物に吠える。シャイアンは今にも襲い掛かりそうな勢いで吠え、「シャイアン！ステイ！静かに！」と叱る。しかし、その声は届かずにシャイアンは飛び上がり、現れた人物へと呐喊する。

「お、良い雰囲つ···うあ！なんだこの犬！」

襲い掛かった・・・のではなく、シャイアンはまるで久々の再会を喜ぶかのようにも見える。大型犬だつたためか、犬に押し倒される人物はグツドスプリングスで噂の男。頭を撃たれたにも関わらず、一命を取り止めた男は何年も飼っている主人にもしない歓迎を持つて迎えられた。そう、その唾液まみれの舌と甘噛みによつて。

「や、辞める！駄犬！俺の手を噛むなあ！」

Vaultスーツに身を包んだ男は犬にじやれ合う・・・もとい遊ばれているのか。自分自身にはあんな歓迎をしないシャイアン。サニーは嫉妬と羨望の眼差しを向ける。

シャイアンとサニーは親友であり、相棒だが「遊ばれる」ことはない。顔を擦りつけたり、ケガした所を舐められはするが、顔を舐め続けたり、甘噛みを執拗にすることはない。サニーはシャイアンに遊ばれる「運び屋」が羨ましく見えたのだ。

その後、彼のリハビリも兼ねて射撃練習やピッキング、サバイバル技術の復習では彼女の機嫌は頗る悪かつたという。

## 五話 Back in the Saddle

「ふうん、記憶が無いのね。シャイアンがここまで懐くなんてNCRの軍用犬訓練教官かそれともハウンドドック族のブリーダーかと思つた。」

「まさか・・・あんな野蛮人共と一緒にするなよ」

サニーと運び屋の出会いは悪かつた。それこそ、飼い主よりも外から来た余所者に懐かれるのだから、嫉妬心が芽生えることは仕方がないことだつた。寧ろ、犬に遊ばれているとも見えるが、舐められることも甘噛みされることもなかつたサニーにとつては羨ましいと思つてしまふ。反対に運び屋はようやく遊び飽きたシャイアンが離れると、酒場の外にある井戸から水を汲んで顔を洗つていた。

運び屋はその後、サニーから予備のライフルを受け取つて射撃訓練を行つた。彼は手慣れた手つきで設置したコーラ瓶を撃ち抜き、サイドアームで渡された9mm弾を発射するハイパワーを素早く抜き取つて人型的ヘダブルタップを食らわせる。サニーはその動きを訓練された人間であることを理解した。最初はNCR軍出身と思うが、その後の運び屋の動きはサニーから見れば、勇猛さで知られるシーザーレギオンの兵士を思わせた。

ゲツコーを捌く雑用を押し付けるため、彼に手製のマチエットを渡したが、ジャムつたライフルを捨ててマチエット片手にゲツコーに白兵戦を仕掛けた。その動きはまるで話に聞いたセンチユリオンのような剣捌き。実物を見たことがない彼女だが、サイドアームの9mmでは貫通しないのが分かると、マチエットでゲツコーの頭を切り裂き、他の群れも屠つていつた。その合間に襲われていた新しく入植した女性を助けて幾らかキヤップを貰い、ゲツコーの肉を調理する道具

の調達も兼ねて、廢墟化したグッドスプリングス小学校に入つて昆虫を駆除しつつ、キャップ稼ぎも兼ねて長年放置されてきた金庫をピッキングで開けた。

そして二人と一匹は狩った獲物の肉を焼いて昼食を楽しんでいた。

「…………案外身体が覚えてるもんだな」

「あんたがN C R軍所属だつたら、認識票持つてると思うけど」

「それがだな…………」

運び屋はv a u l tスーツの襟首のチャックを少し開け、そこからN C Rの認識票と思しき物が出てきた。だが、それは一つだけではなかった。通常、軍の認識票は一枚一組で支給される。戦前には兵士の生体情報をモニターして、戦死したかが司令部に伝わるようなシステムがあつた。しかし、大戦争後の影響によつてアナログなスチール製の認識票を頼らざるを得ない状況となつた。

N C R軍では、名前と、血液型、認識コードがプレスされる。二枚とも同じ打刻がなされ、片方は戦死報告時に。もう片方は遺体回収時に確認される。だが、モハビでは遺体回収はおろか、戦死確認すらできないことがある。

退役後も身に着けることを義務付けられており、退役兵や予備役兵は付けるのが当たり前だつた。もし、戦場で戦死すれば、それを元に遺族へ補償金が支払われる。加えて退役兵にも不慮の事故や事件で亡くなつても、遺族に保険金が支払われる。それを目当てに志願するものが多く、戦線を多く抱えるN C R政府にとつてはこの制度によつて兵力増強が期待された。

だが、運び屋の首に掛けられた認識票は一枚どころか6枚ほどあり、見てみれば全て異なる名前が記されている。

「仲間の死を無駄にしないお守りか、それとも武勲を確認するためか」「私から見るとどつちも在りえるわね…………」

サニーは運び屋を見る。見た目こそ vault 一つに NCR 軍が最近使うプレート・キャリアと呼ばれる防弾ベストを着ているが、NCR 軍の BDU も似合うだろうし、彼がレギオンのアーマーと槍、防弾シールドを持っていてもおかしくはない。

「NCR とレギオンについてどう思う？」

「NCR は資本主義に飲まれ過ぎて民主主義が腐った国家、シーザーはローマ帝国だな。それも崩壊直前の、レギオンは大嫌いだね」

「ううん、だとすると BOS?」

「あんな目的と手段を取り間違えてるアホと一緒にするな。」

良い色になつた、とサニーはフライパンに乗つたゲツコーの肉の焼き色を確認し、水ですすいだ皿にゲツコーを載せる。少し値は張るもの、NCR の岩塩鉱から採掘された塩を掛けて食べる。食感はゴムであり、味は鳥に似た味だったが、富裕層の食べる養殖鶏を食べたことのない運び屋は昆虫系よりはマシかと考えた。

一方、サニーは運び屋の各勢力の評価を聞き、記憶喪失の彼が一体何処の者なのか推測する。判断材料は乏しく、彼女自身グッドスピリングス周辺でしか、仕事をしないため聞いてみた派閥の人間にはあまり関わったことがなかつた。

「私はあなたが何処の兵士か分からぬわね」

「せめて自分の名前が分かればな」

「プリムのさらに西に前哨基地があるはずだから、そこに行けば何かわかるかもよ」

「そーか、あの場所ならもし俺が軍属なら通つた記録や俺の顔を見たことがあるはずだな」

「でもレギオンなら確実にお尋ね者だから、その場で射殺かもしれないわよ」

サニーはバックパックに入つていたウイスキーの入つたスキットルのキヤップを開けると、ゴクゴクと音を鳴らしながら、香りを味わ

うことなく飲んでいく。すると、既に半分以下だつたのか、不満そうに空になつたスキットルを振り、ため息をついた。

「あー、あなたが来たお陰でウイスキー盗めなかつたじやない」「俺のせいか。そもそも盗むなよ」

運び屋はゲッコーを切り分け食べていくが、横にいたシャイアンがそれを邪魔する。彼は片腕でシャイアンの首を固め、動けないようにして皿に乗せたゲッコーをフォークで刺し、食べていく。その間、シャイアンにもゲッコーを与えていたが、遊び相手のも食べたくなつたようだ。

食事も食べ終わり、血抜きを済ませた残りの身体を二人は担ぐと、命の燃料や命の水とも言える物を飲むためある場所を目指した。

「んで、運び屋つて呼べばいいの？」

「まあ、其れしか思い出せるものがないし……ああ、ここにエクスプレスの人間が来るだろ。そいつ等に聞けば何かわかるかもしけんな」

ゲッコーの匂いに耐えながらも、ふと運び屋はグッズスプリングスの雑貨店前にモハビ・エクスプレスの配達ボックスがあるのを思い出した。エクスプレスの運び屋はボックスを開けるための認証コードが与えられ、それを打ち込むことによつて開く仕組みとなつている。荷物の配達手順はいたつて簡単で、送りたい荷物と共に送料を付けて箱に入れるだけでいい。無理に開けようとすれば警報装置が作動するため、強盗まがいなことは出来ない。もし、する者が居たとしても、その場所の居住者が対応する他、場所によつてはオートタレットや警備兵によつて御用、もしくはその場で射殺される。

今運び屋は記憶を失つてゐるため、運び屋の仕事はできない。自身を運び屋と呼べと言つてゐるのは色々と矛盾してゐると、彼自身思うが、深く考へないようにした。

「でも、こちら邊はあまりこないわ。大口の商店もないし、コンボイも

こっちにはこないしね

「コンボイ？なんだそれ」

「え？ エクスプレスの運び屋でしょ。知らないの？」

モハビ・エクスプレスの運び屋なら知ってるはずのことを知らない様子だつたため、サニーは驚く。もしかしたら自分が運び屋を襲撃した人物の一人であり、運び屋ではなかつたのか。手元にあるエクスプレスの伝票が自分の持ち物でないのかと頭を過る。

だが、よくよく考えてみると、「記憶」が無いだけで「知識」や「技能」は覚えていた。つまり、自身の知識の偏り次第では自分の素性がわかるのではと運び屋は思う。そうして考えれば、運び屋はモハビ・ウェイストランドのことをあまりよく知つていなかつた気がした。情勢も少し記憶があるが、細かいところまでは知らない。

ふと思いつくのはNCR北部の詳しい情報を持つている。ニューリノやNCR首都のNCR（シェイディ・サンズ）の事。モハビについてはそこまで良く知らない。あるのは戦前のラスベガスを復興させた摩天楼、ニューベガスがあり、NCRの富を吸収している。そして、シーザーの魔の手が忍び寄っていること。

それを考えると、モハビに来たのは初めてなのではないか？

「たぶん、俺はNCR領内でフリーランスの何かをやっていたはず。荷物のためにこっちに来たとしたら頷けるだろう？」

「たぶんそうでしょうね。モハビの事ならサルーンのトルーディーに聞いてみて。あの人情報通だから……」

もう帰つて来る頃合いかな、と続けようとしたその時だつた。酒場に着いた二人は元採掘夫のイージー・ピートが何やら殺氣立つた雰囲気を出していくことに気づき立ち止まる。何時もなら椅子に座つてウイスキーを傾ける老人だつたが、ホルスターからすぐにマグナムを抜けるようにしておひ、鋭い眼光はプロスペクター・サルーンの窓越

しから見える男に向けられる。

中からは怒声が聞こえており、只ならぬ様子だつた。銃声が聞こえればピートはマグナムを片手に突入するだろう。グツドスプリングスは住民間の結束が強い。他の住民に危害が加えられれば、銃を片手に助けに行くほどだ。

「サニー、裏口から様子見。俺は正面から行く」

「分かつたわ、ライフルは返してね。」

ただ、運び屋は閉所で取り扱いが不利になるライフルは使わない。ホルスターに収まつた9mmピストルのスライドを軽く引き、弾倉内の弾丸が薬室に入つていることを確認した。ピートが彼を警戒した様子で見やる。

「じいさん、ちょっと見てくる」

「死ぬんじやないぞ、若いの」

ピートは彼の眼を見て確信する。彼は中にいる荒くれ者の悪党とは違う。例えるならば、西部劇の保安官のようだ。彼が今から入る酒場は昔のような両開き扉ではない。戦前の映画であれば酒場での殴り合い、更に発展すれば銃撃戦になるかもしれない。

運び屋が酒場に入ることで何が起こるのか、その時のピートやグツドスプリングスは知る由もない。

# 六話 The Capital Wasteland

d

少し時間を戻してみよう。それはモハビ・ウェイストランドが戦乱に巻き込まれる前。NCRとシーザーレギオンがフーヴァーダムを目指した頃。そして、双方の軍勢<sup>軍勢</sup>がダムにて戦闘を開始するまでの間、大陸の反対側にある<sup>イーストコースト</sup>北米東海岸ではBrotherfoot o f ste e1とスーパーミュータント、そしてエンクレイヴの三つ巴戦が繰り広げられていた。

2240年代、西部から戦前の遺物を探し求めてこの地にやつてきた、悪く言えば左遷させられたエルダー・リオンズ率いる部隊は旧ワシントンD.C.、「キャピタル・ウェイストランド」の中心に位置する<sup>ベンタゴン</sup>旧国防総省を占領。要塞化してテクノロジーの收拾につとめた。しかしD.C.都市部にはスーパーミュータントが闊歩し、人々を貪る地獄と化していた。人的資源と軍需物資の補給が無理であることに加え、キャピタルの惨状を憂うリオンズはウェイストランド人の志願兵を求めると共に現地住民の保護を行った。

「テクノロジーの収集と保全」を目的とするBOSは本来目指すべき人類の復興を忘れ、人類を再び核の炎に晒さないため、危険なテクノロジーを集めて管理することを信念としていた。そのため、リオンズが打ち出した現地住民の保護と現地志願兵の募集は保守的な隊員が離反する切っ掛けとなつた。

BOSはその他にも、現地の科学者が行っていた研究を保護した。放射能汚染された水を除染し、清潔で安全な水を永遠に作り出す装置の研究を進めており、ジエファーソン記念館に巨大な浄化施設を造り上げた。「浄化プロジェクト」と呼ばれる一大プロジェクトは、一度頓挫したもの数十年の時を経て完成に至ろうとしていた。

しかし、その研究が実る直前、それを奪うようにして旧世界の亡靈が現れた。

大戦争直前、極右政治家や軍人、資本家などの秘密組織「エンクレイヴ」は大戦争が起ることを予期していた。そのため、核戦争終結後にアメリカを復興させるため、首脳陣や科学者などを安全なシェルターに退避させ、生き延びた国民と国土を再建しようとしていた。しかし、あまりにも大きな被害と核の冬によって、エンクレイヴは活動することはできなくなっていた。

西海岸のオイルリグを拠点にしていた彼らは、核兵器と戦前の生物兵器によつてミュータントと化した生物を目にした。巨大化した昆虫や双頭となつた牛。放射能に汚染された人間が発狂し、腐肉を食らう食人鬼・・・。こうした変化はマリポーサ基地で研究されていた強制進化ウイルス<sup>F</sup><sub>E</sub><sup>V</sup>が大気に拡散したことによつて引き起こされた。

エンクレイヴ首脳陣は変異した生物を浄化するため、改良したFEVを偏西風に乗せて全ての生物を死に至らしめようとする悪魔の計画を実施しようとしていた。しかし、“選ばれし者”より、オイルリグは壊滅。首脳陣は全滅し、エンクレイヴは西海岸において滅んだかに見えた。

しかし、東海岸において残存するエンクレイヴを結集した「ジョン・ヘンリー・エデン」大統領はアメリカ合衆国の首都であつたワシントンD.C.を占領し、アメリカを復興させるため、ジエファーソン記念館の浄化プロジェクトに目をつけた。清潔で綺麗な水はキャピタル・ウェイストランドにおいて貴重であり、この浄化プロジェクトを主導する者がキャピタルを支配すると言つても過言ではない。ジエファーソン記念館がエンクレイヴに占領されてから、BOSとの間で緊張状態が続くことになる。

これが「ゲーム」であれば、悪の組織エンクレイヴを打ち倒す正義の味方BOSとしてそれなりの物語となるだろう。だが、それだけでは終わらなかつた。

エンクレイヴは西海岸から逃れてきたグループと東海岸で活動をしていたグループの派閥争いが続いていた。西海岸派と呼ばれる彼らは武力によつてウェイストランドを鎮めていく選民思想に則った政策を推し進めようとしていた一派。対するのは、ウェイストランド人をアメリカ国民と見なし、稳健な方法で統治を進めていく東海岸派

に分かれていた。双方は仮想敵であるBOSの存在が在りながら、互いに牽制を続け、とある事件を切っ掛けに争いに幕を下ろすことになった。

### ジョン・ヘンリー・エデン大統領の暗殺。

キヤピタルの占領と治安組織設立のパートナーに突如、狙撃された大統領は人間ではない血を吹き出しながら倒れた。これをきっかけに東海岸派は武装蜂起。西海岸派による暗殺に依るものと見なし、西海岸派の軍人らを逮捕した。様々な抵抗があつたものの、東海岸派の指導者アウグストウス・オーダム大佐によつて順調に浄化された。しかし、暗殺事件の首謀者が暗殺された本人によるものだとは、ことが終わるまで誰も気づかなかつた。

ジョン・ヘンリー・エデン大統領の正体。それは、ZAXスーパー・コンピューター。0十1の集まりであり、無機質な人工知能だつた。連邦から鹵獲した第三世代人造人間の技術を利用して大統領の依り代を作り出し、エンクレイヴの象徴になつていた。

アウグストウス・オーダムの傘下の部隊はジエファーソン記念館を強襲。エデン大統領は前大統領の野望である改良型F.E.V.を使って地球上の生物を皆殺しにする計画を実行に移した。しかし、"Vault 101"の住人"によつて阻止された。

人類滅亡の危機は免れた。Vault 101の"あの二人"によつて……。

キャピタル・ウェイストランドは変わった。

ワシントンD・C・都市部を中心とするキャピタルは新アメリカ合衆国と名を変え、エンクレイヴの東海岸派は共和党と名を変えた。メガトンやリベットシティーなどの集落はメガトン市・リベット市と名を変え、周囲には畑と養殖場が耕され、食糧自給率が劇的に上がった。多くは圧政ではなく、善政を敷き半自治的な統治を行つた。

そして、仮想敵であつたBOSはエルダー・リオンズの号令の元、「鋼鉄党」と名を変え

政治団体として活動を始めた。大量破壊兵器や高度なテクノロジーの戦争利用を反対する政党として活動を始め、武闘派BOS隊員はエンクレイヴの援助の元、テクノロジーの保護のため各地を転々と調査し始めた。

新アメリカ合衆国はエンクレイヴの名前を残しつつも、嘗てのアメリカを復活させるため勢力を伸ばしていく。そして、近づきつつあるNCRとシーザーの影。新アメリカ合衆国はその進んだ科学技術と軍事力を背景に介入し始める。

エンクレイヴがどのようにして三つ巴の戦いに介入していくのか、それは四者共々どうなるか誰も知らない。

「ねえ・・・ヴィクトー。こんな格言知ってる? 【勝利は最も根気のある者にもたらされる。】 つて」

「【データ検索中・・・】・・・あゝ確かナポレオンだつたか? つーか、それガル○ンのダージリンかよ」「そう(笑)、我慢強くないと勝てないってことね。ヴィクトーも早いと嫌われるわよ」

## 七話 Ghost Town Gunfight

「下手に出るのもこれまでだ！すぐにリングを引き渡さないなら、仲間との町を焼き払つてやる。分かつたなババあ！」

「そうね、覚えとくわ。何も買わなかつたら出て行つて。他の客の迷惑よ」

——それと、ババあは辞めて頂戴。壁の剥製の仲間入りする？

と壁にあつたビックホナーとデスクローの剥製を指さす。いつたいどうやつて仕留めたのか分からぬデスクローの凶悪な顔に脅していた男は目を丸くさせる。一体どうしてこれがここにあるのかと。ふと運び屋はカウンターの壁に掛けられた対物ライフルを見てババあと呼ばれた壯年の女性がとんでもないハンターだと気が付いた。

凄腕の赤毛のハンターといい、デスクローを仕留めるサルーンの御主人など、運び屋はグツドスプリングスが独立町として存続しているのは何故か分かつた気がした。

悪者とはいえ、助け船を出してやるか。

運び屋は気が進まないが騒いでいる矯正収容所と書かれたボディーアーマーを着たアフリカ系の男が無茶して銃を抜いたらここ

でOK牧場の決闘が始まってしまう。ドックミツチエルが話していた“やつかい事”とはこの事かと運び屋は内心ため息を漏らした。

「おい、そこの。要件を伝えたなら帰ってくれないか? ウイスキーが飲めないんだが・・・」

「んだけど、てめえ。関係・・・」

すつこんでろ、と続けたが運び屋の発する覇気と武装に言葉を発せなかつた。見た目は温室育ちと見た者を思わせる青い v a u l t スーツだつたが、その上からはN C R 軍が近年正式採用したプレーントキヤリアと呼ばれる防弾ベストに身を包み、運び屋の手はホルスターのハイパワーに伸びていた。

「関係ないな。だが、ウイスキーを飲む場所で暴れるならこっちも考えがある」

裏口には赤毛のハンターがバーミンターライフルを持つており、いつもでも男に向けられる体勢になつてゐる。そして、カウンター席に座つた農夫の男は既に44口径マグナムが握られ、カウンターに置かれていた。1対4。

どう見ても劣勢であることは明らかだつた。男は踵を返すと、出口へと足を向ける。

「覚えとけよ、期限は明日の11時だ。俺らパウダーギヤングはて

めえらがリングを渡さなければ、ここを血祭りにあげてやる！」

「その時はお前さんの血で風呂を入れるさ」

男は捨て台詞を吐くと出口へと小走りで出ていく。運び屋の売り言葉に買い言葉の台詞が彼に届いたか分からなかつたが、サルーンの中にいた人は運び屋の台詞に苦笑する。一番、其れを笑つたのは男と対していた女性であつた。

「ハハハハハツ！ 言うわね！ 貴方、なかなか面白いわ」

「いや、それほどでもないよ。それにしても対物ライフルでデスクロードを仕留めたのか？」

「ええ、北の裏街道から来たはぐれデスクローがこつちに迷い込んできてね。私が胸を撃ち抜いたのよ」

その時の事を誇らしく思つたのか、彼女は胸を張つてドヤ顔を決めた。

「私はトルーディーよ。このサルーンの主人、貴方は話題の運び屋ね」

「ああ、運び屋でいい。名前はない」

「あら、無いなんて面白いわね」

「違う違う、忘れたのさ。撃たれてね」

運び屋はカウンター席に座ると、棚に戻つたトルーディーは棚からショットグラスとウイスキーを取り出した。

「これはおごりよ。銃はカウンターの下だつたからね」

「それで・・・あの男は?」

「あれはジョー・コップ、NCRCFの糞パウダーギヤングよ」

トルーディーの話によれば、I-15号線や95号線から来るキヤラバンからみかじめ料を徴収したり、気に入らない者が居れば皆殺しにするレイダーにも劣らない彼ら。そもそも、彼らは放棄されていたネヴァダ州立刑務所をNCR軍が接收し、労働力として連れてきた犯罪者だった。鉱物資源輸送のための鉄道路線建設のために連れてこられた囚人達であったが、シーザーレギオンとの戦争や囚人に宛がわれる食糧の減少など、彼らの不満は最高潮に達していた。そして、NCRとレギオンの戦況が膠着状態になつた現在。囚人達は暴動を起こし、NCRCFを完全に制圧。I-15号線とプリムまでの道路は完全に遮断されていた。彼らは強奪したダイナマイトから「パウダー

「ギャング」と名乗り、ここいらを好き放題している荒くれ者達だった。

そして、その略奪から逃れたクリムゾン・キヤラバンのリングと言  
うキヤラバントレーダーは数人のギャングを撃ち殺した後、多勢に無  
勢で逃走を図り、グッドスピリングスに逃げ延びる。そして今は西の  
ガソリンスタンドに息を潜めているとのことで運び屋は追加で頼ん  
だイグアナの角切りを頬張るとため息をついた。

「あいつ殺しておけばよかつたよ」

「やめてよ、するなら外でやつて」

「でも、あいつを殺したら仲間がくるから面倒よ」

ジョー・コップは街の外れの廃屋に仲間を集めており、その数は1  
0人ほどだという。グッドスピリングスの人口を考えても何とか擊  
退できる数だつたが、グッドスピリングスの住人は乗り気ではなかっ  
た。事の発端はクリムゾン・キヤラバンのリングが逃げてきたことに  
始まるので、彼を引き渡せば済む話である。これがもし保安官や警察  
官であれば、給与や表彰を受けることだろう。だが、敵はパウダー  
ギャングであり、彼らを倒してもそこまで良い金銭は得られない。そ  
れどころか人数が多いため、仲間が流れ弾で死ぬかもしれない。はし  
た金より命なので、リングを引き渡して解決なんて思うのも無理はな  
い。

「で、どうするんだ？」

「あいつらを殺しておかない、どの道みかじめ料と称してキャップを巻き上げてくるわ。奴ら本隊から逸れて来たらしいし、奴らを仕留めておけば時間は稼げるわ。奴らが仕返しを考える前にN C R兵が掃討しに来るでしょ」

「そうねー、やつてもいいけど。勝算はあるわけ？これでアラモの砦みたく皆仲良く死ぬのはごめんよ」

運び屋はここに居た女傑二人の反応を見るに乗り気ではあるが、勝機がなければ動かないつもりだろう。サニーはまだ若く血氣盛んなので、勝算がなくとも相棒の犬と一緒になつて弾丸の嵐でも戦うだろう。彼らは無事かもしれないが、他の住民が生き残れるとは限らない。トルーディーはサルーンの女主人にして、グッドスピーリングスのまとめ役であつた。保安官や市長といった肩書ではないが、町の中心人物として村を支える女性だ。彼女が戦う号令を出せば、町は戦うだろう。

運び屋は町の人々に武装させ、ダイナマイトを準備させれば完璧だと考えた。シーザーレギオンがN C R軍輸送車両へ攻撃を仕掛けるようなE O D（即席爆弾）を使う案を思いついたが、必ず勝てると言う保証はない。そもそも、ダイナマイトの準備が必要だし、ドックミッチエルから医療品を。隣の百貨店からはアーマーや弾薬を徴発しなければならないだろう。

運び屋は明日の11時が決戦であることを確認し、町の有力な人々をサルーンへ集めようと提案しようと口を開いたその時だった。

「話は聞かせてもらつたわ!!」

入口の扉が音を立てて開かれるとともに声の主が彼らの目の前に現れる。女性のような声であつたが、その声は人が発したのではない、スピーカーを通して発せられ、その異様な声にカウンターに居た人々の視線が集中する。

思わず助つ人が現れたのか。運び屋は若干の期待と幾ばくかの疑りを持ちながら、その人物を見る。

だが、人ではなかつた。

濃緑色の塗装の防弾装甲に唸るアクチユエータ。プロテクトロンのような短足ではなく、人のようなスラリとした足。鋼鉄の身体を持つロボットだつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

そこは照明が消された部屋。

コンピューターの光のみが照らされたその部屋の電話が鳴り響いた。

大戦争から二世紀余り。呼び鈴を鳴らす電話の数は少ないが、保存状態が良好なマホガニー材の机に置かれている所はもつと少ない。もしかしたら、N C R 大統領官邸にも無いかもしれない其れは一将校の執務机として使われている。

その机と一緒に置かれた椅子に座った男は電話を取つた。仮眠を取つていたらしい彼は眠たい眼を擦り、受話器を充てる。

「はいはい・・・ああ、久しぶり。シェイディーサンズはどうだい？  
へー、そりや首都開発の役人に聞かせたら卒倒しそうだな。行つてみたいね」

男の親しい間柄の人物らしく、彼の表情は喜びに満ちていた。

「ニユーベガスか、順調だよ。そつちの連絡係も色々手をまわしてくれて助かってる。ベガス方面軍の兵士は可愛そうだよ。オリバーは無能だ、残念ながらね」

ニューベガスに展開している方面軍司令はリー・オリバー将軍だった。しかし、その将軍に対し「無能」と言えるのは中々いない。N C R 陸軍は巨大組織であり、告げ口して誰かを追い落とそうとする者も

いるはずである。だが、その男は手元のニューベガスに展開する部隊の情報を見つつ、呆れたような口調で話し始める。

「他にも戦線があると言うのにハウスに擁取されてるんだ。もう少しやりようがあるだろうに。物資の供給も滞っているから、カバーカンパニーを通じて障害を排除しないと」

「あとはハウスにどうやつて退陣してもらうか、一ついい方法があるてな。そろそろ、ロボット以外にも使う頃合いだと思う。明らかに俺達から選抜したメンバーだとバレる可能性があるから、こちらに引き込めそうな人員を一人見つけた……。一応、こっちから一名サポートに回している。何とかなるさ」

男は近くのコンピューターの電源をきり、席を立つ。光が殆どないため、男の恰好は分からぬが、佇まいからして何処かの軍将校に違ひなかつた。

「ああ、そつちも頑張れよ。それじゃあ」

電話を切り、男は自身の後ろを振り返り、隅にあつたコンソールのボタンを押す。男の後ろにあつた壁は窓だつたらしく、外側の遮光壁が取り扱われる。そして見えたのは、無数の星が漂う何もかも吸い込みそうな漆黒の宇宙（そら）だった。

グツドスプリングスの名物は何か？

そう聞かれれば、何人かはありきたりな答えを述べる。

新鮮な水、のどかなスローライフの町、西部開拓の名残がある田舎、時代から忘れ去られた町 etc…。様々な答えが出る中で、たまにこういうものも出てくる。

### 「変なカウボーイロボット」

セキュリトロンと呼ばれる、大戦争前でもお目にかかることはない珍しいブラウンテレビが内蔵されたロボットがグツドスプリングスに滯在している。それも、どうやらニューベガスの警備についていたロボットとは一味違い、本当にカウボーイのような男がスクリーンに映つており、声も警備の声とは違つて渋いおっさんの声であつた。名物とは言わないまでも、モハビ・ウェイストランド界隈では異色とされるが、それこそウエストサイドにいる人と暮らすスーパー・ミュータントや雪が積もる山にひつそりとあるミュータントの町、ミード湖の上で暮らす住民など、ウェイストランドで変なものはかなりある。はぐれセキュリトロンなどそういうお目にかかるものでもないが、グツドスプリングスの名物として観光する人間など、このご時世いる

はずもない。

だが、ついこの間新たな仲間が加わった。

濃緑色の旧アメリカ陸軍塗装のロボット。禿げた塗装や陸軍のはぐれロボットなどウェイストランドではたまにあることだ。東海岸のような荒廃しきつた地域では多くあるが、モハビでは極低確率である。

モハビは各勢力の戦闘が起こり得るが、とある東海岸の地域と比較しても豊かである。それこそ、ニューベガス周辺に大戦争後に誰も入ってはいない軍事基地や施設などは少ない。殆どが何処かの勢力に接收され、備品であつたロボットを運用するためか、放浪するはぐれロボットの個数は限られる。

しかし、そこにいるロボットはモハビの人々が知るそれとは違っていた。女性のようなフォルムを持つ、人間よりも若干高めの身長を持つそれは一般的なロボットと違つて人に近い。

そのロボットはアサルトロンと呼ばれるロブコ社が開発した陸軍向けの戦闘ロボットとして採用されたモデルだ。アサルトロンの「assault」は強襲や突撃と言つた意味の英単語であり、アンカラッジ戦線におけるロボットの火力支援などの観点を取り払い、純粹な兵士の代替え的兵器として作られたそれは、生身の人間では戸惑うような第一線で敵陣地に強襲するように設計されている。他の戦闘ロボットと違い、白兵戦などに特化され、両手にブレードを装備しているのが一般的である。

だが、グッドスピリングスにいるそれは明らかに違うものだつた。

「トルーディーさん、一杯ください！」

「あんたに売れる酒はないよ……そもそも飲めないでしょ」

呆れた様子のトルーディーは核分裂バッテリーを棚から出す。人間のような振る舞いで、件のアサルトロンはカウンターの運び屋の隣に座った。

「お前、アサルトロン……？」

運び屋は半信半疑のような面持ちで問いかける。運び屋の知識はまだ残っているが、彼自身その知識も間違っているのではないかと思わされた。そもそも、アサルトロンは一級線任務に用いられるため、大戦争後のアメリカではほとんどお目にかかることはない。殆どが東海岸に配備されていたためであるが、N C R軍でもあまり知る者はいないだろう。

運び屋の知らないことであるが、東海岸における激戦地「ワシントンD・C.」では多くのアサルトロンが配備されたが、その殆どが中国軍上陸部隊に使用され、2277年において現存する機体はほぼないと言っていた。多くは主戦場とならなかつた東海岸、ボストンなどの地域では相当数のアサルトロンが残つている。

米国内で展開する米軍一線級の精銳部隊は西海岸など太平洋から中国軍が攻めてくると想定し、配備されていた。逆に東海岸には首都

防衛の戦力を減らし、人よりも優秀なロボットに転換していたのだ。そのため、西海岸でアサルトロンのような高性能を誇る最新型殺戮マシーンが置かれていることはない。

辛うじて、運び屋は記憶の片隅。強いて言うなら「知識の片隅」にロブコ社の軍向けの製品カタログにアサルトロンがあつた。だが、運び屋の知識が正しければアサルトロンの両手は物を掴むための三本アームかブレードだつたはずである。

しかし、目の前のアサルトロンの腕は人間のような五本指であつた。器用にトルーディーからもらつた核分裂バッテリーを何かの機器に接続し、背中のソケットに機械から延びるコードを接続する。

「ええ、私はアサルトロンです。と言つても改良型ですが……これ中々旨いですね」

「バッテリート味するのね、驚きだわ」

運び屋はアサルトロンがする人間のような素振りに驚き、トルーディーはバッテリート味があるのかと半ば呆れている。現実なのかと運び屋は考えるが、その答えは当のアサルトロンが答えを出す。

「私の演算能力はそこらの古いロボットとは格が違います。アサルトロンは単独での作戦遂行能力を兼ね備えているので、高度な人格AIが装備されているんですよ」

「そ、そうか……」

製造から200年経つていれば、十分古いだろうに。と運び屋は思う。

「私より変な奴がいますけど、彼は外でお留守です」

「彼？」

運び屋は外にいると言っていた彼とは何なのか。疑問の声を上げるが、トルーディーが説明を始める。

「ええ、彼女より前に来たセキュリトロンのカウボーイが居てね。いろいろ手伝ってくれるけど、なんか不気味なのよね」

もう一体のロボットはニューベガストリップ地区の警備をしているセキュリトロンだが、カウボーイのような言い回しで何か不気味さを醸し出しているとトルーディーは嫌々そうに語る。サルーンの主人である彼女は一度もセキュリトロン一ヴィクトターを店に入れたことはないが、つい最近やつてきたアサルトロンの彼女は店に入れたらしい。

「なんでこれはいいの？」

「だつてこつちは感じがいいわよ。あなたも一緒に酒飲めばわかるわ」

「いや、飲めないだろあれは」

—あ～ロブコ社純正の核バッテリー旨～！

こんなロボットは普通いない。バッテリーの味を認識して感想を言うなんて、ロボットとしては廃スペックじゃないか？

運び屋はまじまじとそれを見る。若い女性のような声とは裏腹にその身体はロブコ社が設計した戦闘用マシン。対物ライフル以外ならば、弾丸を弾き返すのだろうその装甲は、幾重の年月を経て、塗装は剥げ落ちている。そんな運び屋の視線に気が付いたのか、セキュリトンの顔が運び屋に向いた。

「何じつと見てるんですか。見たって一緒に寝てあげませんよ」

「誰もお前とやりたいとは言つてないよ！そもそも、お前に欲情なんかしないし」

「そうなんですか？噂だと、ロボット娼婦を探しているという話を聞いたことがあるからもしかしたら・・・」

「そんな変態と巡り合う確率は多分Mr.ハウスがロボット彼女作つてるのと同じぐらいだよ」

世界広しと言えどもロボットに欲情する奴の気が知れないと運び  
屋はトルーディーからもらつたウイスキーを煽り、ため息を吐く。

「そんな辛氣臭い顔しないでください。人間ならもつと元気を出さな  
きや」

「ロボットらしからぬお前に言われたくない」

「酷いですね、男女差別も甚だしい！」

「いや待て、お前はロボットだろ」

設計し、人格をプログラムした人間の顔が見たい。呆ながらも  
ウイスキーを煽る運び屋に同情してか、イグアナの角切りを出すトル  
ーディー。彼女もまた、その異様なアサルトロンに驚き、呆れたの  
だろう。そして、慣れてしまつたに違いない。

パウダーギヤングをやつつける作戦を考えていた矢先、乱入してき  
た闖入者。その型番も人格もおかしなロボットは何食わぬ顔で、そも  
そも顔と言つた顔は高出力レーザーへッドなため確認できないが、力  
ウンターで核分裂バッテリーから電力を得ている。

「ああ、忘れてました。私はアサルトロンのウリエルです。」

「いや、ロボットが要件を忘れるな」

アサルトロンのウリエルと名乗るロボット。運び屋は差し出された鋼鉄製の手を渋々と握る。

「あ、握手したからって惚れないでくださいね」

運び屋は自己紹介早々、相手の顔面にマチエットを振り下ろしたくなる衝動に駆られたが、これからそれが幾度のなく繰り返されることになるとは、運び屋自身思っていなかった。

ただ一人、いや一つを除いて。

## 九話 Ghost Town Gunfight III

ジョー・コップという男は凶悪な男である。それは旧世界の法律に照らし合わせても、NCRの法律に照らし合わせても同じことだろう。

武装強盗に暴行・殺人・麻薬所持・強請・強姦・反乱……数え上げればキリがない。NCRがそんな彼を許すはずもなく、逮捕。射殺されなかつただけ、運が良かつたと言える。ニューリノでの犯罪撲滅キャンペーンによつて、逮捕・送検された彼はNCRCFに連れていかれた。一応、罪人にも人道的な扱いを心がけているNCRであるが、必要な労働力として囚人を利用した。

幾つかある矯正収容所の一つがグッズプリングスとスローンの近くにある旧ネヴァダ州立刑務所であつた。戦前は軽犯罪を犯した囚人が収容されていたのだが、現在ではなりふり構わず、この刑務所に収監されていた。

Mr・ハウスから破格の値段で購入した刑務所には、NCRから連れてきた多数の犯罪者が収容され、NCR鉄道輸送網構築のための労働力として扱き使われた。しかし、NCR治安警察から派遣された刑務所長の判断ミスによつて、全てが変わつてしまつた。スローン近辺の鉄道施設のために使うダイナマイトが囚人達に強奪され、近隣に駐屯する看守部隊を一掃。囚人たちの反乱により、NCRCFは犯罪者達の手に落ちたのだ。

彼らは自分たちのことを「パウダーギヤング」と呼び、I—15号線は完全に遮断され、そこをキャラバンが通ろうものなら、ダイナマイトと弾丸が吹き荒れることになる。今回の一件もパウダーギヤングの彼らがリング達クリムゾンキャラバンを襲撃し、仲間を殺されたから仕返しにグッドスプリングスまで追いかけてきたのだ。

まともな人間ならどちらが悪いのか察しがつく。グッドスプリングスの住民は中立的な立場であったが、出来ることなら弾丸の雨を降らせてやりたい。しかし、彼らパウダーギヤング達は多く、敵対すれば逆に滅ぼされかねないのだ。

ただ、状況は変わりつつある。リングがもたらした情報によると、NCRがNCRCF鎮圧のために部隊を差し向けるらしく、I—15号線の掃討作戦を始めるらしい。なので、ジョー・コップのグループを皆殺しにすれば、NCRの部隊が来るまでの合間を稼ぐことが出来るだろう。

パウダーギヤングとしても、逃亡のための物資を確保する必要があり、軍備や補給が整っているNCR軍と一戦交えようとは更々なかつた。

「よし、リンクがいようがいまいがあの町は俺たちのもんだ。男は殺して女は犯せ。」

「OK、ボス。俺はあの赤毛を頂くぜ」

「いいぜ、俺はあのババあが泣きわめく姿が見てえからよ楽しみだぜ」

リングゴはトルーディーの泣き叫ぶ姿が見たいと思い、持っていたNCR工廠で製造されたM16にマガジンを差す。チャージャーを引き、次弾を機関部に装填すると、ジョーは噛んでいた噉みタバコを地面へ吐き捨てる。

「フランシス！今何時ぐらいだ？」

「11時前でさ、だんな早くやつちまいましょうぜ」

ジョー・コップ率いるパウダーギヤングの一派。まだ名前は決まっていないが、本隊とは連携を取りつつも、NCRの増援部隊によつて鎮圧されていることが分かつていて、ジョーは見晴らしの良いグッズスプリングスを拠点にしようとを考えていた。防衛にも適しており、出ていくなら四方向から行ける。グッズスプリングスは彼らにとって格好の餌食であり、新たな拠点として最適だった。

看守が装備していた戦前の防弾ベストとNCR陸軍払い下げのM16、通称サービスライフルは木製ストックの精度の悪い安物だが、5・56mmの小口径ライフル弾を使用するそれはピストルやショットガンと違つて扱いやすい。

「よおし、お前ら！行くぞ！奴らをFuckしてやるぜえ！」

下品な雄叫びを上げながら、グッズスプリングスの中心へと勇み足で進む。総勢十数名のパウダーギヤングは、スカイダイビングの集合場所から歩いていき二手に分かれると、コップは入口の看板に到着した。

「おい、なんか変だぞ」

普通なら、縛られたリンクゴとこちらを警戒するグッズスプリングスの住人がいるはずであつた。交渉しようとした瞬間、2方向から強襲して略奪する手はずである。だが、グッズスプリングスはまるで死んだように静まり返っていた。

「誰もいないとはどういうことだ？」

ジョーは近くにいた男二人を偵察として前進させた。だが、酒場あたりでうろちよろしたあと、雑貨店と酒場に一人ずつ入っていくが、何も反応が無くなってしまう。

「あいつら独り占めしてるんじゃないだろうな？」

「そうだつたら奴らの腕ぶつた切つてやるさ」

ジョーの怖いところは仲間の囚人でさえ、容赦なく殺すところにあつた。仲間を殺されれば容赦せず、執拗に追い詰めて残虐な殺し方を好んでいた。だが、その残虐性は粗相をする部下や仲間にも向けら

れ、抜け駆けした部下を容赦なく撃ち殺したりすることがあった。それゆえに、恐怖によつて他の囚人を縛り付けていた。

「よし、おまえら。あの二人が抜け駆けしてたら殺せ。村人が居たら知らせろ。どうせ、どっちかで籠城してるんだろうさ」

ジョーは他の小学校から攻めるグループに攻撃の命令をだし、近くにいる仲間たちにも号令をかける。

だが、その号令をかけた瞬間、目の前に何かが弾け、視界が赤く染まる。

「なん……だ？……これ…」

べつとりとついた液体を拭うと真っ赤に染まり、ゆっくりと額に触れる。そこにあつた皮膚には穴が開き、ゆっくりとジョーの意識は途切れる。そして、彼の傍の地面が噴火する。

ニトログリセリンなどの爆発物を混合させ、さらに殺傷能力を上げるために鉄球や金属を巻き付けたそれは、爆発力によつて周囲に飛び散り、彼らの身体を抉る。一瞬にして六名前後のパウダーギヤングは文字通りミンチ肉となつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「本当、あなたがいてくれて助かつたわ」

「俺はちょっと爆弾を作つて、奴らが来そうなポイントに人員を配置しただけだよ」

「まああなたが居なくとも何とかなつたかもしけないけど。もしそうだったら、仲間の死体がそこらに転がつているわ」

プロスペクター・サルーンにはグッズスプリングスの住人が多く集まつていて、その中心には事件を解決に導いた運び屋の姿があつた。ジョー率いるパウダーギヤングの一派を全滅させ、グッズスプリングスの住人を一人も死なずに済んだのだから、祝わなくて何をするのだろうか。

トルーディーはラジオが直つたことに加え、今回の騒動の解決によつて店の驕りとした。デスクローの討伐と同じような熱狂ぶりが久しぶりにやつてきたとあって、グッズスプリングスの小さな酒場は宴会場となつた。

何人かの農夫はビール片手に腕相撲をおっぱじめ、あるビッグホーナー飼いはビリヤード台を占領していびきを搔いていた。ドッグミッチエルはかつての vault でポーカーを齧つていたため、数人の農夫相手にキヤップを巻き上げていた

「運び屋さんはもつと自分に自信を持つてくださいよ。それにジョー・コップをヘッドショットして、ダイナマイトを吹き飛ばした

のなんて神業！」

「・・・いや、ウリエル。お前のほうがすごいと思うぞ・・・4人いつ  
べんにサムライソードで角切りにしちまうんだから」

運び屋の狙撃のセンスは卓越したものであつた。地面に仕掛けられたダイナマイトを酒場の屋根から狙撃したのだから。だが、ウリエルも凄まじい。小学校方面からやつてくる六人組のパウダーギヤングを白兵戦で斬り倒していくのだ。ロボットがここまで早い動きをしたのは見たことなく、更にサムライソードでパウダーギヤングの奴等を鱗切りにしたなど、目を疑うような光景だつたと近くにいた農夫はビールを片手に武勇伝を語り出す。

「で、運び屋さんはどこに行くの？ チェック柄の男を追うつもり？」

「当たり前だ、モハビ・エクスプレスの傭兵は本気<sup>マジ</sup>でヤバいからな」

サニーはウイスキーを傾けながら運び屋に問いかける。彼女の顔は自身の赤毛に近い程赤くなつており、小柄な体ではアルコールを分解できていない様だつた。

「そんなにヤバいの？」

「どある人が言つた『エクスプレスの傭兵と戦うなら、BOSの機甲兵の方がまし』』

「何それすごい」

BOSの機甲兵。戦前の歩く戦車であるT51bパワーアーマーを着て、重機関銃や光学兵器を使う彼ら。50口<sup>キャリバー</sup>径の弾丸でさえ弾

く装甲は、N C R歩兵からは悪夢とされる。ただでさえ、コストの高い対戦車ミサイルやロケットを使わなければ倒せない奴らであり、背後のパワー・モジュールや頭の光学サイトを破壊するのが効果的だ。それでも、攻撃能力は凄まじい。そんな化物よりも、モハビ・エクスプレスの傭兵達のほうが恐ろしいとは如何なるものか。

「他にもレギオンに荷物を売ろうとした奴がいて、売った運び屋と取引に応じようとしていたレギオンのセンチュリオンをもフルボッコにしたとか・・・・」

「凄いわね・・・・じやあ、プリムで色々するわけか。土下座とか腹切りとか」

「いや待てジャパニーズヤクザな事したくない」

運び屋がふと浮かんだのはニューリノのヤクザ達。彼らはそれこそ侍のような仁義だと力を大切にする奴らだが、エクスプレスはそうではないと思う。そうではないと信じたい。

ふと、侍と聞いて思い浮かべるのはウリエルだが、あの剣術は何処で習ったのか。ロボットならそうしたプログラムがあるはずで、どこでインプットしたのだろうか。

嘗ての大戦争前、前哨戦ともいえる日本と中国の戦争があつた。その時、多くの日本人がカリフオルニアに難民としてやってきたことが

ある。資産家や研究者は持ち前の技術を米政府に提供したが、難民としてきた貧困層は細々と生きるしかなく、ヤクザなど反社会組織が根を広げたのだ。もし、その時渡ってきた剣士が剣術をプログラムに書いたのであれば、ウリエルは西海岸から来たことになる。

「おい、ウリエル！お前何処から来たんだ？」

「私ですか？」

器用に自分の顔に指をさすアサルトロンはドックミツチエルからもらつた核分裂バッテリー片手に運び屋に歩み寄つた。

「ははあん、さては私の魅力に気づいたんですかあ？」

「ああ、お前の身体が気になつてな……」

「え！私、心の準備が……！」

「そうじやねえ、色情ロボット。お前は西海岸から來たのか？そうなると剣術を教えたのは日系の奴らか？」

「酷いですね、人をそんな呼び方で呼ぶなんて。そうですね、一応私の製造は東海岸ですよ」

「東海岸…………？お前の剣術を教えたのは誰だ？」

「あ～それについてはデータガハソンシテマス」

「おい、いきなり棒読みにすんな」

明らかに知っているのに言わないような声で話し、あたかも視線を逸らす素振りはいかにも人間らしく、芸達者。だが、そんなウリエルを運び屋は推理する。

東海岸で製造？だとすれば、侍のような刀捌きはどうやって習得する？東海岸にはテロ攻撃をさせないためにアジア系を住まわせないような法律を立てていた。ともすれば、プログラムをインストールしたのは西海岸の日系人コミュニティーか？

疑問符を頭に浮かべる運び屋であつたが、その答えはその本人からすぐ告げられた。

「私には師匠がいるんですよ。百戦錬磨の侍が」

「？」

運び屋はウリエルの意味ありげな答えに訝しげな表情をするが、その答えは出なかつた。

「まあまあ、そんな難しそうな顔しないで飲んで飲んで！それ一氣一氣！」

「ちよーおまー！」

ウリエルの掛け声と共に口に流し込まれるウイスキー。続いてウォツカやビールなど。

酒の強い運び屋でも、流石にきつい。だが、グッドスプリンングスの宴は終わることはない。空が明るく霞むまで続くことになつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

グッドスプリンングスの戦いの後、住民による住民のための酒宴が行わることになつたが、終わつた後は死屍累々の野戦病院と化していった。どういうことかというと、唯一の酒場であるプロスペクターサルーンの店内は人類の不治の病二日酔いが蔓延していた。それはもう、カウンターには農夫が半裸で寝そべり、昨日運び屋が救つた入植者の女性は

ビールを抱き締めてソファーに横になつて寝息を立てている。酒場は何度アルコール臭のする酔っ払いが居ただろうか。大戦争前にもこうした光景があつたかもしれないが、ウェイストランドとなつた今、その光景が見られるのはN C Rでも治安の良いシェイディ・サンズかVaultシティだけとなつていて。もし、治安の悪いエリアであれば、そのままモールラットの餌になつていたかもしない。グッズスプリングスが住民間の信頼の上、こうした酒場で酔いつぶれるという行為が出来るのだ。

一方、店の外には酔いつぶれた住人を尻目に運び屋が出発の準備を整えていた。

「どんちゃん騒ぎしたのは何時ぶりだ？・・・懐かしいと思えると言ふ事はレギオンではないな・・・」

酒やドラッグを認めていないシーザーレギオン。酒を飲んだどんちゃん騒ぎをやるのはN C Rなどの比較的に緩い地域だけだ。B O Sという線もあるが、レギオンという過去の人道的見地からして最悪な組織の人間でない事を知り、運び屋は昨日の事を感謝した。勿論、二日酔いが若干抜け切れてないことを除けばだが。

「そう、それなら良かつたわ。レギオンの糞共だつたら、私の対物ライフルが火を吹くから」

「あー、レギオンじゃなくて良かつた」

トルーディーの冷や汗の出る台詞に苦笑いをする運び屋。手にはジヨー・コップが持っていたM16が握られていた。運び屋はウッドストックとハンドガードを撫で、懐かしさを覚えるが、NCR陸軍の刻印が消え「New California Republic Correctional Facility」(矯正収容所)のマークが焼き印で上乗せされている。見た感じ、軍の支給品であったが、旧式として倉庫にあつたものを引っ張り出したのだろう。ストックに書かれた管理番号を同じ色のペンで二重線を引き、違う管理番号を上書きしている。

運び屋は妙にそのライフルを懐かしく感じ、やはり自分はNCRの人間であつたと納得した。

「記憶がなくても、何かあつたらここによればいいから。いつでも歓迎よ」

「ありがとう、トルーディー。……あれ、昨日送りだすって言つてたリングは?」

運び屋は見渡すが、リングらしき男は見当たらない。パウダーギヤングを掃討してからというものの、彼に感謝して会社から預かつたキヤップをお礼として渡そうとした。運び屋は大手のクリムゾンキヤラバンとのコネがあればと思い、今度で良いと断つた。リングはならばと明日見送ろうと話していたのだ。

「あく、酔いつぶれているわ」

「何やつてんだか」

呆れる運び屋はスカーフで口と鼻を覆い、使い古したスカベンジャー・キヤップを被る。防塵ゴーグルがしつかりと使えるかどうかチェックしつつ、水筒と予備のポリタンクも背嚢に収まっていた。

運び屋は彼女も同じように呆れるかと思ったが、予想に反して彼女の表情は同情の色が見える。

「あの子、同じ同僚だった仲間の名前を呼びながら、泣いて呑んでたわ。仕方ないわよ」

「…………」

彼女の言葉に運び屋は胸が締め付けられるような思いになる。何故だかわからないが同情にも、後悔にも似た泥のような負の感情が胸に渦巻くように感じた。それは丁度5枚の認識票のある胸元であったが、彼は気づかない。

そしてトルーディーも亡き親しい人を思い出し、微かながらも悲しい表情をする。荒廃しきったこの世界でも、一緒に旅をして苦楽を共にした仲間。それは血のつながり以上に家族のような存在だからこそ、アルコールによつて心が落ち着いた瞬間、生き残った喜びは失せ、家族を失つた悲しみが押し寄せたのだ。

「…………いづれ癒えるさ」

「そうね、私達が彼らの分まで生きなくちゃね。」

2人は笑顔を取り戻し、トルーディーは思い出したかのようにバツ

クからあるものを取り出した。

「そうそう、これこれ。餞別代りにあげるわ」

渡されたのは酒を入れるスキットルであつた。それはご丁寧にもグッズプリングスの入口の看板と同じロゴがプレス加工で再現されており、トルーディー曰く、町の酒好きなら皆持っているものだ。元はグッズプリングスのお土産だつたらしいが、サニーや酒好きの人間はよくそれに入れていたりする。しかし、運び屋はあまり酒を嗜まない。強いものの、判断力を鈍らせるものであり、安心できる所でなければ自ら進んで飲みはしない。

だが、ここでは違つた。ここで飲んだのはグッズプリングスが安心できる場所だつたからだ。人が良過ぎるドックミッチエルを始め、可愛げのあるサニーやその相棒の駄犬シャイアン、守銭奴ながらもしつかりと町のために物資を提供したチート、グッズプリングスのリーダー的存在の頼れる女トルーディーなどなど、ここまで安心できたのは初めてではないか？運び屋は記憶を無くなつていると見えど、ここまで安心できる場所はそうそう見つかるものではないと考える。そして涙腺が緩くなつたのか、視線を伏せる。

「どうしたの？砂でも入つた？」

「・・・ちょっとゴミがはいつた」

別れを惜しむ悲しみか、それとも安心できる場所を旅立つ悲しみか。それは運び屋にも分らなかつた。ただ言えるのは、グッズプリングスにまた来たいという思いだつた。

「トルーディー、ありがとう。また来るよ」

「いつでも帰つておいで」

ドライだつた他の町違いを覚えているのか、グッズ・プリングスが故郷のように覚え、町の住人としての人生を歩んでいたかのようにはえた。記憶を失つたからだろうかと、運び屋は思うが何故そう思つたかを考えようとは思わなかつた。別れを告げ、先の戦いで小さいクレーターを横切り、碎けたアスファルトを蹴飛ばして道なりに進む。グッズ・プリングスの看板を抜けて、ふと振り返る。

砂の混じつた強風によつて霞む家々。短い滞在だつたはずなのに、長くいた居心地を覚えた運び屋は焼き付けるようにそれを見つめた。

「また来よう」

ゆつくりと歩みだす運び屋。目指すは南にあるプリム。ヨーロピアン準備運動

「いや、皆さんアルコール弱かつたですね～！」

「うわあ！お前、一体どこから沸いた！」

意気揚々と歩き始める運び屋の目の前に現れたのは、グッズスプリングスの住人をアルコールでノックアウトさせた張本人、アサルトロボンのウリエルだつた。突然現れた彼女に対して、滑らかな動きでサービスライフルを構えるが、彼女はまるで人間のように手を上げ、武器は持つてないと両手を振つてアピールする。

「ちよつと待つてください…ここで待つてたんですつて」

「まつてたつて、道の真ん中でか！」

「そうです、太陽光発電も兼ねてここで待機していれば運び屋さんに遭えると思つて」

「いや、さつきまでそこにはなにも……」

「私の装備には長時間光学迷彩、いわゆるステルスフイールドが使えまして、こうして待ち伏せしてドカーンとするわけです」

ウリエルは体育座りをすると、ステルスフイールドを起動させて、見えなくする。運び屋は驚くが、よく見れば若干空間がゆがんでいるように見えるため、目を凝らせば見ることが出来た。

「ね、すごいでしょ！」

「凄い待ち伏せスキル・・・んでお前何の用？」

「何って！そ！れ！は！・・・運び屋さんに惚れちゃいました！」

「帰れ!!」

A n a g r e e a b l e c o m p a n i o n o n t h e  
r o a d i s a s g o o d a s a c o a c h. (よい  
道連れは馬車も同然)

と英語にもあるように、『旅は心世は情け』

一人旅より二人旅。さすれば心強く、仲間が自身の助けとなる。

記憶を失つた運び屋とよく分からぬアサルトロンは荒野を歩く。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

※※※※※※※※※※

一人と一台がグツドスプリングスの坂を下り、丘が邪魔で見えなくなるまでグツドスプリングスの医師、ドックミツチエルは彼らを見続けていた。比較的高台にある診療所兼自宅の寝室にある窓からは先ほどまでみえていたものの、テーブルのコーヒーを取る頃には見えなくなっていた。ミツチエルは大きく息を吐き、そのコーヒーをソファーのあるリビングへと持っていく。

ミツチエルは出発した彼の資料を纏めている途中だつたため、書類仕事をしながらコーヒーを嗜もうとしていたのだ。だが、リビングが見える位置に立つと、そこには見覚えのない男が立っていた。叫んで驚くようなことはせず、スチール棚に置いてあつたショットガンをその男に向けた。

「貴様！ ここで何をしている！ 動くと撃つぞ！」

「ふむ、第一閨門突破と言つた所だらうな」

「何？」

そこには嘗ての米軍上級将校のコートを着た男がいた。見間違えるはずもなく、真新しいその服装にミツチエルは寒気を覚えるもの、その男は淡々と話し始める。

「やはり、あの男を候補者にしたのは間違いないようだな。ハウスに推薦しておいて助かったよ。この分析は良くできている」

忌まわしきVault製のマークの入つたそれは「G.O.A.T.」。Generalized Occupational Ap-

t i t u d e T e s t というテストを改良したものだつた。もつともこれは細部に至るまで改良されており、原型を留めていない。記述式や選択式などの解答欄があるが、専門的な知識が必要とされており、G. O. A. Tよりも正確な測定が可能となつていて。加えてグッズプリングスの一件を記録したホロテープを分析したことにより、ほぼ確実な運び屋の基本情報が記録できた。

「ハウス？それは・・・・」

ミツチエルはニユーベガスの権力者の名前を聞くが、その続きの言葉は男によつて遮られる。

「ドクター、関わるのは感心しないぞ。死にたくなかつたら何も聞くな」

「・・・・」

独り言みたいなものだ、と男は続ける。ドックミツチエルはショットガンを構え続けているが、いつの間にか手術室やキッチンからレーザーポインターが自身の身体にあてられていることに気が付いた。

なぜ、こいつは私の家に？

その疑問はまつとうな理由だつたが、つい最近の患者で訳アリが一人。あの運び屋の関係者であることを悟つたが、目の前に嘗ての米軍将校の服を着た男がいるとは、何の冗談かとミツチエルは冷や汗をかく。

「まあ、聞きたくなるのも分かる。焦らないでくれ。礼を言いたいんだ」

「礼？」

男の言つて いることが分からなかつた。

そんなミツチエルの気持ちに答えるように男は話す。

「彼を治療してくれたことに礼を言いたい。こちらも不手際があつてね、こちらの用意した戦力では難しくて困つたものだ。せつかく特注で作らせたと言うのに・・・電子機器破壊のための兵器を携帯していれば、戦いたくないと思うのも分かるのだが」

「・・・医者としての本分だ。これは曲げられんよ」

「亡くなつたご子息と歳が近かつたからか？」

「……」

気持ちを見透かす様な台詞。ミツチエルは妻子がいたが、息子はNCR領内で死に、妻は旅の途中で怪我をして、それがもとで亡くなつた。グッドスプリングスはその怪我のために寄つた村に過ぎない。今住んでいる家で医療品をかき集めて妻を治療したのである。懸命の努力は実らず、彼女はこの家の最初の患者であり、最初に亡くなつた患者の一人となつた。彼女の遺体はグッドスプリングスの丘の墓地に埋葬されていて、月に一回ほど花を供えている。その後、ミツチエルはグッドスプリングスの医者として住むことになるが、グッドスプリングスの住人には息子がいることなど言つたことはない。どこでその情報を知つたのか、ミツチエルは切り詰めた水平二連散弾銃

に力が籠る。

男はその言葉が失言だと思ったのか、申し訳ないような表情をする。

「すまない、少々悪いことを言つてしまつたな」

「そう思うのなら帰つてくれ。この家に武装した兵士と健康そうな指揮官を置く余裕はない」

「一応、報酬を用意した。……病院が一件立ちそうな額のキャップだ。」

男の後ろにはあまりお目にかかれないと密閉型の金属製収納箱だった。放射線を遮断し、爆発や誘爆などを避けることのできる画期的な多機能型万能収納箱。最終戦争前に米軍が支給品保管の為に供給を始めたが、あまり出回らなかつたらしく、重要物資のみ収納されていた。過去にエンクレイヴが大量に生産していたこともあり、俗に『エンクレイヴボックス』と呼ばれる箱だ。ミッセルはその箱を見るなり、驚愕というような表情を露にした。

40～50年前に西海岸で猛威を振るつっていたエンクレイヴ。他の航空機がない空をベルチバードが飛び交い、パワーアーマーを着た銃火器兵が降下する。彼らのために多くのウェイストランド人が土に還つたことか。

その光景を覚えていたミツチエルは目の前の男の服装や荷物、そして周囲に息をひそめている兵士はかつてのアメリカ政府の亡靈いえるエンクレイヴなのだと理解してしまう。

そう思つたミツチエルは後ずさりしていき、周囲の兵士を見る。N C R軍でも使用する黒のプレートキャリアと黒のB D U<sup>野戦服</sup>。彼らの手にはカスタムされたレーザーライフルとプラズマライフルを持っていた。彼らの部隊章は翼を広げた鷲が足で円盤らしきものを掴むという部隊章だ。

やはりこいつらはエンクレイヴに違いない。なぜここに？あの運び屋はエンクレイヴの人間なのか？

ミツチエルの疑問は尽くことはなかつたが、その答えは件の男によつて答えられた。

「我々はエンクレイヴ……ではないと言いたいが、否定は出来ないな」

「あんたちはエンクレイヴだろ？あの運び屋も！」

「いや、彼は元レンジヤード、凄腕のな。彼には荷物の運搬だけのはずなんだけどな。今回、パウダーギヤングとグレートカーンズさえ、居なければ丸く収まるはなしだつたんだ」

ミツチエルの追及はそれだけではなかつたが、一人の銃を持つた兵士が士官服を着た男に報告する。

「……ああ、了解ね、すぐ戻るか」

ミツチエルは再びエンクレイヴによる戦争が行われるのではないかと思ひ、ならばその訳を知りたくなり、帰ろうとする男を呼び止める。

「待つてくれ、君たちはここで何をする気だ・・・？」

喉から苦しくも出たその言葉は男に伝わり、少し考へる。一つ間違えて何も起きないだろうが、彼らがモハビに再び舞い戻った目的……それは……？

「ベガスで勝ちに行くんだよ」

清々しいまでの笑みと、これからゲームが楽しみだと言わんばかりの男の顔はにやけていた。それは、是から来る得戦乱に対する笑みなのかも知れない。

すると、男の身体に何やら光の輪が多いはじめ、閃光と共に男は消滅してしまった。

ドックミツチエルは目の前の光景に目を疑い、これは夢なのではと頬を抓る。痛みはあり、起きていることを理解しても、目の前にいた男が消えた場所近くには、「報酬」と言っていたものが入っているはずだ。

ミツチエルはゆっくりとその箱を開けることにした。そこには山住にされたキヤップと金塊が入つており、腰を抜かすところであった。

一瞬にして消えたエンクレイヴらしき男。グッドスプリングスの

不思議として語り継がれるのは別の話であつた。

## 第一章 設定資料

△データファイル破損!! 速やかにファイルを修復してください!』

R O B C O I N D U S T R I E S U N I F I D O P E R A  
T I N G S Y S T E M  
C O P Y R I G H T 2 0 7 5 — 2 0 7 7 R O B C O I N D  
U S T R I E S

— Server 1 —

ようこそ、Mr. ハウス様

▽・トップス 〈要注意〉

▽・オメルタ

▽・ホワイト・グローブ

▽・モハビ・エクスプレス 〈重要案件〉

▽・セキュリトロンバージョンアップ

▽・セキュリトロンバージョンアップ

▽・セキュリトロン性能概要

▽・Mark. II インストールチップ『プラチナチップ』

▽・輸送計画

▽・輸送計画

子会社を経由して、モハビ・エクスプレスの単身輸送を行う。重武装護衛部隊を伴う輸送より、注目を集めて奪取の確率を上げる恐れがある。配達人を6人に分け、ダミーを持たせて輸送させる。なお、運び屋は一線級の社員を登用する。

(以下、サーバー32・モハビ・エクスプレス業務内容参照)

▽▽・モハビエクスプレス プリム支社 ジョンソン・ナッシュ支社

長

▽▽・N o. 6 【データ破損】

▽▽・同行者 〈要調査〉

▽▽・N o. 6 【データ破損】

〔氏名〕 〈N C R陸軍情報機密サーバーより転送〉

A w 4 3 # & , \$ · B s 9 8 h 3 3 , (R \$ (h) A f f i s h f b i h  
y t f # \$ % & (偽名・軍役時)

愛称 : 2 , \$ & \$ b u g / 運び屋 【データ破損】

〔性別〕 男

〔風貌〕 白色人種・茶色髪・短髪・彫りが深い

〔主要装備品〕 〈セキュリトロン “ヴィクター” からの報告より〉

・ vault スーツ

・ ストール

・ プレートキヤリア 「タンカラ (イーグルクロウ社製)」

N C R陸軍が近年採用した個人防護システム。防弾パネルを身体の胸と背中の二枚構成となつており、兵士の生存性の向上と携行弾薬

の増加が図られている。運び屋が使用するのは軍仕様のであり、民間警備に売られたタイプのものである。

#### ・ハイパワー9mmピストル

NCR軍工廠製造の陸軍正式採用9mm自動拳銃。ジョン・ブローニングが設計したハイパワー拳銃と設計は全く変わっていない。殆どが、設計者や銃の名前を覚えておらず、ウェイストランドでは9mmピストルと呼ばれている。

#### ・M16ウツドストック（サービスライフル）

NCR陸軍に正式採用されていたアサルトライフル。5.56mm小口径ライフル弾を使用するが、木製ストックなどは重く、4kg程。戦前の設計図を基にしたものであるが、製造コストの削減と部品数の削減、そして未だに精度不足な工作機械の大量導入によつて精度不足なライフルとして兵士からは不評を買い、さらに故障が相次ぐことから、精度の高めた工作機械の導入に伴つて新型ライフルを導入した。正式採用時、使用した兵からは「100m先は運次第」「レギオンの兵士は当たらないと思つていて、その通り」「銃剣付けて突撃したほうがマシ」など。

新型ライフルを導入以降、NCRCAFや訓練部隊など二線級部隊に配備される。運び屋が装備しているのはパウダーギヤングのジョー・コップが使用していたのをそのまま使つていて、

#### 〔経歴〕〈NCR陸軍人事情報サーバーより転送〉

NCR出身（ニユーリノ近辺と思われるが、詳細不明）

2250年頃誕生

2272年、NCR陸軍に入隊。学力検査によつて下士官レベルの学力を有することが証明され、半年の基本訓練後に下士官として任官。西部戦線のBOSとの戦いに従軍する。

2274年にNCRレンジャースクール下士官過程を修了。翌年に少尉に任官。76年中尉任ウヒd s v\$%67不服従と(%, 87アカ767【データ破損】

直後に「Death Valley Transport Co. i u h s e s 0 9 5 9 2 \$ , & % ( & イウ h セウイビウヒウfジオ s j ギオウウ y g e o i s & \$ % \$ # & j o i b u i イ【データ破損】に貢献する。

NCR政府の依頼イホイhノ【データ破損】イオオイ\$%&, 荷物を運搬。その後、ソs r\$%【データ破損】& I H U H F 防衛作戦のため召集令状が下り受諾、レンジャーとして再入隊。Bo &%\$3h 防衛戦においてレンジャー・テレサ・ラツツと共に&%\$#”\$イイウフオ y\$%&, 6Y【データ破損】TUYU\$%&%取り残された隊員は戦死。彼自身も瀕死の重傷を負う。結果的であつたが任務に献身的だつたことから彼を含む全員に名誉勲章が送られた。

1年のリハビリ生活の末、ニューリノやシェイディ・サンズ周辺にて名誉勲章の制度を利用することなく、傭兵や探鉱者<sup>スカベンジャー</sup>者探鉱者などで不安定な生計を立てる。

2281年6月にモハビ・エクスプレスのシェイディ・サンズ支社に入社。単独輸送をメインに依頼をこなし、10月にモハビ入りする。

〔人物評価〕モハビ・エクスプレス本社人事サーバー2より転送

2度の軍務について経験やNCRレンジャーとしての戦闘能力。また、知能指数も優れており勇敢である。ただ、NCR陸軍人事部の評価レポートには「同僚への献身故に任務遂行に支障をきたす恐れあり」との報告在り。単独任務による特別貨物運搬業務には、適正人事

と思われる。

しかし、F O j i 6 【データ破損】 2 3 ( # % % 特務小隊付きレンジヤーとして従軍時、D o i r g n U G U I F j b k 【データ破損】 % & 4 7 6 7 \$ & , の犠牲となる。一命は取り止めたものの、N C R 陸軍の体制に辟易し、2度目の除隊。先の作戦の “ 献身的英雄 ” として名誉勲章を授与するが、 “ 魅力的特典 ” を行使せず、傭兵や運び屋、賞金稼ぎなどで生計を立てる。

j l j l k l b v y 8 6 8 9 7 9 8 0 9 7 5 9 3 3 \$ % & , % \$ 【データ破損】 & # % \$ , & \$ , % % & R , & R , & F T Y F U 【データ破損】 Y G T G , & R & % , % & % , & %

軍務に尽くしていた彼とは程遠く、N C R 陸軍関係者からは「やむを得ない犠牲（コラテラルダメージ）」と言われる。目から生気が抜け出しており、ベニーによつて記憶を喪失してからはかつての生気を取り戻していた。

N C R 陸軍内偵調査部の報告では彼は A i u b e w v \$ % 7 6 6 8 7 8 【データ破損】 息子であり、オイジヨイ j フォアオイノヴ y ツツ r # 【データ破損】 \$ % & , & % \$ 居場所のない彼は N C R 陸軍に入隊した経緯がある。

〔身体・技能数値〕 〈イーグルクロウ警備保障提供データより抜粋〉

グッドスプリングスの D r . ミッチエルの考案した改良型 G . O . A . T . とロールシャッハテスト、及びヴィトマテック活力テスターによる非常に正確な身体検査である。

〔S . P . E . C . I . A . L . 〕

· Handsome Man

〔Perks〕	
· Lady Killer	
レディー・キラー：女性に対して与えるダメージが10%増加。また、NPCへの特殊な台詞が追加。キャラ男ではない。女性への好感度がアップ	

	〔Skills〕
40	Strength (筋力)
80	Perception (洞察力、五感)
80	Endurance (耐久力、持久力)
40	Charisma (カリスマ性)
60	Intelligence (頭脳、知性)
50	Luck (運)
50	Aexterity (俊敏性)
50	Barterer
40	Energy
60	Exploratives
20	Guns
90	Lockpick
50	Medicine
70	Melée
40	Repairer
40	Science
80	Sneaking
80	Speech
80	Survival
40	Unarmed

ハンサム・マン：万人に受ける美男子。歩けば花が咲き、空気が清浄される。周辺RAD値が低下、及び女性キャラのみHP値が回復する。

(自身を女性と思う同性及び機械も同様に適応)

同性愛者をも魅了するため、さらに、NPCへの特殊な台詞が増加する。しかし、その容姿のために妬まれることも少なくなく、luck kが2減少。同性から受けるダメージが10%増加する。

#### • Rapid Reload

素早いリロード：アパム！アモー!!全ての武器のリロードが通常より25%速くなる。しかし、簡単に弾倉が取り出せるため、爆風によつて幾つか弾倉を取りこぼす。極低確率で爆発ダメージによつて弾倉が落下する。取り出しやすくなつた弊害。

#### • Hunter

ハンター：野生動物に対して、クリティカル時の追加ダメージが+75%上昇。熟練したハンターであれば動物へのヘッドショットでは更に50%上昇する。獲物に集中するため、スコープを覗くと周囲への注意が削がれるため、PEが2低下。

#### • NCR Army Training

陸軍教練：フーアア！陸軍兵として訓練を受けた。GunsとExplosivesなど戦闘系スキルにプラスされる。ただし、強靭な戦闘能力を得る代償にspeechなど愛想が低下。

March along, singing our song, with the Army of the ...

#### • Swift Learner

学習能力：1ランク習得すると同時に全ての取得経験値に+10%のボーナス。ただし、2ランク以降は頭でっかちになるため、Skill 1にマイナスボーナスが付く。

### • C o m p r e h e n s i o n •

理解力：スキルを上げる本を読んだときのスキル上昇値が3ポイントから4ポイントに上昇。本好きな性格故に商人に見破られ、雑誌・技能本の価格が上昇。本好きは辛い

### • E d u c a t e d

教養力：しつかりと経験から学ぼう。レベルアップ時のスキル値に2追加。スキル本を読むことでスキル4追加。ただし、読書で上昇したSkillを一定期間以内に使用しないと、失効する確率が発生。（使わないと30%の確率で失効）

### • A s s a u l t

突撃：Run，n Gunの上位版。（NCR Army Training取得必須）

移動しながらの射撃精度が上昇、及び銃剣装着時の攻撃力が上昇。サービスライフルやアサルトライフル、サブマシンガン、ショットガンの威力が上昇する。なお、対戦車能力は皆無（当たり前）

### • T r a v e l A r m o r

トラベルアーマー：防弾プレートなど使用する服装を着用する場合、10%移動速度が上昇。また、「NCR Army Training」を取得していれば、俊敏性が上昇する。但し、軽装時にはDTが3低下。

### • D e m o l i t i o n E x p e r t

爆発物の専門家：ワイリーコワイ……1ランク習得することに爆発物系の武器で与えるダメージが20%増加。さらに爆発半径が上昇し、C4などは建造物が破壊可能となる。

### • F e r o c i o u s L o y a l t y

恐ろしいほどの忠誠心：HPが50%以下の時、コンパニオンがD R 50のボーナスを得る。信頼が高まることでさらに75%攻撃力が上昇。ただし、その信頼を裏切れば、即死級の攻撃がある。

#### • Fortune Finder

幸運な探索者：コンテナなどを開けたときに見つかるキャップの量が増加する。また、欲している資材を得ることが出来る。しかし、それ入手するには敵対する勢力を倒す必要がある。

#### • Gunslinger Expert

ガンスリンガー：彼は引退した暗殺者……。洗練された射撃技術と近接格闘によつてV·A·T·Sでの命中率が3倍、攻撃力が50%上昇する。また、片手武器のバツシユ（近接格闘）時、ジョン・○イツクのような技を発揮する。ただし、DTが1低下

#### • Shot gun Pointman

ショットガンポイントマン：犯罪者をハチの巣にしよう！突入時のポイントマン経験とショットガンの射撃技術から目標のDTを10ポイント分無視。また、室内戦闘時にショットガンを装備することで30秒間、体感時間がスローとなる。

#### • Riot Control

暴徒統制：公共の利益のために社会の敵を吹き飛ばそう。暴徒化する人物に対しての攻撃力が75%上昇。ファイアンドや部族などの敵への攻撃力が上昇する。ショットガン・グレネードランチャー・非致死性グレネード（スタン）の攻撃力及び効果が上昇。

#### • Toughness Soldier

強靭な兵士：これぞ、世紀末のコマンドー。DTが+5される。さらに銃弾系武器や爆発物・鈍器などの攻撃力が45%上昇

#### • C o m m a n d o

コマンドー：最後に殺すと言つたが、あれは嘘だ。ライフルのV.A.T.S.での命中率が1・25倍に上昇。更に攻撃力が20%上昇する。

#### • P a c k R a t S c o u t

パックラットスカウト：「備えよ、つねに（Be prepared.）」彼はスカウトの経験からか装備品を多く携行出来るようになる。2ポンド以下の重さのアイテムが半分の重さになり、携行品上限が50上昇。

#### • Q u i c k D r a w

クイックドロー：銃をホルスターから抜く速度が50%速くなる。ライフルでも同じく早くなる。

#### • S c r o u n g e r

現地調達：コンテナなどを開けたときに見つかる弾薬が通常よりも多くなる。また、敵勢力の死体からも弾薬が多く取得できる。

#### • A n i m a l F r i e n d

動物の友：ランク1では動物が襲つてこなくなります（コンパニオンも含めて）。ランク2では敵が同種の動物ではない場合に限り、戦闘に加勢してくれます。ただし、ランク3ではpeakごと名前が変わる。

#### • A n i m a l T o y

動物の玩具：動物に構われ過ぎるようになる。同行する動物の攻撃力や敵対する勢力に飼われる軍用犬でさえ、こちらの仲間になり主人

に攻撃する。デンバーのドッグトレーナーもびっくりの変わりよう。加勢する動物の攻撃力が75%上昇する。しかし、加勢した代償に餌を与えるなければならない。でないと、遊ばれることになり、HPがころなしか微妙に減少する。

#### • Pyromaniac Expert

熟練した放火魔：火炎系の武器で与えるダメージが200%増加  
I l o v e t h e !!!!! smell o f n a p a l m i n t h e m o r n i n g !!!!!!!

!!!!!!

#### • Sniper Elite

スナイパー：過酷な訓練によつて卓越した狙撃技能と周辺の環境に溶け込める技術を手に入れた。V. A. T. S. 射撃時に頭部への命中率が3倍上昇。銃器の揺れがかなり抑えられる。また、スニーカ時にsneakスキルが10上昇する。

#### • Adamantium Skeleton

アダマンチウムの骨格：NCRの最先端医療によつて頑丈な骨格を手に入れた。手足に受けるダメージが通常の50%に減少。

#### • Nerves of Steel

鋼の勇気：戦いの経験によつて鋼の勇気を手に入れた。AP回復速度が通常より20%速くなる。

#### • Ranger Takedown Alpha

レンジャー・ティクダウンα：銃器装備時に接近戦における格闘を行える。ライフルや拳銃など、全てに適応でき、クリティカル率によつては即死級の技を繰り出せ、敵の頭部を撃ち殺害できる。

#### • Tough Guy

タフガイ：幾度となく負傷したお陰で手足へのダメージが20%軽

滅されます。ナカトミビルをクリスマスに裸足でテロリストと戦う  
刑事みたいな悪運に恵まれます。

#### • Grunt

歩兵：「逃げるやつはファイアンドだ、逃げないやつは薬をキメた  
ファイアンドだ」。9mm及び45口径の自動拳銃とSMG、サービス  
ライフル、アサルトカービン、マーカークスマン・カービン、LMG、手  
榴弾、グレネードライフル、グレネードランチャー、コンバットナイ  
フの攻撃力が25%上昇。

「ホント戦争（ウェイストランド）は地獄だぜえ！」

#### • Fight the Power!

権力と戦え！：「ファシストめえ！」「反帝主義万歳い！」NCR、  
リージョン、BOSの勢力服を着ている敵と対する時にDT+2、ク  
リティカル率に+5%のボーナス

#### • Graduate of Ranger School

レンジヤースクール卒業生：過酷な訓練を潛り抜け、精銳の証であ  
るレンジジャーとなつた。Enduranceが2上昇。戦闘系ス  
キル全般が+10される。

#### • Anti-PA specialist

対PA特技兵：BOSの機甲兵を撃ち倒す。徹甲弾を使つても装甲  
は撃ち抜けないが、機関部やセンサー類・油圧アシストを破壊するこ  
とが可能となる。V·A·T·S・射撃時にこれらの部位に狙いを  
定められる。それらの命中精度が向上。PAへの攻撃力が50%向  
上。また対戦車兵器の攻撃力が75%上昇。

#### • Banzai charge

万歳突撃：嘗て旭日旗を掲げた兵士の魂が宿り、敵の銃火に怯むこ  
となく呐喊する。アサルトライフル・ライフル系の攻撃力が30%上  
昇。銃器による白兵戦など攻撃力が上50%上昇。DTが全力疾走

及び突撃時10まで跳ね上がる（AP消費）ただし、レギオンの重装大楯兵には遮られてしまう。「For the Republic!!!!」「共和国万歳！」と叫べば勝てる……かも……。

#### · Rangers lead the way

レンジャーが道を拓く：レンジャーが味方を勝利に導く。NCRレンジャーの服装の場合、レギオンや敵勢力に対する攻撃力が50%上がる。DT5上昇。レンジャーや共和国軍兵士を決して見捨てない。

#### 〔T r a i t s〕

##### · Amnesia

自分が何者か分からぬ。それまでの記憶がないため、所属や経験、主義主張すら忘れてしまった。各勢力の評判がリセットされ、レベルアップ数値がリセット。しかし、深く関わりのある派閥は知っている。そのため、関わりのある派閥では以前の評価にプラスされた評判となる。また、ひょつとしたことで一部分の記憶が元に戻ることもある。

#### · sd%【データ破損】bgj1

H I U Y u【データ破損】f & \$ %%アルコール中毒や薬物の耐性が低い。加えて睡眠欲や食欲の数値が上昇しやすい。C p s k f ポ【データ破損】ギュ#%7

しかし、戦闘時には攻撃力が10%上昇し、Strengthなどの身体能力値が2上がり、DTも増加。アドレナリンの過剰分泌により体感時間が遅くなるなど、メリットがあるが、同時に諸刃の刃である。

特定の場所や敵に対しても起こしやすく、戦闘終了直後には過度な疲労や頭痛、過眠傾向が強くなる。

◇◇・同行者【要調査】【データ破損】

〔氏名〕ヘセキユリトロン 講報部情報収集サーバーよりコピーへ

愛称：ウリエル

詳細不明：要調査

〔性別〕ロボット 〔自称：女性〕

〔容姿〕

アサルトロン 米陸軍仕様

塗装は米陸軍であるが、所々部隊管理番号が消えており、東海岸に配備されていたモデルを元になつてていることが確か。しかし、両手のマニピュレーターや各センサー機器が大改造を施されている。

〔兵装〕

上位タイプの高出力レーザーを使用する。フュージョンコアを動力源と考えたが、レーザーの場合はマイクロフュージョンセルを使用する通常のレーザーライフルを使用する。ただ、それは頭部レーザー機構のみだが、1セル1澣に調整された大出力高威力が可能だ。両手は通常兵器が使用可能な人間の手に模したマニュピュレーターを装着している。背中のマウンタには日本刀らしき武器を装着している。この武器については分かつておらず、米陸軍が採用した高周波ブレードやヒートブレードなどの形状ではないオリジナル兵器の可能性がある。

〔推察〕

西海岸では試験運用のみで全く配備されなかつたアサルトロンがモハビに突然現れるのは全くもつて不可解だ。もしかすると、エンクレイヴが関与している恐れがある。オイルリグが破壊されて以来、残

党が東海岸へ逃避行をしたと諜報ユニットの報告で明らかになつて  
いる。計算上、あの戦いで60%のソースを失われたエンクレイヴは  
70%の確率で崩壊すると予測した。だが、近年放棄されたエンクレ  
イヴ製兵器や製造工場を利用した軍事複合企業「イーグルクロウ」が  
既にベガスに進出しており、可能性として34・2%の確率でエンク  
レイヴによる工作活動と考えられる。

ただし、奴らが己の主義主張を捻じ曲げてNCRとの同化に転ずる  
とは考えられない。奴らはリチャードソンの頭のおかしい理想を信  
奉していた。無論、信じていない者も大勢いるだろう。だが、自分達  
が旧世界の生き残りであることを誇りにしていたら、まずもつて不可  
能だろう。細胞培養技術を駆使して200年生きていない彼らに旧  
世界の再現は不可能だ。精々、私のベガスに吸われてしまえばいい。  
邪魔をすれば叩き潰せばいいだけだ。

Robcoの機械技術を手にしたいイーグルクロウは接触をして  
きてはいるが、所詮は無教養な野蛮人。子会社のモハビ・エクスプレ  
スの下請けとして扱い、取り込んでやろう。

## 第二章　Primm & Mojave Outposts

t

### 十話 Private Military Company

NCR領、デイグローからニューベガス、そしてニューカナーンに続く幹線道路インターーステート15号線は、現在でもキャラバンが使用する商用道路として利用された。NCR領内における幹線道路は殆どが修復され、NCRの工場にて生産された輸送トラックによつて多くの物資が供給されている。

輸送網の発展は社会発展の基礎と言つべきであり、嘗ての産業革命は馬力に次ぐ蒸気機関の発明とその動力による輸送網の発達によるものである。先祖の残したテクノロジーは幾つも失われたが、今でもそれを製造することは少数ながらも可能だつた。そして、それを有用だと判断した資本家は多くの資本を投入して速さのある原子力搭載のトラックを使う。大手のキャラバンの殆どはそれを使用し、中小キャラバンは比較的安全なNCR主要道路をバラモンで輸送するが、燃料補給が殆ど要らない原子力車輌と多くの食糧と限られた積載量のバラモンとで比べると、コストパフォーマンスの良い大手が市場を独占していくのが当然だつた。

中小キャラバンは一掃され、荒地の販売路の開拓と過疎地帯に商機を見出すのは自然の理に適つていた。外来動物の侵入によつて自然動物が限られた閉鎖環境で生き延びるのは人間としても同じであり、優秀な種がウエイストランドで生き延びるのは人でも変わらない。

だが、その閉鎖環境も更に狭まることとなる。

「おーい！止まれ！止まれえ！」

インターラーステート15号線の中間地点、NCR領の境であるモハビ前哨基地の南ゲートに数台の車輛が到着する。本来であれば、ここまで声を張り上げず、慣れたトラック運転手ならばゲート横の詰め所に身分証明書と通行証明書を車内から見せるだけで通すものだが、その時の警備兵は久々に砂埃の被つた警備棒を振る。

警備兵は見たことのない車両の形に戸惑いを覚えたからであつた。

いつもならウェイストランドの廃墟でよく見かける軍用トラックや、軍事施設でちらほら見かける廃棄されたAPC<sup>兵員輸送車</sup>の復刻版を見ることだろう。まだ数は十分行き渡つてはいないが、NCR陸軍の輸送主力として考えられていた。まだ戦車などはコストパフォーマンスや整備性故にパワーアーマーの生産設備の建設に入れているため未だ少數生産に留まつており、戦前の高性能な連装滑空砲を装備した戦車は未だ少數しか配備されていない。そのため、グレードダウンされた戦車があるものの、モハビのような土地では機動力を優先しているためにキヤタピラーを使用する車両は殆どない。

警備兵が見慣れていた復刻版のトラックの面影はない。色も戦前の復刻された濃緑色ではなく、荒地でも視認しにくいようタンカラーや塗装されるそれはもはや復刻版とは言えない形となつていた。一

回り大きいタイヤにエンジン部分を防護するための装甲板に左右と下部の爆発に耐えられるように装甲を溶接してあつた。そこに居たのがレンジャーだつたら、そのトラックの魔改造ぶりとレギオンの即席爆弾対策の有効策と考えたに違ひない。もし、別の世界のアメリカ軍が使用するM R A P —「Mine Resistant Ambush Protected」と呼ばれる装輪装甲車を知つていれば、「核動力の癖にこの重装甲はないわー……」と感心しながらも、呆れたようなセリフを発するはづだ。

だが、そこに居た警備兵は志願したわけでもなく、転生した不幸なウエイストランド元日本人人でもない。食い扶持と半ば徵兵によつてやつてきた普通の兵士だつた。そこまでの情報や知識は知る由もない。

「なんだこりや……」

後続車両を見てみると、先頭の重装甲トラックと同車種の他に通常の輸送トラックや75mm砲を装備した歩兵戦闘車や通常タイプのAPC、エンジン部分に装甲が施されているものの、乗車する兵士の防護策が図られていない非装甲の偵察車輌や赤十字マークが書かれた救護車タイプ、多連装ロケットが装備された面攻撃可能な火力支援車両も見られた。警備兵の記憶にはこれらの車輌があつたといふ事実はなく、唯一分かるのは双頭の熊が描かれたN C R 国旗と鷹がライフルを爪で掴む絵柄の旗とエンブレムが記されている。

そして、その後ろには通常タイプの輸送トラックが荷物を満載しており、車体には「Mojave Express」と描かれていた。彼ら運び屋は飛脚のように腕の立つ運び屋や大量の荷物を運搬するインターステート15号線沿いで幅を利かせる大手だつた。

「どうした？入れないのか？」

警備兵に止まるよう言われた車列<sup>コンボイ</sup>の戦闘車両の助手席に座つていた兵士らしき男は下りてくると、件の警備兵に尋ねた。

「い、いや何処のキャラバンで？」

「見て分からぬ？・・・ああ新入りさんかな？イーグルクロウだよ。ここ通らせてもらうよ」

### イーグルクロウ警備保障

今のNCRでは知らない者が居ないと言われるほど、巨大化した傭兵派遣会社の一つである。NCR正規軍よりも最新兵器を携えた兵士達は既に私兵部隊としては大きくなり過ぎた存在だつた。過去に何度かNCR政府による査察が行われたが、空振りに終わり、更にはイーグルクロウの国有化を目論んだ軍上層部の高官が汚職容疑で拘束される事件が起るなど、火種は絶えないが火の粉を簡単に振り払うことが出来るほどの力を持ち合わせていた。

その力の源はイーグルクロウが軍事複合企業という軍需と確たる技術力によって成り立つていた。既に加工食品や汚染のない食料品の供給を始めており、既にNCRの工業力の20%を維持している。最早、NCRはイーグルクロウグループの工業力なしでは国家そのものを維持できない程にまで侵食させていた。

その物々しい程に重装備の傭兵部隊に警備兵は噂には聞いていたイーグルクロウの傭兵を目のあたりにし、畏怖にも似た視線を向ける。

「これが許可証と通行証だ。確認してくれ」

「か、確認しました。どうぞ」

警備兵は上ずつた声で確認して、渡された書類を返却する。傭兵の手招きと共に車列は前哨基地へと入っていった。

数年前のモハビ前哨基地はこじんまりとしたサービスエリア跡だった。パックバラモンがフエンス越しに鳴き、ボロボロの車輛が放置され、通行の邪魔になっていた。だが、車列の目の前にあるモハビ前哨基地は、その名前に相応しい施設となつて生まれ変わっていた。

破壊された車両は前哨基地の壁として積み重ねられ、バリケードとして十分に役立っていた。そして、空いたスペースには物資を運ぶ車両が停車出来るようになつており、人員の増加に伴つて旧サービスエリア外にもテントや仮設バラック小屋や建てられた。近くに清潔な井戸があることから、NCR市民であれば無料で使用可能となつている。ウェイストランド基準で言えば「天国」と言つてもいい環境だった。

これも、NCRが国家として動いているからに他ならない。

「ここで大休止を行う。水分補給は各自で行え。1600時に出発す

る」

輸送隊の専任曹長が隊員に命令を下し、黒の戦闘服<sup>B</sup><sub>D</sub><sub>U</sub>を身に纏つた傭兵達は正規軍よりも規律正しく、休憩に入る。その異様な車列は他のキヤラバンの視線を集め、非番の警備兵も見物に来る。それはレンジャーも同じで、詰所の屋上にいる色白のスナイパーもいつもと違う車輛に興味津々な様子で眺めていた。

「こりや驚いた。イーグルクロウのワイルドギースはとんでもない玩具を持ってきたな」

「ナイト少佐殿、お久しぶりです」

見物客の中には基地司令のナイト少佐が楽しそうな笑みを浮かべており、技術職<sup>修理屋</sup>としての勘が動いていた。これはモハビとNCRを変える画期的な代物であると。そして、弄り甲斐があるものであること。

しかし、そんな危険な一面を嗅ぎ付けたのかナイト少佐に挨拶をした傭兵の指揮官は苦笑いを浮かべる。

「・・・分解して調べたいなんて言わないで下さいよ」

「前哨基地司令の権力でも?」

「勘弁してくださいよ。国家権力の横暴ですよ」

冗談とも本気にも聞こえるナイト少佐の台詞に困った様子の指揮官は今でも呼ばれるナイト少佐の渾名を言う。

「“スクライヴのナイト”は未だに現役らしいですね」

「そういう君こそウイラード大尉、元気そうで何より……ここらへんでそれ言うなよ。」

「元ですよ、元大尉。」

と、ウイラード大尉と呼ばれた指揮官は照れくさそうな顔しつつ咳いた。軍人であつた大尉の階級ではなく、「中尉」の階級章が襟元から見ることが出来る。そしてナイト少佐は彼のその様子を見て、意味ありげな視線を向けた。

ナイト少佐は別名「スクライヴ・ナイト」・「BOS被れ」・「技術屋ナイト」と呼ばれ、NCR陸軍モハビ方面軍ではかなり知名度のある人物である。彼はいい意味でも悪い意味でも聞こえる渾名はその両方の側面を持つ彼の特性故だつた。元々はONIと呼ばれるNCR技術局の軍属技術者としてやつてきた。主目標はフーヴアーダムであつたが、民間企業への委託ができる状態であつたために、彼の本来の仕事である軍事兵器の調査任務が与えられた。それはBOSのヘリオス1の調査だつたが、調査中に部下数名が誤つて警備システムをオンラインにしてしまい、死傷者数名を出す。それにより、ナイト少佐は管理不行き届きで処分を受けた。ONI支局の実権は文官組であるトーマス・ヒルダーンに握られ、ナイト少佐は実質干された状態になつた。

ナイト少佐が干されたことにより、ヘリオスワン太陽光発電所のサルベージ作業は難航し、急きよ新たに入ってきた科学者によつて研究が行われているが、まつたく進んでいないのが現状であつた。

彼は持ち前の技術力はBOSに劣ると言えど、NCRでは上位にいる技術者の一人であり、「ONI マツカラーン支局で腐つてゐるよりは」とマツカラーン基地司令のジェームズ・シュー大佐の手回しによつてモハビ前哨基地へ配置換えを行つた。良い意味での友人関係を築いていた二人は業務内容としてもかなり密接な付き合いがある。モハビ前哨基地はモハビ方面軍補給線の要であり、鉄道路線の使えない現在では前哨基地からのインターステート15号線の陸路からでしか行くことが出来ない。それ故に軍需物資を必要な基地に振り分けるための事務的業務を行わなければならなかつた。旧サービスエリアのインフォメーションセンターは警備兵の詰め所の他、軍需物資管理所やマツカラーンとの通信所などが集中する施設として生まれ変わつていた。

それでも、ナイト少佐の技術者的好奇心が無くなつたわけではなかつたのだが。

「ではウイラード中尉、部隊の作戦計画書を拝見させてもらおう」

「はい、少佐。こちらになります」

ウイラード大尉改め中尉は脇に抱えたクリップボードに挟んだりサイクル紙で作られた封筒から数枚の作戦計画書とNCR陸軍の許可証が入つていた。

「えーっと・・・モハビエクスピレスの護衛に・・・I15号線の敵勢力掃討?!おいおい・・・」

「航空支援も隨時取り付けてあります」

「・・・エンクレイヴのヘリを使えるなんてな。コロラド方面軍に回されているんじゃ?」

「参謀本部の方だと、フーヴアーダムの電力目当てに虎の子のヘリを動かしたいようです」

つい最近、N C R C F の囚人達は支給されていたダイナマイトによつて武装蜂起。カリフォルニアから来た看守を皆殺しになると、「パウダーギヤング」と名乗つて I 15 号線沿いを荒らし始めたのだ。プリムからスローンに至る幹線道路は使用できなくなつており、既にニューベガス周辺では物価の高騰が相次いでいる。N C R 陸軍の軍需物資や戦線の物資欠乏に喘ぎ、既にネルソンは失陥して、その他の戦線でも膠着状態が続いている。他の戦線が崩壊しないのはオリバー将軍の手腕ではなく、シュー大佐の物資管理能力の賜物故だろう。

だが、それも限界に近い。イーグルクロウのエンクレイヴ製兵器があつたとしても、人は霞みを食べて生きている訳ではなく、補給が滞っている状態では通常の作戦遂行は困難であつた。既に士気は落ち込み、ネルソン失陥後は「キャンプ・フォーロンホープ（決死隊駐屯地）」と呼ばれる前線基地を設けたが、逃亡兵が相次いでいる。戦局を開拓するには強力な助つ人が必要であつた。

ナイト少佐は読み終わると、持つてきていたファイルケースから数

枚の書類を取り出し、中尉に手渡した。

「これはここ最近のモハビの様子だ。日付は昨日のから二週間前のものがある」

「恩に着ます……」の二プトンはどうしたんです？『状況不明』とは？

「ああ、この先の95号線沿いの二プトンに黒煙が上がっているのが確認された。我々の部隊は駐屯してはいないし、独立地域だから不用意な干渉は避けている。情報部の報告ではパウダーギヤングが勢力を伸ばしている地点だが、現状の戦力では進軍はおろか偵察すらままならない状況だからな」

ネルソンはNCRにほど近く、加えて鉄道路線が隣接している町である。以前は独立した町として多くの鉄道労働者やNCRCFの模範囚が保釀扱いで羽を伸ばすことを許可していた。しかし、NCRCFの暴動により、鉄道路線が使用不能となり、町はNCRCFFのギヤングが牛耳つっていたかのように思えた。

だが、数週前には危険を顧みずに販路を広げていたキヤラバンの情報では、パウダーギヤングを客としつつ、しっかりと独立町として存続していたというのだ。ウイラードは半ば呆れながら、ナイト少佐からもらった書類と基地に到着してからの書類にサインをしていく。

「ではナイト少佐。イーグルクロウ警備保障第6輸送警護隊、現時点より基地での休養に入ります」

「了解した、ウイラード中尉。ゆっくり休んでつてくれ」

2人は敬礼し、双方自身の持ち場へと戻っていく。

モハビで起ころる戦況の打開。

この地で起ころる動乱が幕を開けた瞬間だつた。

## 十一話 My Kind of Town

晴れ渡る太陽。砂漠から舞い上がる砂埃。照りつく太陽は全生物の水分を取っていく。そんな道をあるく一人の運び屋がいた。そしてその後ろにはアサルトロンと呼ばれる珍しいロボットまで。

I-15号線を南へ進むとプリムがあると分かつていて運び屋はカジノの町プリムに向かっていた。

運び屋の荷物の事やそれを奪つたチエック柄のスーツを着た男、そしてグレートカーンズと呼ばれるギヤング達。運び屋の脳裏には、嘗てNCR領で略奪行為を行つていて、討伐作戦が展開されたこともある、因縁のある勢力であることに間違いない。だが、ビーステスプリングスの虐殺事件以来、NCRはグレートカーンズと極度の緊張状態となつていて。

「憎しみは憎しみを生む・・・・世知辛い世界だよ・・・・こゝは」

「悲しいですね・・・・で、パウダーギヤングは撃つちゃいましょうか」

辛氣臭いことを言つていた運び屋に対し、ウリエルは一片の慈悲なく、トラック近くにいた。パウダーギヤングの頭にレーザーを撃ち込み黙らせた。ほかのギヤングも気づいたらしく、プリムのほうへ逃げようとする。

——なんであいつ等プリムの方へいくんだ?

運び屋は持つっていたM16ライフルを構えて両足を撃ち抜く。足

が動かないレイダーはわめいており仲間がいないか確認した。

「他に敵兵は……居ないか」

「半径1kmに他の人間の大きさの生体反応はないですし、さつさと片付けちゃいましょ」

運び屋は内心、高スペックのウリエルに驚いていた。半径一キロの生体反応を瞬時に読み取ることが出来るのは今のNCRの技術では出来ないものだろう。

運び屋は足を撃たれて呻き声を上げるパウダーギヤングの一人に近づいた。

「痛てえ！糞、NCRの糞つたれ野郎が！」

NCRの青い囚人服を着たギヤングは足の関節を撃ち抜いているため、動くことは出来ないだろう。既に血が大分出ており、放置すれば失血死は免れない。

「うるさいですね……そもそもあなた達は問答無用で殺されても文句は言えない立場なんですよ」

ウリエルの正論とも言える台詞が囚人に投げかけられる。犯罪をしたのが、NCRであつたからだつたからこそ、問答無用で殺されずに刑務所で生きられたのだ。これが、NCR外のモハビなら、即射殺されてもお咎めにならないのだ。そもそも統一した司法機関はなく、犯罪行為や他者に害を為すならば、殺されても文句は言えない。

「俺はただの薬の売人だつただけなんだ！それなのに……」

「黙れ、次は右ひざを撃つぞ」

運び屋がホルスターからハイパワーを抜き、膝へと向ける。脅しではないと分かったのか黙るが、運び屋は淡々と問い合わせす。

「それで……お前らは何で住処の収容所じゃなくて南へ行こうとしたんだ？」

「し、知らねえよ。俺は下つ端で」

「よし、ウリエル。こいつの指を一本斬つて」

「了解です」

「うわああああ!!!待ってくれ! 言うから話すから」

運び屋は正直な所、拷問なんて見たくないし、指を斬られて泣き叫ぶ男の顔など見たくない。それをウリエルが知っているか分からなかつたが、話すことからか刀は鞘に入つたまだ。

「B棟の連中がプリムを襲おうつて行つて俺も付いていったんだ。俺は手前の所でキャラバンを襲えればいいかなつて。そしたら、ジョーの野郎がグッズスプリングスを襲おうつて。そしたら……」

「いや、もう十分だ」

プリムで何かしら補給品を手に入れようと考えていたが、プリムにはN C R C Fの囚人が占拠しており、しつかりとした補給ができないことを悟った。

「どうします?」

「うーん、一応プリムの様子を見てみるか。だがモハビ前哨基地が近いから大きく迂回して通り抜けることも可能だし」

「いや、そうじゃなくて……」

器用にもウリエルが指さす先には尋問したパウダーギヤング。

「こいつの始末どうします? そこの砂漠にふんじばつておけば蟻かブロードフライの苗床になりますよ」

捕虜の取り扱いは核戦争後のウェイストランドでも取り決めがしつかりなされているのが、N C Rという民主主義国家だった。それでも、旧世界でいう“強制労働”に近いものであるが、餓えはしても死ぬほど酷使するのではなく、ウェイストランドで餓えるよりは労働すれば食事を貰えるとして軽犯罪に手を染める者がいた。だが、それはN C R領外であれば犯罪=死は当たり前なのだ。M r. ハウスの取引によつてモハビにN C Rの犯罪者を労働力として使うために連れてきたが、外へ出れば射殺が常。犯罪を犯せば、撃たれるリスクがあつた。キャラバンを襲い、運び屋たちを襲つたパウダーギヤングは死んでも誰にも文句は言われない。

「あ～……それもいいかもね」

「ちょつ!!? マジかよ！頼むよ！N C Rに投降するから勘弁してくれよ！」

ジャパニーズドゲザという最上位の謝罪をしようと頭を下げようとするが、膝関節を撃ち抜いたパウダーギヤングは上手く出来ない。既に自分の運命を察しているのか、ズボンが湿り、目からは大量の涙が流れ出た。

「ウリエル、後は頼んだ」

「了解です、亀甲縛りでいいですか？」

「こ、後生だからあ！頼む！やめてくれ！」

ギヤングだつた男の悲痛な叫びが砂漠に響き渡る。それを止める者は誰も居なかつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「…………はあ…………」

モハビの外れ、プリムの端に位置する場所には、土嚢と蛸壺が掘られた陣地が築かれていた。本来であれば、軽機関銃などの支援火器が添えられているはずであろう場所には、暇を持て余していたNCR兵がため息をつく。

プリムはカリフォルニアからニューベガスに至るI-15号線沿いに出来た町である。モハビに来た旅人はまずプリムでキヤツプを落とし、ベガスのストリップ地区に至るルートを進んでいく。NCRは最終的に鉄道を走らせ、モハビをNCRに編入すべく動いていたものの、レギオンによる侵攻や破壊工作、Mr.ハウスのロビー活動を含む政治的介入が行われ、鉄道の施設はパウダーギヤングの蜂起も進められていない。

しかし、I-15を通つてここまで来た旅人は一度プリムで補給品を購入してストリップ地区へ行くのが常であり、独立の保たれたカジノを中心とした交易町であつた。だが、現在、プリムではNCRCFからやつてきたパウダーギヤングの一派らしき武装集団に、パイソンステイープホテルを拠点に占拠しており、住民たちはピッキ&バンスカジノに立てこもつていた。鎮圧に赴いたモハビ前哨基地駐屯の部隊、NCR陸軍第301軽歩兵連隊第五大隊第一中隊の一個小隊は陸橋の向こう側に陣地を設けていた。

本来ならば、早急に脱獄囚を鎮圧する手筈であつたが、予想外の攻撃に遭い、部隊はかなりの打撃を受けた。移動手段を徒步とする彼ら

は機動力に欠け、何とか陸橋反対側の廃墟地区に防衛陣地を敷き、膠着状態にあつた。

NCRは嘗て質より量を重視した「兵士は烟から取れる」ソ連っぽい匂い漂う軍隊であつたが、最近は兵器や物資の質を高めたものに変化しつつある。それでも、末端に全てが行き届いてはいなかつた。敵の攻撃の可能性がない防御陣地には歩哨が一人しか立つておらず、歩哨は暇そうに欠伸をする練度の低い二等兵。新型戦闘服を身に纏い、新型ライフルを持つていたとしても、中身はウェイストランド人とそく変わらない。軍服を着せてもらつている民間人かそれともコスプレイヤーの類なのか。もし、ここにマツカラーンのシュー大佐がいれば、すぐさま本国の訓練施設に再教育を命令し、フーヴァーダムのムーア大佐がいれば、その場で射殺かもしれない。

シーザーレギオンの兵が見れば、嘲笑と共に狙撃することがあるだろう。パウダーギヤングと言つたチンピラ紛いの犯罪者集団が相手であつたことが幸運であつた。

「あゝ・・・核の冬が訪れないかな」

もし、戦前から生きていたグールの老人がいれば、右ストレートをすること間違いなし。バイソンステイブホテルから狙撃も可能なその場所で歩哨しているにも関わらず、緊張のきの字も見えないその兵士は新型ライフルを壁に立てかけて瓦礫に腰を掛ける。

もはや、歩哨の意味を為していない。

— 眠りしてしまおうか

兵士の心の悪魔がそう囁く。脳内NCR議員が睡眠法案に賛成し、保守的議員の大反対を押し切つて可決する。目元が重く感じ、視界は一気に狭まつていく。しかし、視界が狭まる中で荒野の彼方に動く姿を見つけて一気に覚醒する。

腐つても鯛、NCR兵と言えど訓練を受けた軍人。何度か戦闘に参加していたこともあり、反復教練によつて脳内に警戒信号が送られ、一気に意識が覚醒する。そこに見えたのは近年、NCRが採用した新型アーマー「プレートキャリア」と呼ばれるコンバットアーマーを身につけた人物と見たことのない濃緑色の旧軍ロボット。そして、そのロボットが引きずる人物。NCRCFの囚人服と思われるが、何をしたのかその姿はボロボロになっていた。

青い囚人服は何をしたのか、擦り切れしており衣服としての意味を為さなくなつており、さらに下着が丸見えの状態からゴモラの男娼を想起させる様子だ。そして極めつけが囚人を拘束する荒縄。それは粗く、囚人の肌を傷つけるものだつたが、その結び方は梶包や拘束の意味を帶びているだけでなく、どことなく卑猥であり、男色やSMを趣向に置いている者ならば、確実に興味を持つ。そしてそのNCR兵は

「……（ゴクリ）……」

と唾を飲み込み、やつて来る者を今か今かと待ち構えたのだった。

## 十二話 Untouchables I

「災難だつたな、運び屋さん。プリムは今ご覽の通りの有様さ」

鎮圧部隊を率いるヘイズ少尉は運び屋がやつてきた事に対し、パウダーギヤングの密偵かと思つたようだが、N C R C Fへ向かう賞金稼ぎやこの事態を商機と感じて北へ赴くキャラバンもいる事から、半信半疑のまま運び屋を迎え入れた。幾つかの質問と共にヘイズ少尉の持つ無線によつて、モハビ前哨基地にいるモハビ・エクスプレスの連絡員と話が付き、身元の確認が取れたのだ。運び屋の名前は分からなかつたものの、パウダーギヤングの密偵でない事は見て明らかであつた。

「敵の規模は？」

「敵はパウダーギヤングから離脱した野盜擲き約20。加えてミニガンを搭載するトラックが一両いる」

「嘘だろ……」

運び屋は頭を抱える。パウダーギヤングから離脱した野盜がそれらを保有したのには訳がある。N C R 軍はスローンにおけるデスクローの対処として速度と火力があるミニガンを搭載したテクニカルトラックを派遣した。対戦車ライフルや重火器を搭載した偵察小隊はI—15からプリム、ジーンスカイダイビングまで来たものの、車両が故障。N C R C Fで修理を行つていたらしい。その時、N C R C Fの暴動とダイナマイトによる爆発。これにより、N C R 陸軍の兵器も幾つか奪われてしまつた。

プリムからストリップ地区に至るI—15号線はスローンのデスクロー、N C R C Fの蜂起によつて完全に遮断。本国から増援部隊と

して重装備部隊が向かっていると報告があつたが、まだ到着していない。

ヘイズ少尉は軽歩兵連隊の一個小隊を率いてきたものの、情報と違う敵の規模に圧倒され、プリム西側に後退。膠着状態となっていた。小銃や支援火器はあるものの、対戦車ロケットと言つたものは持っていない。

現在、駐屯しているのは一個分隊のみであるが、残りの二個分隊はN C R C Fへ威力偵察を行つており、所持する軽迫撃砲や爆薬と言つた兵器はプリムには残されていない。プリムでの人員配置と作戦は全くの誤算だつた。プリムまで勢力を伸ばしていく、火力のある軽装甲車輛がいるとは思わなかつたのだ。

「ダイナマイトは幾つか持つてゐるが、破壊工作できるか……」

消音器はなく、使用できる武器も限られている。軽歩兵連隊にはそもそも支給されていないだろう。闇夜に紛れて破壊工作出来なくもないが、消音器を持たないでいくのは自信がない。

「それにプリムは独立町だ。彼らの自治権を維持したいと言う意思を尊重するN C R 政府の意向を無視するわけにもいかない。……昔とは違うからな」

現在のアーロン・キンバルが大統領となる前の政権、ウエンデル・パターソン大統領時代のこと。2248年にタンディ大統領が死去し、副大統領のジョアンナ・ティベットが大統領に就任した後、外交

重視の政策を打ち出した。危険な人食い部族が攻撃的である場合に限り、攻撃を認めていたが、積極外交による平和外交路線へ舵を切つた。

ところがモハビに流入したN C R市民がレイダーによつて虐殺されたことをきっかけに失脚。ウェンデル・パターソンがその後任として選出された。

ただし、政策は外交平和政策から打つて変わり、軍事を前面に押し出したものであり、モハビに軍を駐留したのもその一環だつた。この時の軍事一边倒の政策は帝国主義とも言える政策であり、これまで独立集落として存続していたコミュニティーを軍事的優位から一方的に吸収、旧州道80号線の部族民に対しての攻撃を始めた。旧世界の文化を継承したN C Rと自然と共に生きてきた部族民とは、嘗てのインディアンとアメリカ開拓民と同じように征服。B O Sと部族民の二方面に戦線を築いてしまつた。

アーロン・キンバルの就任以降、タカ派ではあるものの、外交面においては軟化した。しかし、シーザーレギオンとの戦いも含めて、軍事一边倒な政策は変わつておらず、三方面の戦いを強いた国内は度重なる戦乱により、政府と企業の密接な結びつきが汚職と腐敗を招いた。

「つまり、プリムの脱獄囚を掃討するにはN C Rに属することを宣言しなければ、軍は動かないという訳か……囚人を連れてきて、管理不徹底で逃がしたのにな」

「それを言われても困る…………」つちとしても掃討したいのは山々だが、前哨基地からの命令だからな。」

ヘイズ少尉は苦々しい表情を浮かべる。囚人を連れてきた手前、そこを指摘されたら言い訳は出来ない。軍の砲身ならば仕方ないことだつた。

「ううん……テクニカルトラックを排除できれば、二人でもなんとかなるし、ダイナマイトは腐るほどあるから……成功確率は昼間で20%、夜間で67%でしようか？」

ウリエルは右手の親指でテントの外にある爆薬箱を指さす。爆薬箱はパウダーギヤングのキャンプと脱獄囚の持ち物から頂戴したダイナマイトや地雷、簡易的な動体センサーを利用した簡易地雷、キッキンタイマーを利用した時限爆弾など。それひとつあれば、バイソンステイブホテルを丸ごと崩壊させることが出来るだろう。

「あとは音が出ない武器か……ヘイズ少尉、サイレンサ消音器はないよな？」

「レンジャーや第一偵察隊、それがイーグルクロウの傭兵部隊じやなければならないよ。我々は軽歩兵だから、もっぱら占領地域の治安維持と軽装備の進軍が任務だつたりするし……」

ヘイズ少尉は愚痴るように呟き、テーブル横に立てかけられた新型ライフル「R91アーバンアサルトライフル」などの武器ラックへ指をさす。

以前まで採用されていたAR-15。通称「サービスライフル」military軍用ライフルはかなり以前の設計思想を元に開発された軍用アサルトライフルである。

第二次大戦中、ヒトラー率いるナチス・ドイツ第三帝国のstg44を中心とした先進的な重火器は終戦後、東西に技術が流出した。こ

れらは後に中国とアメリカの兵器開発局などの次世代の歩兵の銃器を開発する種子として、多くの技術者が参加した。その中でAR-15は名高い開発者によつて作られるも、大戦争後の現ウェイストランド在において、多くの兵士は製造する工作機械と未熟な工員によつて「駄作ライフル」と烙印を押した。しかし、設計図通りにやれば現在でも通用する傑作アサルトライフルとして通用するのである。

問題なのはNCRにおける技術採用部の傲慢さと工作機械の過大評価によるお陰でAR15の設計者が貶められていることであるが、今回はそれを批判はしない。後の設定資料にてお話ししよう。

現在NCRが正式採用したR91アーバンアサルトライフル。それは2077年当時における最新型として米軍に配備されたものだ。西海岸には製造拠点があまりなく、製造拠点が僅かながら残存するAR-15などのサービスライフルがNCRでは主流となつた経緯がある。

ちなみにアンカレッジ解放作戦では、R91よりも水冷式アサルトライフルのほうが、寒冷地では雪に突つ込んで冷やすより、水冷タンクを復刻してアサルトライフルに巻き付ける方が手取り早かつた。次世代プロトタイプコンピューターシミュレーター電算演習器では、新兵の練兵速度を上げるために、水冷式アサルトライフルではなく、そちらを使った経緯がある。

R91は東海岸、主にワシントンD.Cを防衛するためにその地域一体に広く採用されたが、ボストンを主としたコモンウェルス地域には水冷式アサルトライフルが配備された。これはR91と言つた複雑なアサルトライフルよりも、比較的高い工業力故にパワーアーマー普及率が高いマサチューセッツ州の機甲兵が装弾数や集弾性能・連続的な弾幕を張れる継続的戦闘能力が断然R91よりも、水冷式アサルトライフルが有利であつたからに他ならなかつた。

(ちなみに国防総省のデータによると、チエイス将軍とVRシユミ  
レーション制作会社とその件で何度ももめた記録が散見される)

そして、R91アサルトライフルは東海岸に集中的に配備された次世代アサルトライフルの一つであるが、木製ストックやハンドガードも含め、石油不足に伴つた設計が為されている。Rシリーズ以前のAR-15を有するMシリーズは石油の安定供給が見込まれていたが、Rシリーズのライフルは石油不足に伴い、木製の部品や金属製部品を多く取り入れた。R-91を製造したステント・セキュリティー・ソリューションズ社は米ソの冷戦時代初頭に開発されたセメントやG3ライフルをモデルとした過去に戻つた設計思想を持つている。しかし、ローラー・ロッキング／ディレイド・ブローバックシステムを採用したそれは、その後のキャピタル・ウェイストランドにおける混沌期においてBOSや傭兵結社のタロン・カンパニー、果てはレイダーなどの無法者集団に至るまで、新兵でも短期間で遠距離の敵を射殺できる精度から、製造されたのが200年前でも整備さえすれば撃つことが出来る傑作アサルトライフルが出来上がった。

そして、その小銃が東海岸のとある勢力の者どもによつて、工作機械の発達と工作要員の養成により、R91の生産が出来るようになつたのである。

以前として戦前のアメリカの技術力には劣るかもしけないが、R91を再設計し開発能力を持つまでにNCRは成長した。

長つたらしくアサルトライフルの開発過程について説明したが、それらの突撃銃の変遷についての説明には・・・・・（添削により以下削除）

ハイズ少尉は頭を抱えるが、運び屋はその横にいる女性准尉に目が行つた。もしかしたら、ハイズ少尉の恋人かもしけなかつたが、案外美人な彼女であつたため、ちよつと卑猥な想像をしてしまう運び屋だつた。

持つていたきれいな水のボトルから清潔な水が滴り落ち、綺麗な肌の表面をするりと滑り落ちていく。白い肌に水滴が垂れていることに劣情を禁じ得ない場面であつたが、ふと運び屋は思いついたように、その女性准尉に近づいた。

ハイズ少尉は運び屋の尋常でない動きに驚き、咄嗟にホルスターに手を伸ばし、件の女性准尉は驚いたのか、水のボトルを口にくつつけたまま椅子から転げ落ちてしまう。貴重な綺麗な水が零れ、薄着であれば密着する素肌が見えてしまいそうであるが、残念ながらタックトップでなく、アーマー姿であつたことが幸いだ。そして、尻餅を突き、女性准尉の顔元に運び屋は近づくとキスをしそうな勢いで、水のボトルを奪い取つた。

「…………あ！この方法があつたか!?」

「成程  
!!!!」

運び屋の発見に周りは分からなかつたが、一人……いや一台の口ボットが同じ結論に達した。

## 十三話 Untouchables II

プリムは地図上、荒野に咲く一輪の花だった。I—15号線と州道95号線の境が近くにあるため、両幹線道路の交差点に近いその町は比較的に栄えていた。大戦争以前よりベガスの来客から金を吸い取っていた歴史があり、近づけばベガス行きの客とNCRへ帰る帰還兵、旅人が初めてキヤップを落とす土地か、もしくは再び土地にキヤップを落とす。蟻地獄に似たその土地は必然的に交通の要所となり、モハビ・エクスピレス本社が設立された。現在では、本社は移転し、小さい支社となっているものの、NCRへの玄関口として、ニューベガスの物流の通り道となつた。

以前までモハビ・エクスピレスは単独任務による凄腕運び屋を雇い、重要貨物を運ぶハイリスクハイリターンを業務方針としていたが、現在ではMr. ハウスの政治的手腕と資本主義によつて大規模輸送と大量資材の輸入により確固たる収入を得ていた。

以前のベガスであれば、カジノの収益で稼いでいたはずであつたが、カジノは所詮来客の財布を目当てに考える二次産業、三次産業に頼るしかない。だが、Mr. ハウスは違つた。ベガスが独立した勢力となるよう、自分達の産業と過酷な環境によるモハビ・ウェイストランド人の強靭なバイタリティー、キヤップの資本力によつて長期的な「Mr. ハウス帝国」を実現する。

NCRに未だ依存しつつも、科学力と強大な軍事力を背景に独自の勢力を確立する大帝国構想は実現しつつあつた。

だが、プリムはいわゆるNCRとMr.ハウスの政治的、経済的戦争の真っただ中と言えよう。なぜならば、プリムはNCRモハビ前哨基地と目と鼻の先であり、Mr.ハウスからしてみれば、手中に收めるモハビ・エクスプレスの支社があるところである。モハビ・エクスプレスは各所に独立して運営できるような能力を持つてゐるはずであつたが、NCR領内とモハビの綱渡し的存在であるプリム支社はNCRへの経済的進出には欠かせない土地であることに他ならない。

一方、NCRはプリムを支配したいと曰ごろから目を光らせていた。独立勢力の維持もNCR憲法に課せられており、法治国家であるNCRにとつては行動を制する鎖でもあつた。そして、Mr.ベガスにとつてプリムはNCRへ経済進出を行う橋頭堡。強引な手段を用いればNCRの入口を狭まることに他ならない。

その事から両者の手加減と表現すべき緊張状態が生まれつつあつた。

その緊張状態がNCRCFから離れた脱獄囚一派にしてやられた原因だろう。その均衡は運び屋の匙加減により変化することはどの勢力も感知していなかつた。

「あ～……なんでここには売春宿ないんだよ」

傭兵のような格好に身を包んだ脱獄囚は持つていたシングルショットガンを肩に掛け、恨めしそうに隣の同じ収容棟であつた囚人にぼやく。

「さあ、こここの保安官はネルソンみたいな卑怯者じやなくて眞面目な保安官だからな。それも仕方がない」

悪を憎むキヤップ亡者のバウンティーハンターである賞金稼ぎがプリムの保安官になつたことは囚人達では飯時の噂話として評判であつた。既に囚人達の慰み者になつた妻の横で朽ち果てた保安官は、首を搔ききられて生きてはいない。囚人達は「ざまあみろ」といわんばかりに、かれらの住居に卑猥なメッセージをスプレーで宣言して以降、その家屋は放置されている。ぼやいた男はNCR陸軍との銃撃戦に参加していたため、保安官邸宅での宴には参加していなかつた。

ぼやいていた男はNCRでも名の知れている凶悪な強姦殺人を複数やらかした重犯罪者、プリム住人が殆どカジノに立てこもつているため、突破する手段がなく、人数に事欠いた脱獄囚はNCRと膠着状態に陥つていたのだ。

強姦魔の男は辛抱ならんと戦前のポルノ雑誌片手に悶えていたが、今からネルソンに行こうかと頭を過る。だが、結局の弱い脱獄囚は頭が残虐な手段で部下を統率することから、裏切り者はシーザーも恐怖するような殺し方でもつてひどい死に方をする。犯罪者集団が結束する上で必要であり、強姦魔の男もホテルに籠る首領に恐怖していた。

「ネルソンに居れば良かつたんじやないか？」

「やだね、腐れ娼婦とやれば梅毒移されるだろうよ。それよか幼女……」

強姦魔ならぬロリコン野郎の台詞は口から紡がれることなく、他の囚人の遮る声によつて聞こえなくなる。

「おいおい、変態過ぎるぞ。経験を積んだ女の方がいいに決まつてるだろう」

「確かに！お前は変態過ぎる。おれはやつぱり経験をちゃんと積んだ女がいいぜ。幼女なんて痛がるだけで面白くないわ」

トラックの修理が終わつたのか、一人は油まみれになつたジャンプスーツを着こむ囚人や警備をしていた対物ライフルを構える囚人がやってきた。本来であれば、トラックを警備しなければならないが、そこは訓練された兵士ではない。ロリコンの囚人と最初に居たアジア系の囚人は下世話な話をしたことに後悔したが、今更辞めろとは言えなかつた。彼にも幼い娘がいることから、その囚人は悪態を付いた。

「俺はNCRに別れた女房と娘がいるけど、絶対おめえみたいなのに会わせたくねーよ」

「ぶ男な娘はブサイクにきまつてら。俺みたいなロリコンにだつて分別はあるぞ」

「てめえみたいな糞に女の何がわかるんだよ。いいか、おれは家族のためにここに来た。俺はヤマオカ組の名譽のためにこんなド田舎に来たんだ。もし、俺がレギオンの連中やNCRがいなければ、おめえ

みたいな糞ダメからきた汚物野郎に……」

強姦魔と組まされたある意味不幸な男、アジア系改め日系の刺青のヤクザはN C R C Fでもあまりお目にかかるない日本刀を持ち、あたりを警戒する。上裸の彼の背中にはびつしりと刺青が入れられている。それは周囲に危険な男であると知らしめていた。

ヤマオカ組の名誉のために来たと言うヤクザの男は強姦魔に書くのも躊躇うような汚い言葉を浴びせかける。「てめえなんか刀の錆にもしたくない」と言う位変態のことを嫌つてしているようで、何故彼らを歩哨として組ませたのか、リーダーシップを疑うことだろう。しかし、変態の強姦魔からは返事がなく、不審に思つたヤクザの男は背後にいた変態の強姦魔を怒鳴る。

『てめえ！話も禄に聞けん阿呆かおんどれわあ!!!!』

とうとう堪忍袋の緒が切れた男はモハビでは全く話されていない日本語を叫びながら日本刀を振りかざして威嚇しようと変態へ斬りかかるうとするが、振り被ろうと目線を男へむけたが、男の姿はない。

『残念…………奴ハモウ死ンデルヨ』

片言の日本語が聞こえたと同時に、体内へ電流が走る。それは体の機能をほとんど停止させて失神に導く。途切れていく意識の中で見えたのは、銃を構える白人の男と濃緑色の奇妙な口ボットだった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

※※

爆弾映画を思い出すと何であろうか？

多くのエンターテインメント映画を思い出すのであれば、それは爆弾にまつわる話が多い。爆弾と言う兵器が生まれて以来、そうした作品は映画と言うエンターテインメントにおいて、親しまれたものであるスリリングな体験を視聴者に楽しんでもらうことを中心置いていたものが多いだろう。例えば、時速数百キロを満たない速度でなければ爆発する高速列車や時速数十マイルで走行しなければ爆発する交通バス。はたや、爆弾が仕掛けられた飛行船などなど、数え上げればキリがない。

その中でも爆弾が仕掛けられたエレベーターなどは並べるべくもなく、爆弾を使用する凶悪犯罪の中でも悪質極まりない代物であると言えよう。エレベーター内は基本的に密室であり、扉が開かなければ出ることは叶わない。電子ロックとコンピューター制御のエレベーターではなおさらであり、人間の手によつて管理された時代よりもコンピューターによる管理によつて、ハッキングや爆弾によるテロ攻撃により人質にされるケースも存在する…………かもしれない。

そのような犯罪はファイクションの中だけであり、そうした犯罪を行う人間が管理しやすいと思われるかも知れない。エレベーターシヤフトなど整備士しか入れない場所は専門技師しか入れない他、侵入経路はおろか技術者の特定が容易い一面もあり、保安上の観点から犯罪も難しい。

「こちらスネーク重りに爆薬を設置完了。二階からはもうそろそろ脱出できる。つて……なんでスネークなんだ？」

「潜入ミッショーンならスネークですよ」

「…………スネークという人物は知らないが、プリスキンという人物は知ってる」

「あれですよ、蛇の工作員が潜入するやつ」

「俺が知っているのは、口サンゼルスでエレベーター爆弾人質事件に失敗した身代金目的の元爆処理警官が狂つて交通バスに爆弾仕掛けた話しだけどな」

「なんですか？」

「ああ、ハリウッドで作られたN C Rの宣伝映画だよ。そのロスの警官の父親がレギオンのフルメンタリーツていう設定の」

「はあ～～～、N C Rの映画つてなんか冷戦時代の映画みたいですね」

「かなりの大金稼いだアクション映画だぞ。キアノ・ラーブが主演の  
……」

「私はワシントンの生まれなんで知りませんよ」

「ぼろが出たな……」

「あつ……」

口ボツトの欠片もないアサルトロン。人間のようにボロを出すな

ど、笑いを誘うそのミスに運び屋は三階のエレベーターシャフトから小さいスペースを進みながら、笑いを堪える。スカーフで埃を吸わないうように進んでいた。

ウリエルの考えた作戦は第一段階として、外にいるトラックを警備する囚人たちを排除する。必要と在ればトラックごと囚人たちを爆破する。第二段階はジエットコースターのレール上から侵入し、陽動作戦によつて二階へ続く階段とエレベーターシャフトに誘導。そして集まつたところをダイナマイトで吹き飛ばし、一網打尽にする。

結果、第一段階は上手くいった。トラックを警備していた囚人は話に夢中になつたため、無防備となつた。そのため、トラックは無傷で押収。囚人の一人を除いて全員射殺したあと、一人を生け捕りにした。そこまでは良かったのだが、エレベーターシャフトを含めて建物の多くは崩落しており、三階は人が入れぬほど瓦礫が積まれていた。

エレベーターシャフトに至る通風孔は、ボロボロとなつており、エレベーターシャフトに来るまで何度も音を立てそうになつたが、やつと爆弾を設置するところまで運び屋はやつてきた。

「やつと出られる。ひと騒ぎ起こすから、そうしたら爆破を……」

敵への誘導によつて某映画のようにエレベーターシャフトで一網打尽にしようと思ったが、ロボットの叫び声によつて運び屋の伸ばしていた手を震わせた。

「あ、しまつた！」

「…………んん!! おい、ウリエル！ なにした」

人間臭いミスと共に、ウリエルが持つ無線から爆弾の起動音と共に秒間ごとになるアラームが運び屋の無線から響き渡る。

「ミスりました、配線違いで „プランB“ に繋いでました」

「うおおおおおおおおい!! ばつか！ おまつ何やつてんの！」

Bプラン、1分経つとホテル全体を爆破するようにセットしたのである。

最早、ロボットでドジつ子とか、戦闘時では糞以上のものではない。むしろ、投げつけて敵に戦意消失できるのならば、排泄物のほうが優秀である。投げた本人がの味方へ誤射するような奴でなければ、そんな酷いことにはならないからだ。

もはや、運び屋には一片の猶予もない。パイソンステイーブホテルには人質が居るか居ないかは知らない。もし、カジノに籠城するプリム住民に話を聞ければよかつたが、そんな時間も余裕もなかつた

人質が居ないことも祈りつつ、隠密行動もへつたくれもないと思いながら、運び屋は盛大に音を立てて、二階のコースター整備扉へ走る。

生憎、侵入経路と警備が薄いことも相まって脱獄囚はほとんど警戒していない。ただ、運び屋の痛恨の叫びが聞こえたようで、警戒度が高まつた。

「この人間以下！粗大ごみ！自爆ロボット！カミカゼ！」

「神風とは!? 敵に勝てますね、神様とは縁起がいい！」

「言い訳あるか！この間抜け！」

己を犠牲に攻撃する特攻攻撃を例えに挙げたが、神の攻撃と比喩される蒙古侵略を阻止した津波を「神風」と呼ぶことや神の風など神話から来ていることを知らない運び屋はウリエルの頓珍漢な台詞に怒りを覚えた。

運び屋は罵倒し、力の限り足を動かす。そして、タイマーが0になり、各所の要所に仕掛けられたダイナマイトが固有の無線周波数を拾うセンサーを起動。それと共に起爆剤が点火され、200年以上の建築を誇るアメリカの商業施設が一気に爆発、がれきの山と化したのであつた。

十四話 Investigation of cases

「本当にすみませんでした」

ドゲザ、それはモハビ・ウェイストランドでは全く知られていない謝罪の作法である。実はNCRには日系アメリカ人の子孫が多数おり、NCR領内のアジア系は日系がおおくいた。その、アイデンティティ故に孤立するコミュニティーも存在し、ヤクザなどがウェイストランドに現存する所以でもある。そのような文化が存在するゆえか謝罪を最上位の作法として歪曲する（間違つていないかもしれないが）事実が存在し、なぜかその文化を良く知っていたウリエルと、なぜか知っていた運び屋は丁寧に正座をして件の人物へ謝罪を行う。

その人物とはプリムの保安官の補佐であるビーグル保安官代理であつた。もし、カジノに籠つていたプリムの住人とコンタクトを取りれば、ビーグルが人質になつているという事実が分かつたはずであつたが、籠城によつて入口が塞がれたことによつて運び屋は脱獄囚を一掃してからコンタクトするという流れとなつたのだ。ビーグルについては「知らなかつた」と、全治一か月の大けがで幸運にも収まつたことでプリム他住民は理解を示した。だが、ダイナマイトで生

き埋めになりかけた本人からしてみれば怒ることも無理はない。

死ぬよりマシだろ、と言う読者もいるかも知れないが、爆発に生き延びて生き埋めになつて飢死するより、一息に死なせてくれと思う方が寧ろ慈悲があると言える。そんな苦しみを味わう寸前、ウリエルが形だけの現場検証で彼を見つけたのだから僥倖と言うほかない。

そして、プラチナチップの行方をしる人を知つているのがビーグルであるとの事で、媚びを売らなければならない。脅してもいいかもしないが、運び屋にとつてそれは悪手である。もし、モハビ・エクスプレスの支社長のジョンソン・ナッシュの機嫌を損ねねばどうなるか分かった物じやないからだ。

「ビーグル、お前さんにも責任があるぞ。こんな騒動になつたのは保安官補佐のお前さんの責任でもある。土下座するのは彼でなく、お前だぞ」

「うつ…………だけども……」

保安官代理や補佐を努める能力があるが保安官の器ではない。プリムの運営は彼がトップであれば、N C Rに吸収されるだろう。だが彼以上の統率力と周りの意見を纏める頭脳であれば、プリムは丸く收まるであろう。

「(s p e e c h : 30) なら、保安官候補を見繕つてプリムの皆に認められればいいんだよな？ それなら奴らの情報を教えてくれるな？」

「（成功）……ああ、それならいいよ。俺が補佐に値する保安官であればいいのだが」

ビーグルもプリムの人々に引け目があることから運び屋に強く言えない。運び屋と一緒にいるウリエルのお陰で生きているのだ。彼らのせいだという意味も確かにあるが、彼らのお陰でプリムの脱獄囚を排除できたのだ。N C R に属さない運び屋だからこそ出来る芸当であり、N C R に併合されることを良く思わないプリムの住人からすれば、感謝をしてしかるべきだ。保安官が居なくなつたら流石に困る。だが、保安官補佐が死んでも、似たような人材なら保安官以上の数が存在するだろう。

「(s c i e n c e : 1 0 0 + s p e e c h : 7 0 + B a r t e r : 5 0) では、私がご紹介します！ 我らの代表であり、プリムの保安官の登場です!! さあ、C o w b o y ! シ（。Д。Щ）カモーン」

ウリエルの手招きと共に現れたのは、ピッキ&バンスカジノの案内役であつたプロテクトロン。そのテンションの高いカウボーイはプリムの住人からは煩いと評判だ。それは、煩さ120%増しの騒がしさと共にアームを回転させながら、飛び跳ねるように動きまくる。

「ヒヤッハー!! モハビいは地獄だぜえ!!! 悪人共は皆吊るし首じやあ!! 我はプリムの保安官! ピツキ&バンスカジノの案内役にして空前絶!!!! 後の神に愛されたロボットだ! 法を破る奴は容赦しねえ〜!」

「おい、この糞アサルトロン。なぜウザいキャラクターにしたんだよ」

その答えは聞く必要はなかつた。

「いや、なんとなくです。面白そうだつたし」

囚人から押収したN C R C F の刻印があつた警棒で思いつきり頭を叩く。プリムの住人はニューベガスのコントかと頭を抱えるのだつた。

## 一方、プリムの西。

デスバレーに通じる道。戦前には米核戦略軍が管轄下にあるホーブヴィル弾道ミサイル基地の緊急避難通路兼職員隠蔽通勤路として利用されたそこには一人の男が立っていた。

戦前、弾道ミサイルサイロの担当職員や情報将校を特定されないために、一般人に扮して非常避難通路から通勤する将校が多くいた。戦争直前には、ホープヴィルミサイル基地周辺には平和団体が数多く来ており、戦略核弾頭の使用を辞めるようにデモを繰り広げていたためである。職員は正門から入れば身分がばれ、最悪の場合自称平和団体によつて私刑に晒されてしまう。そのため、核弾頭管理担当官や航空管制官などは隠れて基地に通勤する必要があつた。

戦争後には、その入り口はバスの瓦礫によつて封印された。核の冬とデスバレーの気圧の変化によつて、倒壊したバスやトラックが積み重なつた。冬の後もそこは閉鎖され、忘れ去られた軍事施設。小高い丘に見えた入口に件の人物はモハビの夕焼けと惨事を物語る黒煙がプリム大空に登つてゐる。

「“多くは奪われたが、残されたものも多い”……。」

イギリスの詩人、テニソンの著した「ユリシーズ」の一節。

色の濃い肌には数々の戦いによつて傷跡が多く、プリムの黒煙を見る眼孔は獰猛な肉食獣のような鋭さがあつた。

「運び屋、モハビに飲み込まれる事を選ぶか…………それとも…………エ  
ンクレイヴの友人を得てモハビを燃やすか……見ものだな」

彼の近くにはエンクレイヴが遺していった偵察用ロボットが一機浮遊する。キャピタルウェイストランドでは多く偵察用として利用されてきたそれは、量産機ではなくカスタマイズされた試作運用機として改良されたタイプであつた。スピーカーから機械音のビープ音が響き、会話のように鳴る。まるで、飼い主に懐く犬のようであつた。

「アルフレット、心配ない。運び屋は強欲なベガスに喰われなかつた。奴は生き延びるだろう…………。最後に奴はここに来る…………。必ずな…………」

男はモハビに背を向けてデスバレー核都市跡、『ディバイド』へと歩いていく。彼の背には嘗てこの大陸を支配した旧世界の旗が描かれていた。

## 第二章 設定資料

〈機密ファイル！閲覧申請を担当士官に行つてください！〉

R O B C O I N D U S T R I E S U N I F I D O P E R A  
T I N G S Y S T E M

C O P Y R I G H T 2 0 7 5 — 2 0 7 7 R O B C O I N D  
U S T R I E S

| Server 48 |

ベガス方面軍第二情報隊分析報告

ようこそ、ゲスト 不正アクセス 様

(server1にてログインを行つてください)

- ∨・ベガス方面軍戦略分析報告
- ∨・イーグルクロウ警備保障展開分析
- ∨・歩兵標準装備分析報告
- ∨・AR-15から更新、R91アーバンアサルトライフルの評価報告

告

∨・プリム

∨・プリム

∨・ホープヴィル

担当官：モハビ前哨基地司令、ナイト少佐

プリムは基本的に独立集落であり、保安官によつて統治される。ただ、前保安官は独善的な超法規的措置として犯罪者へ即銃殺というあまりにも過激であつた。現在はN C R C Fへ自発的入所をしており、現在のプリムの統治状況はマクベイン保安官の元、町内会による議会民主主義に基づいている。

しかし、戦前から存在するモハビ・エクスプレスの支社があり、ニューベガスへの物流拠点となつてゐるため、経済成長の伸びしきがあると期待される。そのため、モハビ・エクスプレスを買収したMr. ハウスによつて吸収されようとしており、本国から出向したクロッカーダ大使より、政治工作せよとの要請を受けたが、基地の現状況から行うには限界がある。情報局に要請するようにしてゐるが、返信が無い。

▽ ホープヴィル

担当官：レンジヤー・ジャクソン

デスバレーに位置する偽装弾道ミサイル都市としてホープヴィル等、米政府が建設した戦略都市の一つ。モデルとなつたのはソ連の封鎖都市などであつたが、記録によると2075年にマスコミのリーグによつて露呈。反戦団体が多数押し寄せたと記録にある。

I-15号線を主要とする補給路の他に、軍事的優位に立てる旧軍の軍需物資やテクノロジーがあるとの事からレンジヤー並びに歩兵一個大隊規模の兵力を派遣。デスバレー各地に前哨基地を設けた。既にNCRやレギオンから逃れた移民が独自のコミュニティーを形

成。エンクレイヴ軍の放棄された物資や施設を使用していたため、接触当初は対立姿勢を露にしていたが、デスバレー近隣の運輸業者D09h976#%&6、「+\*\*\*+」<sup>デタ破損</sup>の仲介によつて和解した。

ただ、レギオンの秘密工作部隊との戦闘が各地で発生。シユード佐に要請し、自動車師団から派遣された二個中隊を投入した。独自コミュニティーは中立を守つていたものの、独立を守ることを条件に軍を支援。レギオンのスペイの摘発や元レギオン兵の協力も得られ、掃討作戦は順次完了する予定となつていた。

しかし、デスバレー周辺の弾道ミサイル基地に保管された核弾頭が地中貯蔵庫にて爆発。デスバレー都市部は壊滅的な被害を受け、コミニティを含め、甚大な被害を受けた。モハビ前哨基地の大部分の兵力を抽出していたため、前哨基地は一時機能不全に陥る。現在まで、デスバレー近辺は地下の爆発により大きな割れ目を形成し、「ダイバイド」と呼ばれ、避けられるようになる。大気中には粉塵化した放射能の影響から吸い込めば内部被爆を引き起こしかねず、デスバレーに展開する部隊に撤退命令を発した。しかし、核爆発による電磁障害が引き起こされ、現在にいたるまでデスバレー派遣大隊への連絡は途絶している。

レンジャーや陸軍から人員を抽出した救出部隊を派遣するよう司令部に打電したものの、放射線による被害やエンクレイヴ軍が保有していたと思われるデスクローが爆発の影響で逃げ出していった可能性も吟味し、グール化した隊員から編成する案も頓挫した。基地周辺の傭兵に依頼を出したものの、依頼者は音信不通となり、1か月で募集を中止。N C R陸軍はダイバイドでの軍事的進出はないと明言するに至る。

↙・イーグルクロウ警備保障展開分析

(情報局脅威査定報告より抜粋)

元N C Rレンジャーによつて設立された民間軍事派遣会社。兵力は3個大隊程有しており、エンクレイヴ軍製のパワーアーマーや航空兵器を所有する。構成社員は正規軍兵士よりも高度な訓練を受けており、確認できる兵員には元N C R兵士や元レンジャー。脱退したジヤツカルギヤングの構成員などが見られる。

情報局潜入捜査官の報告では、企業秘密とする訓練方法は米軍が大戦争前に導入した仮想現実シミュレーターを使用した実戦的トレーニングを積んでおり、危険な任務を行う隊員には任意に高度な戦闘インプレントを導入している。元B O S科学者の分析では、B O Sの戦闘インプレント以上に高度な技術を保有していることが伺える。

これらのことからエンクレイヴ軍残党の要員が居る可能性があつたため、幾度となく調査をしたが、数名の技術士官と壮年のパイロットが教官を務めていたことが発覚する。2279年の裁判では当該当事者の犯罪行為は認められないとして、無罪としつつも保護観察が言い渡されている。その後、民間軍事会社としては大規模な兵力を保有していることから、N C R幕僚内部から軍への吸収をするべく行動していた。

当幕僚のうち、統合参謀本部の戦略課長及び、政府政務次官、内務省職員など、他の民間軍事派遣会社との賄賂が発覚し逮捕される。この裏にはイーグルクロウによるリークがあつたとされるが、司法省及び共和国高等検査局はそれを否定している。

2279年5月における展開兵力として、ハブにイーグルクロウ本部が設置。兵力は一個大隊。装甲車輛数約20両、パワーアーマー保有30台を含む。その他、レシプロ戦闘機及び偵察機を保有する。

ニューベガス方面には、サーチライト空港に部隊を展開しており、車両20両とパワーアーマー兵一個小隊、及び機械化歩兵一個大隊を展開。更にベルチバードを対地攻撃機及び人員輸送、緊急輸送の用途で5機保有する。

コロラド方面軍に提供されている兵員はおよそ1個大隊あり、ヘリ10機と装甲車複数を有する。その他、特殊作戦に従事する特殊部隊を確認しているが、身元は不明。元NCRレンジャーと思われるが、チーフ・ハンロンへ照会するも、大規模な特殊作戦に投入する元レンジャー構成員はいないとしている。

以下の報告から推察するに、イーグルクロウ警備保障は元NCRの軍人以外にも高度な訓練を受けた兵員を投入しており、彼らの正体は依然謎のままである。エンクレイヴ軍残党の立ち上げた組織として情報局はマークしているものの、全くボロを出していない。今後、更なる調査を要するため、戦況の悪化しやすいニューベガスに諜報員の派遣を要請する。

(N C R陸軍歩兵情報センター、新兵募集パンフレットより抜粋)

共和国の若者よ！いざ、国のために戦おう！

我が軍はこれまで以上に強化され、野蛮な部族や目的を失ったカルト教団に立ち向かい勝利を収めよう！

最新銃R 91アーバンアサルトライフルは800M先のレギオンの頭を撃ちぬける！命中度は抜群！旧米軍正式採用モデル。君が精銳になれば上位種の改良型で性能を知れる！君も頼れるレンジヤーに！

（復刻版ミルサーパレビュー ハブフォトカンパニー 2279年1月創刊）

「新たな小銃運用システム！ついに公開！」

N C R陸軍兵器システム研究所とイーグルクロウ警備保障兵器開発社は新たにA Rライフルサービスの後続としてR 91アーバンアサルトライフルを発表したのは記憶に新しい。そして、イーグルクロウは新たな小銃システムとして、“O p t i o n R a i l S y s t e m”を発表した。これはハンドガードに金属製のマウントレールを装備することにより、フラッシュユーライトや補助ハンドル、照準補助のレーザー・ポインターなどが装備可能となる。こうした試みは第二次大戦前にも考案され、マフィアの闘争にはトンプソン短機関銃に補助ハンドルを装備し、腰だめで公安局員を襲つた。

研究所はN C R 兵が正確な射撃をするために、これらの小銃システムを考案。2 2 8 1 年までに全軍に配備を行う予定であり、既にニューベガス方面軍には限定配備しており、第一線で活躍している。また精度の悪い言う事聞かないライフルにも、精度向上改装キットやR 9 1 と同じくオプションレールシステムに換装するキットが一般向けにも販売予定となる。また、N C R 政府は中小企業向けの説明会においてオプションパーツ製造を依頼している。今後、N C R 軍は更なる発展を遂げるはずだ。

(「銃と弾丸」第三章 突撃銃とは 67 頁)

### 「R 9 1 アーバンアサルトライフル」

ステント・セキュリティ・ソリューションズ社が開発した新世代の歩兵携帯小銃である。重量は4 kg弱と重いものの、有効射程800 m（補助照準器具あり）を叩きだす命中精度の良さと整備の簡単さから信用されている。化石燃料が枯渇した現在において、プラスチックなどの加工製品が入手しづらい事から、嘗ての設計思想に帰った3S 社はセメントやG 3と言つた突撃銃の過渡期に製造されたものに注目。銃床やハンドガードを木製にし、ゆとりのある設計から、2 0 0 年使えると豪語されるに至る。唯一の欠点である木製故に熱が籠りやすく、銃身から熱が映り、割れる現象があることから、米陸軍兵站局ではハンドガードの予備を部隊に支給するようにしている。

アンカレッジ戦線では加熱する銃床や凍ったハンドガードや銃床が凍り付き、破損するケースが続出。その為、一線を敷いていた水冷式機関銃に目を付けた。パワーアーマー部隊には専用のミニガンが供給されるが、戦況悪化や物資の欠乏によって、5mm弾が入手できない場合、米歩兵標準型の5・56mmを発射し、継続発射が可能な単銃身即冷却可能なアサルトライフルとして水冷式アサルトライフルを導入した。現地では「重いが、信用できるライフル」と称されるが、7kgと支援火器と同レベルであるため、カービンモデルに切り替めるタイプが増加した経緯がある。

現在、水冷式アサルトライフルというWW1を思い起こさせる銃は現在のところ、パワーアーマー配備数の一番多いマサチューセッツ州は試作パワーアーマー一号が誕生したMITのお膝元であり、生産拠点の集中する場所でもある。そのため、R91はマサチューセッツ州には配備されず、そこを除く東海岸全域に配備された。

S3社は今後、近代化改修キットと証してコンポネーションライフルの制作に乗り出すとしているが、レーザーライフルが主流になりつつある今、挽回のチャンスを狙っていることだろう。

## 「AR-15」

この銃は歴史に名が残る名銃の一つであり、我らの父。または祖父が使用していた傑作ライフルである。ユージン・ストーナーが設計を手掛け、約一世紀に至るまでMシリーズのライフルとして君臨し続けていた。米政府納入後はM-16として採用され、半世紀以上に渡つ

て使用され、カービンモデルのM4と言った米軍の代名詞とも言える傑作ライフルが出来上がった。

弾薬は小口径高速ライフル弾5.56mmを使用し、ベトナムにおける勝利もこの銃で確立された。現在ではRシリーズに引き継がれており、その贅沢な化石燃料を使用した本銃はD.C.の技術博物館などに収蔵されている。重量は3.5kg程、ガス圧作動方式を採用し、ロータリーボルトを採用。

俗説として、本銃は玩具メーカー「レッドレーサー」社と言つた玩具メーカーがAR-15などのライフルを製造していたという話であるが、本書の度重なる調査の結果、国務省の証言では事実であるとの確認が取れた。海兵隊映画で見られる「マテル社のM16」とつた表現が事実であり、戦況がひつ迫していた時期には玩具メーカーの工場を一時的に租借して兵器製造を委託していたと国務省及び国防総省の広報担当官が証言している。

現在では、プラスチック製品の高騰によつてオリジナルプラスチックライフルの製造は殆ど行われておらず、既にオークションでは高値で取引されているなど、入手には多額の資金が執拗となつてゐる。アーマーライト社は2050年にウッドストックモデルを発表。西海岸周辺の州兵や警察に納入されているが、Rシリーズにこれらの元祖Mシリーズライフルを導入することについては意見が割れていますと、某国防総省筋が明らかにしている。

(陸軍歩兵情報センター、新兵募集要項より抜粋)

革製アーマー？それは某映画の真似かい？我々が使うのは新型迷彩を使用する画期的なアーマーだ。個人に合わせた自由なポーチの配置が可能な新装備システムを搭載。各部位を守るために防弾プレートを仕込んだそれは兵士の命を最大限守ることが出来るだろう。緊急時の負傷にも対応し、手榴弾のピンを抜くように留め具を抜けば、アーマー部分が緊急展開する仕組みとなっている。これで君が負傷しても衛生兵が助けてくれるだろう！

そして、このヘルメット。嘗てはぼろいスチール製M1ヘルメットかもしない。だが、今は違う！ケプラー纖維の特殊防弾ヘルメットによつて君の頭は守られる。更に戦前に使用されたヘルメットのように暗視装置やライトが装着されている。これで君の目は暗闇を見通すことが出来るだろう！

新型迷彩は嘗てのような茶色い色ではない！これは様々な地形に適応した新型迷彩である！これで目の悪い野蛮な部族民の目をごまかすことが出来るだろう！

✓AR-15から更新、R91アーバンアサルトライフルの評価報告

(レンジャー・テレサの新型ライフルの評価から抜粋 2276年トライアルテスト報告)

ユージン・ストーナーが製作したA.R.—15をコピーした総称「サービスライフル」あの時の強化プラスチックなど化石燃料を使用した贅沢な製造は出来ないため、N.C.R.兵器開発局は銃床とハンドガードを木製に交換。加えてチャージングハンドルを廃止して、中華製アサルトライフルやロシア系小銃に見られる。排莢口を引くような構造となつた。

この劣化コピーを見ればストーナーが泣くに違いない。お粗末な工作機械とレイダーと同レベルの作業員のお陰でライフルはただの重りに成り下がつた。N.C.R.軍採用当初は未だに手製のハンティングライフルや戦前のライフルを使用した兵士も多かつたが、統一された装備とライフルは兵站の面において最も必要なことだ。但し、出来損ないのライフルが支給されるのであれば話は別だ。弾は真つすぐに戻らないわ。弾は詰まる。おまけに暴発もある。一体どうやつたらこれを納入しようと思つたんだ?

幾つかの企業が改修キットを売り出しているが、それは高価すぎるため一般兵では入手はおろか購入すらままならないだろう。もしこれがフルオートであれば何とかなつただろう。だが、これは司令部の要望どおり、弾薬を押さえるためにセミオートに限定されている!くそつたれめ!

そのため、レンジャーではチーフ・ハンロンの命令により、サービライフルの即時使用停止が伝達された。その代り支給されたのが、古典的なカウボーイリピーターと言う、大戦争前でも骨董品だったライフルだ。目の前にアーロン・キンバルが居たら（あまりにも汚いため憲兵が削除）

R 9 1 アーバンアサルトライフルの性能は先の糞ライフルと比べれば非常に良い仕上がりとなつてゐる。是さえあればレギオンの兵士をなぎ倒すことが出来るだらう。やや、操作性に難があるものの、精度も申し分なくグルーミングも良い。新兵でさえ、レギオンの頭を撃ちぬけるはずだ。唯一の欠点は熱が籠りやすく、熱膨張によつてハンドガードや銃床にゆがみが生じ、戦闘中に割れる場合がある。ウエストランドは熱くて40度、寒くて-4度。そうした気温の差が激しいと壊れやすくなるのだ。既にこれを製造したとある企業ガンス&イーグル<sup>227</sup>1年にイーグルクロウに買収社は未だ試作品であり、A R - 1 5 の製造ラインではなく、高性能ライフルを取り扱うガンランナーと契約を結ぼうとしている。ガンランナーは少数精銳の高品質工房。兵に大量生産するのではなく、特殊作戦用に納入するようだ。これが全軍に行き渡ることが出来れば、N C R の勝利は確実となる。

## 十五話 Battle of bullhead city

NCR陸軍ニューベガス方面軍の兵站はザ・ハブから延びるインターステート15号線によつて支えられていた。大戦争後、アスファルトは破壊され、車両の通行もままならない程にボロボロとなつた。しかし、シーザーレギオンと戦うための軍需物資輸送やニューベガスへの輸出も相まつて、幹線道路は戦前と同レベルにまで復旧した。未だ復旧していない道路があるものの、ハブから東へ行くインターステート40号線の先にあるブルヘッズシティーも同様に、レギオンの侵攻を阻止するために主要道路として整備された。

特にブルヘッズシティーはコロラド川を越えたNCR領土の中でもレギオンの攻撃を受けやすい地域の一つとして有名だ。NCRはその場所の部族を強引に併合して以降、コロラド以東に進出する足がかりとした。しかし、同時に成長を続けるシーザーレギオンとの接触により、ブルヘッズシティーはコロラドに侵攻するNCR陸軍一大拠点とされた。

だが、ニューベガスの戦略的価値とNCRのエネルギー問題を解決するフーヴィアーダムはブルヘッズシティーの戦略的価値を下げるには十分。加えて、ニューベガス方面軍には現職のアーロン・キンバル大統領と懇意の間柄であつたりー・オリバー将軍があり、結果としてブルヘッズシティーは軽視されることになつた。

だが、NCRとてレギオンにNCR領内への橋頭堡を築かせようとは考えていなかつた。それはNCRに侵食している“彼ら”とて同じ考えだつた。

「くそー！くそー！くそー！…なんでNCRがあんなもの持つていやがる！」

ブルヘッズティーから南にあるモハビ・バレーはシーザーレギオンの軍事拠点の一つであり、アリゾナ川以西にはデッドマウンテンと呼ばれる山岳地帯、NCRはそこに部隊を展開しにくく、渡河しようとリージョンの狙撃や銃撃によつて餌食になる。既に破壊工作を行おうとしていたNCRレンジャーを狙撃して葬り、幾人の放浪者プロブリゲーを磔にした軍団兵たる彼らは戦士として矜持を保つてきた。

だが、狙撃用に掘られた塹壕に隠れているレギオンの兵士にそれはない。彼の眼には恐怖の色と戸惑いが隠せない。何度も悪態を付き、河の向こうにあるNCR狙撃手の攻撃を避けるため塹壕内の通路を駆け抜ける。

「なんで奴ら的確に狙つてきやがる…ここまで偽装してゐるのに…判るわけがない！」

モハビ・バレーの軍団兵の殆どはローマ軍の鎧を模したアーマーを付けてはいなかつた。彼らは併合された部族の中でも、狙撃を主とする狩猟民族であつた。肉弾戦を得意とする軍団兵とは一線を画す彼らは異端であるものの、その狙撃能力はシーザーが重用するほどであつた。狙撃ほど一般歩兵を恐怖に陥れるものではなく、銃声によつて確実に仲間の誰かが死ぬ。どこに誰がいるかおおよそ分かる近中距離の銃撃戦と違つて、狙撃は軍の進軍を止める効果があつた。また、指揮官らしき人物を狙撃すれば、部隊は統率を失い瓦解する。

彼らはそれこそレギオンの中でも異端として蔑まれていたが、父から子へと受け継がれた30—06マグナム弾を発射するハンティングライフルを戦士の証としている彼ら。それは騎士や武士にも似た物だ。だからこそ、シーザーの次に指揮権を握つているリガタス・ラニウスにも一目を置かれていた。他の部族出身の兵から蔑まれても戦士としての矜持は失つていない。敵兵と獲物を狩るためには手段を選ばない。例え、レギオンの鎧を着ず、草や木に模した衣服を身にまとい「野蛮」と呼ばれようとも、彼らからすれば、肉弾戦を好む部族出身兵の方こそが野蛮にすら思える。だが、悪態を付き、喚く兵士はその矜持を捨て去つたように、まるで「ギリースース」のような出で立ちで塹壕通路を走る。

「おい！持ち場はどうした！」

陣地の連絡通路を中腰で進む兵士に指揮官らしき男は叫ぶ。指揮官の男はベキシラリウスの階級を持つ、言わば専任曹長に相当し、士官と兵卒の繋げ役をする役職に酷似する。配置から外れた兵を捕まえると、持っていた10mmピストルを彼に突き付けた。

「お前逃げるつもりか！スポットターの相棒はどうした！」

「奴は死にました！プロフリゲートの鉄の鳥に焼かれました！」

「て、鉄の鳥だと？」

ベキシラリウスの男はオウム返しでその言葉を口にする。本来ならば、馬鹿馬鹿しいと鉄拳制裁をするべき所だが、鉄の鳥という言葉から幼い頃の記憶が蘇る。

戦士として訓練を受けていない。部族がシーザーに忠誠を誓う前の子供の頃にあつた事件を思い出した。

夕暮れ時のこと。夕焼けの水平線に見える豆のような粒が幾つも飛んでいた。やがてそれは大きくなり、それが自分の村々に近づくとその姿が露になつた。両翼に高速で羽が回転し、鉄の胴体が空中を舞う。風を切る轟音が周囲に響き、村が大騒ぎになつた。それは一匹だけではない。数えるのも嫌になるほどの群れをなすそれは大小様々な形で大空を舞う。

だが、男が子供であつたころには分らなかつたが、今ならわかる。シーザーが戦士に与えた知識を思い出す。嘗てこの大陸を支配していた忌まわしき旧世界の武器。「ヘリコプター」と呼ばれたそれは兵

員を輸送し、地上の敵を薙ぎ払う兵器を使用する。それらは大戦争で失われた代物。大戦争後もそれらを保有していたものの、滅んだ彼ら。その時見たヘリコプターには「E」という単語を星々で囲んだ印をつけて飛んでいた。

「いや、そんなはずはない！センチユリオンからはブルヘッドシリーティーにないと聞いていた。フルメンタリーがそんな些細なミスをする筈は……。」

ベキシラリウスの男は考えるが、その結論は至らなかつた。男の思考は音速で駆け抜ける弾丸によつて飛散し、男であつた肉は部下の男に倒れこむ。

「うわあ！畜生！」

指揮官の頭が弾けて自分の顔に掛かるのは、戦士として鍛え上げられたとしても恐怖や不快さを取り除くことは出来ない。指揮官のものであつた血や肉片を拭うことも出来ず、彼は後方陣地へと走ろうとしたその時だつた。

今は亡きベキシラリウスの男が幼少期に聞いた風を切る轟音。デッドマウンテンの頂きから現れたのは先ほどの男の相棒を焼死体にした鉄の鳥「ベルチバード」だつた。

「撃てえ！あの化け物を撃ち落とせ！」

周囲の陣地にいたレギオン兵は残り少ないが、未だに闘志を燃やす戦士も存在する。彼らはライフルでベルチバードを撃ち落とそうとするが、強固な装甲は彼らの弾丸を弾き飛ばした。あまり精神的に良くないう跳弾音がベルチバード機内に響き渡る。レギオンの空しい抵抗はパイロットを同情させたが、手加減するつもりはなかった。

「目標補足！奴らの対空兵装はない。ロケットは貴重だから機関砲で始末しよう」

「了解、掃射する」

銃撃のお返しとばかりに機首下部についた20mm機関砲のガンバレルは回転すると、轟音と共にレギオンの数倍の火力で叩きのめされる。ライフル弾より大きい砲弾は人体をバラバラにしていく。裸眼による目視であれば、狙撃に特化したレギオン兵を始末するのは難しい。だが、ベルチバードにはサーマルと赤外線複合センサーが内蔵され、巧妙に偽装された狙撃兵をミンチにすることは容易かつた。そして、デッドマウンテンと呼ばれた頂にもNCRの狙撃兵が複数潜んでいた。

彼らは新たに支給された狙撃銃によつてギリースーツを着こむリージョンの狙撃兵を難なく撃ち倒す。辛酸をなめさせられてきたNCR兵は歓喜に震え、観測手と共に喜びを分かち合つていた。

「こちら、D e l t a 1—2。航空支援に感謝する。渡河による攻撃が出来そうだ。助かつたぞ、イーグルクロウのパイロットさんよ。v e r」

(こちらR i n o 1—1、どういたしまして。そつちも良い仕事してたぞ。o u t)

「よく言うぜ、まつたく」

キルスコアはイーグルクロウ警備保障のベルチバードが圧倒的に勝っている。パイロットの御世辞ともとれるその言葉に悪態を付く通信手兼観測手の兵士は遮蔽物に隠れると、赤いベレー帽を被り、N C R の食品工場で生産されたポークビーンズの食べかけを食べる。

彼らはN C R 陸軍の中でも凄腕の狙撃手。前はニューベガス方面軍で第一偵察隊に所属していたが、転属してニューベガスよりも劣勢であったブルヘッドシティーを防衛するコロラド方面軍に入った。彼らは前の隊と同じく狙撃手を務めるが、第一偵察隊のベレー帽は手放せなかつた。赤いベレーがトレードマークのそれは周囲に精銳の狙撃手として知らしめることが出来るものだ。二人は狙撃手を募つて敵陣地の対岸に位置するデッドマウンテンに狙撃ポイントを設け、防衛線を敷いた。

デツドマウンテン防衛ラインは多くの狙撃兵によつて支えられ、なし崩し的に第二の偵察隊が誕生した。伝統的な第一偵察隊のそれとは歴史が無いに等しいが、実戦によつて磨かれた狙撃兵が集う精銳集団となつた。

第二偵察隊も設立される日も遠くない。設立された時に彼らはそのベレー帽を脱ぐのだろう。それまでは、第一偵察隊でなくとも、赤いベレー帽は被り続けるつもりだつた。

「イーグルクロウの奴らが来てからここはすっかり変わつたな」

狙撃手の男は対岸の掃討されたレギオンの陣地をスコープで覗く。向こう岸には何の反応もなく、赤外線スコープに何も映つてはいかつた。一人で食べる相棒に食べる時間を与えないためなのか、話しかける彼にポークビーンズを食う観測手は答えた。

「シェイディー・サンズで政治家ごっこやつてる奴らより、傭兵上がりの軍需産業はやっぱり理解があるよ。上の奴らはマジ『オリバー』だ」

軍のスラングで罵倒する相棒をよそに、狙撃手は耳に引っ掛けた煙草を咥える。無論、火を付ければたちまち敵の狙撃手に自分たちの位置を教えることになり、自殺行為に他ならない。だが、狙撃手に

とつて精神を落ち着かせるために何かを呴えなければやつていけないのだ。ニコチンを摂取したい狙撃手は相棒の台詞に重ねるようになんと、オリバーだな」と呟いた。

既にブルヘッドシティーに配備されたNCRはニューベガス方面軍司令、リー・オリバー将軍が大統領と懇意の間柄であると知つていた。敵を多く抱えるNCRは戦線を維持するのに多くの兵員が必要であつたが、エネルギー問題を解決するニューベガス方面軍とレギオンを倒すためのコロラド方面軍。大統領が選んだのは、懇意にする指揮官の方だった。政治的な判断、戦略的判断であろうが前线の兵士たちにとつてみれば、個人的な友情によつて兵力や物資を減らすことがどんなにつらいか、今からでもニューベガスに戻つてオリバー将軍の尻にライフルを突つ込んでやりたい将兵はどれだけいることか。

そして、ニューベガス方面軍やコロラド方面軍のNCR兵のスラングとして「オリバー＝クソ」というものが出来上がった。

「それにイーグルクロウの連中は良い物を製造してゐるよな」

狙撃手は構えているライフルを撫でる。それは戦争前に作られたライフルでもなければ、ガンランナーなどの武器職人が手掛けたもの、NCR工廠が作ったものではない。「Eagle Claw Firearms Inc. MSR」と刻印されていた。長年NCR軍の訓練に耐えてきた狙撃手がそれを見た時、「これつて俺らの

一生分の給料でやっと買える代物じやね?」と言われている。

第一偵察隊の時には木製ストックが当たり前であつたし、スコープが壊れても支給されるまでに一ヶ月は掛かつた。しかし、目の前にあるのは1200mを余裕で狙える狙撃銃と巧妙に隠れたレギオン兵を熱感知によつて狙撃可能なサーマルスコープが搭載されている。これを使つた狙撃兵曰く・・・

『これ反則・・・・・(笑)』

『可愛いよ、可愛いよシャー○ーン♡』

『ビューティフォー・・・・・』

などなど、好評であつた。しかし、それらは少数精銳やベテランレンジャーによつて使用されている。彼らはその精銳としてそのライフルを支給されたが、出来れば持ち逃げしたいほど素晴らしいライフルだつた。

「それだけにヤバい噂が絶えないけどな」

2270年にNCRはブルヘッドシティー周辺を占領した。そこには多くの部族がいたが、ハブの商社所属のキャラバンが襲撃されことやNCR市民への攻撃が頻繁に起き、ハブの資本家の圧力によつ

てNCR東部軍は派兵、制圧した。旧アリゾナ州への橋頭堡を得、進出の足掛かりとしたが、2272年以降になつて東部軍進行は止まつた。

NCRと敵対する部族の半数以上がシーザーレギオンに加入し、コロラド川以東は危険地帯となつた。それはブルヘッドシティーも例外ではなく、実効支配をしているものの、度重なるレギオンの攻撃によって弱体化。コロラド方面軍はベガス方面軍以上に切迫した戦場であつた。更に不幸なのが、ベガス方面軍司令が大統領と懇意の間柄であるため、なげなしの戦力の比重は向こうが重く、コロラドをそのまま道なりに行けば敵の首都まで行けるはずであつたが、ブルヘッドシティーを拠点とするNCRはこの地に釘付けになつていた。

コロラド方面軍崩壊とも目されていたが、急に事態が変わり始めた。

リー・オリバー将軍やアーロン・キンバル、ニューベガス地区NCR大使館のデニス・クロツカーなどの外交路線を進む派閥とNCR陸軍参謀本部や軍部といったタ力派派閥、財界関係者派閥など、NCRでは戦前のアメリカのように、派閥争いが繰り広げられていた。三つの派閥争いは新たに財界にイーグルクロウ警備保障が加わったことにより、軍部と財界が結託。既に現職のアーロン・キンバル大統領の支持率が低下していた。

財界と軍部は戦争の早期終結と敵対勢力の殲滅を選び、戦略ミスからキンバルの派閥は影響力が低下。イーグルクロウの航空部隊を送ることによつて、崩壊し始めていたコロラド方面は持ち直していた。

その航空部隊はNCR正規軍よりも高性能な兵器を所有し、X-01型パワーアーマーを運用する。しかし、敵国として認知していた工

コロラド方面軍

ンクレイヴの兵器を使用することで嫌な噂が絶えなかつた。既にイーグルクロウ警備保障を正規軍に編入しようとしていたために、汚職を告発された高級将校の事件など、強力な後ろ盾がいることが明白であつた。

「もしかしたら、エンクレイヴじゃないか？」

「…………まあ、構成員に居そだよな…………でも仕方ないんじやないか？BOSよかマシだろ」

「レギオンやジャッカル、80sレイダーよかマシか……」

NCRでは、元エンクレイヴ軍兵士や構成員には即拘束の命令が共和国政府から大統領令によつて制定されている。しかし、殆どが保護観察処分となり、民間人への虐殺を行つた将兵のみ極刑に処されるだけで技術を持つエンジニアや科学者、思想的に問題のない人物へはそこまでの処分は下されない。戦前のテクノロジーを復興させようとするNCRの政策は一般民衆の心も変え、若干の恐怖心は残るが、エンクレイヴに属していた者達への風当たりは昔より少ない。

軍事に多大な貢献をするイーグルクロウ警備保障のエンクレイヴ製兵器。ベルチバードの航空兵器やX-01パワーマー部隊、強力な光学兵器は、エンクレイヴの強力な軍事力による恐怖の矛から、NCRを守る強力な盾となつた。

旧エンクレイヴ出身の市民への風当たりはまだ悪いかも知れないが、人の行き来がないこの時代。住み分けられた人々の暮らしはそこまで悪くない。寧ろ、お互いが程よい距離感を保っていたこともあってか、憎悪を必要以上に集めることはなかつた。

それだからか、過去にF E Vによつて変化した人類を抹殺しようとしたエンクレイヴに属していた民間人であつても、価値観や文化の近い彼らを恐怖の対象としていたとしても、憎悪の対象として弾圧し、迫害することはなかつたのだ。

「……そういうえば、サンフランシスコはエンクレイヴ出身の民間人やら技術者の町があるらしいな」

「美人が多いって話だぞ」

「国に帰りてえ……」

「ニューリノに帰りたい……」

2人は喧噪の溢れる道徳観の薄いあの町がお気に入りだつた。幼少の頃から堅気ではない人々に囲まれて育つた彼らだつたが、それでも彼らの生まれ故郷であり、他では味わえない安心感があつた。

ポークビーンズを食べ終えた狙撃兵の一人は思い出したように声を出す。それは何かを思い出したようで、空になつたブリキ缶を地面へ置く。

「そうだ、ニューリノのビショップファミリーだが、面白い噂を聞いたぞ」

「ん？ どうした」

「ビショップファミリーの親族がニューベガスに来てるんだとよ」

### ビショップファミリー

ニューリノの住人であれば知らぬ者はいない。町で最大の勢力を誇るマフィア。ニューリノ周辺のシマは全てビショップファミリーの手のうちにあり、軍隊並みの練度と忠誠心を誇る。物資や資金も潤沢であり、善悪で言えば悪に違いない。だが、世間体で言えば必要悪。町を巨悪に包み込むようなものでもなく、かと言つて完全なる善とは言えない。

大規模な集落になると、カルマが悪に染まつている者が存在する。更には、中間の者も。それらの者達が問題を起こさないようにするのがビショップファミリーの仕事であり、ニューリノのNCR政府高官

でさえ、共生関係を示唆するような発言すら行っている。嘗てのアルカポネのような様々な企業に金を出し、汚職を広めるタイプではない。堅気との明確な線引きを行う仁義を信じるマフィアであった。

「それって……奴らニユーベガスのファミリーに戦争を？」

「いや、噂によると一人らしい。家族内の抗争が嫌で来たとか……」

「一枚岩じやないんだな」

「どこの勢力も権力を持てば互いに争い合うのさ。血が繋がつていてもな」

対岸を見つめる狙撃手はサーマルスコープの電源を切り、クリアな視界で対岸の様子を確認する。既にレギオンの狙撃陣地は黒煙に紛れて肉の焦げる匂いが周囲を満たす。レギオンの軍団旗は炎に包まれ、暗くなりつつある周囲を照らし始める。

(こちらCP、Delta1—2応答せよover)

「（）ちらD e l t a 1—2どうぞ！」

（Grid November 456 Sierraより、敵集団をレンジャー偵察分遣隊が捉えた……確認できるか？）

「ちよつと待てよ……どれどれ？」

布の切れ端を合わせた迷彩シートを上から被ると、戦闘指揮所CPから指示された座標へ観測器を向ける。

彼が見た先には白い植物性塗料を全身に塗った部族民らしき兵士が30人近く川岸に接近しつつあつた。

「（）ちらD e l t a 1—2、Grid内に敵歩兵30人の集団あり。川岸に接近中。敵の装備からして、部族民の戦闘員のようだ。こちらの兵装では対処しきれない。航空支援を要請するover」

（）ちらCP、それは無理だ。現在、近接航空支援は他地域にて要請が多数でている。補給も鑑みてそちらに行けるのは30分、だが砲兵隊の砲撃支援が可能。目標座標を伝えよout）

「川を横切るように見るか……座標コードGrid N450 S3  
25」

〔了解……〕ちらDelta1—2より、I A B。砲撃支援を  
要請！ Grid N450 S325。目標敵歩兵集団、榴弾にて攻  
撃求む over」

（ちらIAB、要請了解、待機せよout）

射手の男はライフルの横にあつた地図を確認し、目標座標を言い、  
観測員の男がその座標コードを後方の砲兵基地に命令する。既に後  
方のアイビス臨時砲兵基地には射程20kmの大口径榴弾砲が多く  
配備されていた。

そして、一分もしないうちに砲弾が空気を切り裂く高音と共に、対  
岸へ行こうとする部族民に直撃する。砲撃と言う攻撃を知らなければ、地面が割れて爆発するかのような天変地異に見えたことだろう。  
土と水が4m以上飛翔し、目標地点は抉れる。土煙が消えた時には死  
屍累々の惨状が広がっていた。

〔ちらDelta1—2、敵集団壊滅。砲撃支援感謝するout〕

銃火と怒号。硝煙と血潮の風が常に吹き荒れるブルヘッドシ

テイーの日常だつた。

十六話 n i g h t m a r e

常闇の深淵を覗いたような真っ黒な暗闇。

そこに居るのは何発もの銃創と裂傷、火傷を負ったN C R 兵士。レンジャーの使う量産型のパトロールアーマーだが、幾つもの攻撃によつてボロボロになり、血がべつとりと染みついていた。

「テレサ……何で俺と一緒に連れて行かなかつた……」

「俺を一人にしないでくれ」

男は項垂れ、天に問いかける。だが、その問い合わせはない。暗闇が晴れていき、其処は黒煙の昇る市街地の姿となる。

弾痕と血潮、悲鳴に罵声、爆音と肉の爆ぜる音、腐臭と排泄物の噎せ返るような異臭。

死に絶えたN C R 兵やハチの巣にされたレギオン兵がまるでゴミのように捨てられ、誰にも埋められずに放置される。

「待つてくれ、行かないでくれ！」

男は叫ぶが、生きている者はだれ一人としていないのか、反応がない。彼の手は血が滴り、力尽きたのか、男は膝を着く。天を仰ぎ見るように絶叫する。

血が沼のように広がつても男は叫びつづける。血はやがてフーバーダムに劣らぬ程水のように溜まつていき、男の頭をすっぽりと覆う。だが、男は声が枯れ、気管が塞がろうとも叫ぶ。まるで、戦場の

哀しみが彼に集まるかのように。

血はやがて世界の全てを覆いつくす。それは氣化して赤い雲を作り出し、血の池が氣化して消えてしまう。

男の立つ場所はその戦場になかった建造物がそびえ立つ。丘の上には豪華なビルが白のようになびき立つ。そして、その城下には血塗られたスペインの建築様式の街並みが広がっている。

男の立っていた場所は噴水が出来ており、噴水には青白い女が立ち尽くしていた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「…………さん！起きてつてば！」

「……あ？ 何だよ、敵襲か？」

運び屋が目を覚ますと、絶世の美女ではなく、米軍標準迷彩を施したアサルトロンのレーザースコープ併設型カメラがじつと彼を見つめていた。

「…………ウリエル…………」

「え、そんな風に名前を呼ばれると……」

「美女じゃないのが残念」

「んだとコラ」

ロボット、はたまた女性とは思えないような声を出すが、運び屋は笑いながら、ウリエルの肩を掴んで寝袋から這い出る。動かさなかつた肩や腰の筋を伸ばすように動かして、筋肉を解していく。身体からでる変な音と痛みを快感と認識する運び屋にウリエルは不貞腐れかのようにコーヒーの代用品であるコヨーテ嗜みタバココーヒーを淹れたマグカップを突き付ける。

「目覚ましのコーヒーです。デリカシーが無いですね

「あとはトースターと熱いシャワーが欲しいかな」

「アメリカンドリーム、いえ旧世界の夢のみすぎですね」

呆れる彼女は運び屋が「苦い」と口にすると、してやつたりと表情を変えるように両肩を上下して再び呆れるようにして、コヨーテステーキらしきものを綺麗にした皿に盛つて運び屋に差し出した。

「残念ながら、昨日狩ったコヨーテのステーキです。昨日と同じですけど、NCRの支給された安物ワインで酸味をつけました」

「朝から肉とは……中々腹に答えそうだな」

「あとは200年前の新聞要ります?」

「要らない……寝ている間に何かあつたか?」

「いえ、ああ!夜の12時過ぎにNCR陸軍と傭兵部隊の車輛が通過しましたね」

ウリエルは新たに淹れたコーヒーポットを空になつた運び屋のマ

グカップに淹れようとしたが、運び屋はそれを制す。

「どこの所属か分かるか?」

「いえ、生体センサーと音感センサーを併用したレーダーを駆使してましたが、I—I5号線をそのまま北上していきましたよ。」

運び屋はウリエルの無自覚さに呆れ果てるが、運び屋の頭の中にあら情報は古いか、損傷して使い物になつてているか考える。

「うん、NCRが重い腰を上げて自動車師団を投入したか?」

#### 自動車師団

第二次大戦中には機械化師団など、装甲車や輸送トラックなど機動力を優先した師団規模の部隊を指すが、自動車師団もそれに該当する。第二次大戦後には多くの歩兵を伴う部隊は機械化され、機械化師団と言つた括りは殆ど消え去つた。車輛による移動は必要不可欠であつたためだ。大戦争後には、稼働する自動車はほとんど破壊され、生産拠点の殆どが灰に帰した。だが、NCRでは、生存するグール化した技術者や科学者、保管された稼働する工作機械によつて少数ではあるが、生産拠点が確保された。

軍隊の強さは展開する機動力にあり、車両による移動力は軍隊にお

いて必要なものだ。生産された車両はNCR建国後に軍に回され、それを専門とする自動車師団を創設。パワー・アーマーを主軸とする機甲師団と並んで、NCR国内外における緊急即応部隊として編制されている。未だ、ロサンゼルス近辺ではBOSの活動もあり、ゲリラ攻撃を仕掛けられる可能性もあることだから、NCR政府は緊急展開可能な自動車師団を国内に置いておきたい考えなのだ。

ニューベガスに展開するのは、殆どが歩兵師団。機械化の殆どが補給部隊に回され、専ら兵士は自身の足で行軍しなければならない。

「いえ、多分あれはモハビ・エクスプレスかあ……」  
警備保障の装甲車輌でしょう。Mr. ハウスの自動化自動車工場で少數生産されたのもありますし

「モハビ・エクスプレスかあ……」

運び屋はため息と共に自分が嘗て務めていた仕事の名前を挙げる。プリムでの一件以降、その名前を聞いてあまり良い印象を持たない運び屋は自身の身分が分からなかつたことに悲しさを覚えた。普通ならば支社で問い合わせれば分かるはずだったのだが、肝心な所はまったく分からなかつたのだ。

『あの積み荷か？そもそもあの依頼はどうも怪しかつたんだ。』

『重要度の高い積み荷ならダミーを持たせるのが普通だろ?』

『いや、六つの運び屋を雇い、五つのダミーを運ばせるなんて儂が現役でもお目にかかる事はない……それに、アイツがやりたくないと蹴つたからな』

『アイツ?』

『お前さんの引継ぎで運ぶはずだった六番目の運び屋だ。最も、モハビ前哨基地で彼に手渡すはずだったのに、あんたはプリムにもよらずに行つてしまつたからよく覚えてるよ』

『…………それで俺の登録名分かつたか?』

『機密度と危険度の高い運び屋は個人情報がロックされてるよ。モハビ・エクスプレス本社のサーバーネットワークで最もセキュリティーの固い所に保管されとる。儂の権限じや、お前さんが受けた依頼の番号と社員番号しか請求できなかつたわい。ダミーの運び屋は大抵、名前で登録されていたが、お前さんの場合は秘匿性故に持つてると教えているようなものだがな』

運び屋はジョンソンから依頼されていたらしい六番目の依頼の紙に彼の社員番号を記した。その番号を知つていれば、身分照会していく

れるとの事で運び屋の身分は保証された。ただ、本人確認は取れてい  
ない以上、モハビ・エクスプレスの本社へ赴かなければならぬ。だ  
が、幸いなことに荷物を強奪した男の一人は服装からしてニューベガ  
スのファミリーの一人であることは間違いない。

「本社に行つても自分の名前が分からぬのは困るな……」

「多分ですが、その心配はないと思いますけど」

「どうして？」

「……大抵は必ず情報を残しておくものですし」

運び屋はコヨーテステーキを平らげ、敷いてあつたN C R C F の刻  
印の入つた寝袋を丸める。元々はプリムを襲撃した囚人が看守から  
奪つたものだが、状態の良いものとジョンソンから買った背嚢に括り  
付けて、前哨基地まで歩いてきた。途中で I — 1 5 号線のハイウェイ  
パトロール分署を見つけ、中に居たジャッカルギヤングのレイダーを  
掃討し、幾つか目ぼしい物品を見つけて再び前哨基地を目指した。

だが、途中で日が暮れて、ポセイドン・ガソリンスタンドの売店にて一泊することになった

「日と鼻の先にあることだし、さつさと向かうことにするか」

運び屋はそう言い、荷物を纏めて売店を後にした。

## 十七話 M i s m a t c h e d f r i e n d s

レンジャー記念碑はNCRのレンジャーとデザートレンジャーの同盟と合併の場所を記念して建てられた。双方の歴史は非常に深い。そのルーツは大戦前に遡る。元々は「レンジャー」と言う名称は騎兵隊の名称として知られ、そこからイギリス軍コマンド部隊の技術を受け継ぎ、第二次世界大戦時のレンジャー第一大隊、ベトナム戦争のレンジャー大隊。2000年代に創設された第七十五レンジャー連隊。そして、2050年代には西海岸で勃発する新型インフルエンザに伴つて暴動が多発。これにより、軍警察と口サンゼルス警察に暴動鎮圧のプロフェッショナルであるレンジャー<sup>ライオット・レンジャー</sup>暴動鎮圧隊が創設される。

NCR建国に携わったタンデイを支持したレンジャーは米陸軍第75レンジャー連隊や口サンゼルス警察の暴動鎮圧部隊の生存者、グール若しくは子孫であった。

デザートレンジャーはホープヴィル弾道ミサイル基地周辺の都市で発生する暴動を鎮圧するため、米陸軍から派遣された軍警察部隊の生存者である。殆どはデザートレンジャーとして旧軍施設に集落を築いた。彼らはネバダを中心に荒廃したウェイストランドの秩序を求め、悪逆を尽くすレイダーやギャング・部族の殲滅や紛争状態の集落の仲介を行うなどした。

そしてNCRレンジャーとネバダのデザートレンジャーはルーツも同じであつたこともあり、同盟終結後、NCRレンジャーの一員と

して活躍を続けるに至る。

運び屋とウリエルはその巨大な像に目を奪われ、粗雑な作りであつたにしても、これほどまでにデカい象を見たのは初めてだつた。いや、彼の記憶にないだけなのだろう。

「あのレンジャーの頭にライトがありますね。灯台代わりでしようね」

レンジャー・ハットの上にはランプがついており、全方位に光が当たる。それは海岸沿いに建設される灯台のようで、旅人の方向を指示するうえで必要なシンボルだつた。

「たぶんナ・・・・・・・・、車だとキツイよな」

2人の目の前には、隅に寄せられた大戦争で損傷した車両が幾つも隅に置かれ、ある程度通行できる幅があつた。しかし、その斜面は急斜面過ぎる。戦争前のアメリカ人がここを通つたとは考えられないほどの急斜面がそこにはあつた。

「大戦争の時に地殻変動でズレたんだでしょう。それとも神のいたずらとか？」

「いたずらにしちゃ笑えんよ。よく、ここをN C Rの車輛が下れたな」

運び屋は良く道路を見ると、通りやすいように土嚢を道の大きな裂け目に埋め込んでいたり、緩やかな坂になるよう土嚢を積み重ねて、坂道を見つける。歩道と区切られた薄汚い道を登山するかのようなく坂道を登つっていく。炎天下のなか、運び屋は水筒の水を口に含み、後ろの仲間に渡そうとするが、その仲間はロボットだつたことに気が付いた。

「私は飲めませんよ」

「ついついな……俺に仲間がいたらこうしていたんだろうさ」

殆どの記憶を失った運び屋にとつて一緒に居てくれるウリエルは手放したくない存在であった。依存という言葉は適していないかもしないが、彼女がダメと言えば、彼もそれに従いかねない雰囲気があつた。

身元の分からぬ男と付き従うロボット。運び屋は未だ坂の真ん中であるためか、口を開く。

「ウリエルはさ、なんで俺と行動を共にするんだ？」

「一緒に旅をするのに理由なんて必要なんですか？」

「いや……そうじゃなくて、何故俺と行動に……」

「じゃあ……エクスプレス支社に置かれたエンクレイヴ・アイボッドと共に行くことですか？」

ウリエルは遙か彼方に旅立つたエンクレイヴ・アイボットの事を挙げた。

プリム解放後、ウリエルと運び屋はジョンソン・ナッシュの事務所で食料品や鹵獲したNCRCFの警棒・ライフルの売却作業を行つていた。パウダーギヤングのライフル類は両手でも抱えきれないような武器弾薬の数々であり、店のキャップに加え、NCRドルの束で売却する。その資金源から水や弾薬、食糧を買い込む店頭カウンターには商品ではない丸い球体が転がつていた。

サッカーボールには見えないそれは装甲板と電波アンテナがあり、

超電導体装置が剥き出しの偵察メカと思しきものは幾つもの改修を隔ててポンコツ機械にしか見えなくなっていた。補助装甲板の代わりに車のナンバープレートが溶接されている様はまさにそうであり、ジヤンクパーツの組み合わせに見えない其れを運び屋とウリエルは指で突いていた。

何も反応しないそれを運び屋は多々ただ見続けたが、ウリエルは何やら赤い光線をだし、ジヨンソン・ナツシユが44口径マグナムを出すところで中断された。

『スキナーで調べてます……攻撃用レーザーじゃないですよ』

一通り調べたウリエルは自身のコンピューターコアに繋がれたコードを取り出すと、アイボットの検査用ソケットに装着する。

『データスキャン開始……中枢部分は機能していますけど、サブシステムと外装板、飛行制御装置、レーザーが壊れていますね。バイパスを分岐させて動けるようにしましよう。メモリーを復旧させて、スリープモードからオペレーティングシステム起動つと』

『何言つてるか分からんのう』

ジヨンソン・ナツシユの言い分に運び屋は頷く。すると、息を吹き返したように受付カウンターから離陸すると、まるでカサドレスのような勢いか、または戦前に生きていたらしい蝶の舞の如く、舞い上がった。それはまるで嬉しそうにクルクルと回転し、電子音を出しながら天井すれすれを飛行した。

『ED—Eって言うらしいですね……ははあくん。どうやら戦前の子供向けドラマが好きな人物が開発したみたいですね』

『全くわからんのう』

『俺もだよ』

訝しげに機械と機械が会話し始めるが、核戦争後に生まれた人類の二人は何が行われているか分からず、ただただ頭を傾げる。

すると、ED—Eはモハビ支社の窓を突き抜けて大空へと突き進んでいった。爆ぜる窓ガラスに補強のために沿え付けてあつた添え木は吹き飛び、あたりに部品と埃が散乱する。啞然とする運び屋と「いつてらっしゃい」と手をふるウリエル。

そんな彼らに待っていたのはこんな一言だった。

『弁償じや・・・・・締めて200キヤツプじや』

ジョンソン・ナッシュュへ支払ったキャップによつて彼の財布は寂しいものになつてしまつた。前哨基地でキヤラバン商人から補給品を買おうとしても、路銀の足しにはならないだろう。僅かに残っていたハウダーギヤングから奪つた数艇のショットガンと防弾ベストなどは高値で売れるが、もしかしたらNCR軍が「軍の物」といつて奪おうとするかもしれないから注意をしなければならない。

「あいつは何処に行つたんだ？」

「ええ、彼にナヴァロの場所教えてと頼まれました」

「ナヴァロか……」

ナバアロ補給基地

NCR兵士ならだれでも知つてゐるエンクレイヴにおける共和国

が軍事力で唯一勝利した戦いの一つだつた。ナヴァアロ補給基地はポセイドンオイル基地に偽装されて建設されていた巨大な地下基地であり、現在でもNCR陸軍の規制エリアとして許可なく立ち入ることは出来ない。

ポセイドンオイル崩壊後、NCRが行つた軍事作戦。「壊れた矢B  
ro  
ke  
n 作戦A  
r  
r  
o  
w」により、残存するエンクレイヴ軍勢力を西海岸から殲滅することを目的として、大規模な勢力を投入。NCRと未だ衝突していなかつたBOSは情報を提供し、多くのエンクレイヴ前哨基地や補給基地を制圧した。ナヴァアロ補給基地もそのうちの一つであり、多くの兵士や物資を抱える巨大な前哨巨大基地であつた。

エンクレイヴの活動方針としてポセイドンオイルや外界からシャットダウンできる場所を拠点とする為、他の場所を前哨基地と呼称する。ただ、ポセイドンオイルガソリンスタンドに偽装されたそれは前哨基地としてではなく、周辺に派遣されたベルチバードを補給するための補給基地だつた。

補給の他にも兵の娯楽や居住、簡易的生産設備などを多く取りそろえたエンクレイヴの飛び地とも言える存在であり、既に数十名の民間人が入植のための準備を進めていたのだ。だが、オイルリグ崩壊後、これに乗じてNCR軍は先の前哨基地を攻撃し、一気にナヴァアロに接近した。

一部の航空部隊やその家族など脱出来たものの、残されたエンクレイヴ兵士や民間人は恐怖心によつてかき乱されたNCR兵によつて虐殺された。高性能なパワーアーマー やレーザーライフルを用いても人海戦術と物量によつて押し負かされ、民間人はその犠牲となつた。

### 「ナヴァアロの悲劇勝利」

と呼ばれるそれはNCR軍にとつて勝利と言えるが、その制圧した場所には多くのエンクレイヴ市民が戦火の犠牲になつており、その技術力はNCR政府を震撼させた。もし、ポセイドンオイル基地が選ばれし者に倒されていなければどうなつていただろうかと。

間違いなく、エンクレイヴによる侵略が行われ、植民地化。民主主義的な統治ではなく、奴隸的制度によつて統治されてしまうことは分かつていた。隔絶した科学技術。NCRは国を守るために科学技術を欲し、BOSと衝突するキッカケとなつた。

今、ED-Eがナヴァアロ前哨基地に行つたとしてもNCR陸軍部隊によつて撃ち落とされるか、技術開発省によつて隅々まで解析され、スクラップにされるのがおちだ。

「でも大丈夫ですよ。彼にはNCRの支配下になつていると伝えましたし、私の仲間が一緒ですから」

「お前の仲間……そう言えばお前の目的を聞いてなかつたな」

運び屋は疑問を滲ませた目で彼女を見る。顔はいつもの優しい表情ではなく、笑顔であつても目は笑つてはいない。もし、本気でウリエルが戦闘状態にあれば、ホルスターからハイパワーを抜き取り、カーネラを撃ち抜く自身が彼にはあつた。

なりゆきで一緒に旅をしているが、信頼を置いているわけではない。信用を置いてはいても、彼女が何故一緒に居るのか、意図が分からぬいためだ。成り行きで旅をした記憶は無いが、彼の性格から相棒を伴つた旅はあまりしていないはずだ。

「そんな怖い顔でこちらを見ないでくださいよ」

「お前は一体どこの勢力なんだ？ BOSではないだろ……だが……」

「NCR政府が私を送り込んではいない……でしょ？」

運び屋が続けると思われる文言をウリエルは勝手につきたす。だ

が、テクノロジーを嫌うレギオンのロボット兵ではないだろう。彼らはロボットを使用しないだろうから、ウリエルが彼らの一因ではないことは明白だつた。ならば……

(・・・・もしかしてMr.ハウスの差し金か・・・・なら・・・・まあいいか・・・)

依頼主であるMr.ハウスの差し金であれば話は変わつて来る。もし、奴の手先であれば荷物の安全のため、奪還のために運び屋を支援する。それなら問題ない。

「まあいい、そんなこと言つてる間に着いたな」

巨大な二体の像の足元を歩きつつ、モハビ前哨基地を見やる。辺りには完全武装のNCR軍兵士が巡回し、ハイウェイ両端には土嚢と共に機関銃陣地と軍用犬の存在があつた。運び屋は犬には近づきたくないという表情を浮かべており、ウリエルはちよつかい出そうかと思考回路に選択肢が現れるが、基地の入口で煙草を吹かす人物が二人へ手を振つており、その選択肢は潰えた。

「お～い！」

「なんか叫んでるぞ、アイツ。構つてやれよ」

「嫌ですよ、私のデータにはあんな死亡フラグの立つ人知りません」

「お前酷くね!」

明らかに失礼な事を言うウリエルであつたが、その謎の人物の一言によつて運び屋は彼と話すことになつた。

「六番！無事だったか！NCRCFの脱獄囚が暴れまわっていると聞いてどうなつたかと思つてたぞ！それにしても早いお帰りだな！Mr.ハウスに会えたか？会えてないで例のセキュリトロンに荷物を託したのなら、賭けは俺の勝ちだな！」

「あく、えつとそだな…………」

運び屋は彼が六番と呼ぶのには心当たりがあつた。運び屋に宛がわれた六番目の荷物とされるプラチナチップ。本命であつた彼の荷物はベニーとカーンズのギヤング共に奪われてしまつていて。彼が六番と呼ぶ男はモハビエクスプレスの社員であることに間違いはない。そして、そこからであるが、聞かねばならないことが二つあつた。一つ目は・・・・・・・・・・・・・・

「すまん…………おまえだれだつけ？」

身を案じていた同業者の男は親しみながらも六番と呼んでいたこともあり、基地中に驚愕の声を上げ、注目を集めることになるのであつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

(作戦開始まで………3………2………1………)

(Prison Break作戦開始、各部隊は攻撃を開始せよ！)

「よし！合図が出た！撃てえ！」

小隊指揮官の合図と共に砲弾手は手に持っていた迫撃砲弾の発射剤を起動させ、砲身へ落す。底の発破針が発射剤を起爆させ、砲弾はその爆発によつて破裂音と共に空へと舞い上がつた。独特な音と共に、放物線上に砲弾は飛んでいく。

そして、目標であつたパウダーギヤングの支配するNCRCF内に着弾した。

「右2度修正、炸薬2修正射！」

北と南に迫撃砲陣地を築いたNCRの攻撃部隊は二方向からの迫撃砲による砲撃により、収容所広場にいた囚人を引き裂いた。

そして、西と東からNCRの装甲車部隊と随伴歩兵が突入を開始した。虎の子の装甲車や自動車を持つてきただことにパウダーギヤングの囚人達は驚いたものの、広場や独房の陰に隠れて砲撃が止み、車両が来るのを待つた。

「あのアーミーの糞共にこれを食らわせてやる」

一人の囚人の手に握られていたのは、手製の粘着爆弾だつた。靴下の中に爆薬を入れて、真っ黒なグリースを塗りたくり、導火線を付けてもので、爆発すれば、装甲車の車輪は吹き飛ぶと考えたのだ。

NCRの装甲車は機動性や防弾性能はそこそこあるが、こうしたダイナマイトなど指向性爆薬は脅威であつた。それこそ投げて近くに

落とせば、爆発によつて随伴歩兵も巻き添えを食らう。

しかし、囚人の読みは外れ、彼の視界の彼方から飛来する弾丸によつて意識は刈られてしまつた。既に導火線には火がつけられており、近くにいた仲間の囚人は逃げる間もなく、爆発に巻き込まれた。

「enemy down! nice kill!」

狙撃を見届けた観測手は800m離れた囚人の頭部に命中し、持つていた爆弾によつて二次被害をもたらしたことを褒める。N C R C Fの周囲にはN C R歩兵の他に高性能狙撃銃を構えたレイヴンクロウ警備保障の傭兵が狙撃位置についており、物陰に隠れて手製の粘着爆弾を投げようとする囚人を一人づく葬つていく。鉄条網を張り巡らせたフエンスに張り付いたN C R工兵はC 4とミニニューケを組み合わせた爆弾を取り付け、「爆発するぞ!」と叫び、起爆スイッチを押した。

ガンバレル式超小型核弾頭は爆発し、一瞬にしてキノコ雲が立ち上がり、鉄条網を吹き飛ばす。それと同時に穴をあけた近くに停車した装甲車の陰から銃剣を装着し、勢いよく突撃するN C R歩兵の姿があつた!

「For the republic! (共和国のために)」

「突撃い!」

闘の声を上げ、怒涛の勢いで囚人達を制圧していく。彼らN C R兵士達は人を効率よく殺すために作り上げられた殺人マシーンとて動くよう訓練を受けている。N C R領内で重犯罪を犯した犯罪者は違ひ、技術も意気込みも全く違つていた。その声に恐怖を覚え逃げようとするが既に遅い。歩兵を援護するため、装甲車上部の機関銃座に設置された12・7mmを発射するM 2機関銃は逃亡する囚人へ

発砲し、肉片へと変えていった。

そして、戦車にも似た車輛。IFVと呼ばれる歩兵戦闘車は57m滑空砲を囚人達の指揮所と見られる旧管理棟に照準を合わせた。

「弾種は榴弾！目標敵戦闘指揮所！撃え！」

車長の命令と共に射手は発射トリガーを引いた。先程までとは比べ物にならない砲撃音は周囲を響かせ、管理棟は爆発と共にあっけなく崩れていった。NCRCCFはNCR軍の本気の鎮圧によつて完全に制圧され、周囲の治安維持のための補給基地として運用されることになつた。

「こちらスネーク1—2、HQ！熊が猛襲を掛け、火薬庫は炎上。熊は多くの熊と共に火薬庫を押さえました、どうぞ！」

(こちらHQ了解した。では行動規定34—12より、撤退命令を遂行せよ)

N C R C F の攻撃を見ていた何者かは暗号化無線で報告を行い、直ぐに姿を消していなくなる。その姿を見た者は誰も居なかつた

## 十八話 C a e s a r , s c o n s p i r a c y

「頭を撃たれて記憶がないだつてえ！嘘だろおい！」

「いや嘘じやない！これが証拠だよ」

運び屋は頭に巻いた包帯が取れない様、プリムの脱獄囚が被つていたN C R C F に支給されたヘルメットを被つっていたので、それを脱ぐ。すると、頭は包帯でグルグル巻きとなつていて、銃弾が頭に命中したことを物語つていた。

「はあ、本当に記憶が無いとは……。いやはや、軍で頭を撃たれて記憶を失つたつて事例を聞いてことがあるが、実際見たのは初めてだよ」

標準的な運び屋の服装、チエック柄のシャツにオーバーホールという服装はN C R 領内でもお馴染みの運び屋ユニフォームだ。逆に運び屋の服装でない彼はある意味、重武装過ぎてプラチナチップを持っていると言つているようなものかもしれないが、ベガスのような三つ巴の戦争状態であれば重武装になつていて当然であった。ただ、N C R C F の暴動がなければ、ベガス南部はN C R の影響が色濃くあるために、比較的安全に通行できていた。もし、二人に声を掛けてきた男がプリムに居たならば、確実に死んでいたであろう。

「いや、ナッシュ支店長がN C R 軍との連絡係として俺を送つてくれたおかげで脱獄犯と巡り合わせずにすんだからよかつたよほんと！」

## 「ソウダネ」

運び屋は殆ど一人でしゃべる同業の男にプリムでの一件を思い出されたため、半ば棒読みな形で返事をする。その横にはウリエルがNCR製の車載用バッテリーから電源を得ており、「ヒンナヒンナ」と皆には分からぬアイヌ語で喜んでいたため、最早カオスの領域に踏み出していた。

運び屋に話しかける男、ダニエル・ワイアンドは運び屋と同じくMr.ベガスに荷物を届ける六人のうちの一人であつた。彼の荷物はダミーであつたが、それを知ったのは支店についてからで、それまでは本命の荷物であつたと思つていたらしく、支店でナッシュから聞かされた時は憤つていたらしい。だが、連絡係の任務に預かつてからは、モハビの砂に塗れることなくウイスキーを片手にだらだらと惰性に前線基地で寝泊まりしていたのであつた。

ダニエルは不愛想なバーテンダーからウイスキーを注ぎ、運び屋に渡すものの、運び屋は「ケガに触るから」と飲まず、彼は「じやあ代わりにヌカコーラやるよ。……ウイスキーは俺が飲む」と赤らめた顔を更に赤くする。

「にしても、記憶が全部抜け落ちてるとはな」

「いや、抜けてるのは自分自身の記憶だけで、NCRのハブや国内の事を良く覚えてるんだがな」

「脳にはエピソード野や知識野と言つた部位があつて、運び屋さんの場合はそのエピソードの部分が欠落しているようですね」

「もし、あたりどころが悪ければ一生植物人間か某研究所の実験体みたいなゾンビになつてたかも…………。

と背中に悪寒を走らせるようなことを呟くウリエルに両運び屋は揃つて渋い顔をする。

「こいつの言う通りだ。身体は何故か覚えているのか、銃の扱いは上手かつたりするし、N C R陸軍の格闘術とか思い出そうとすれば出てくるからな」

「成程な、あんたは前に軍で色々やつてたと言つてたが、詳しくはいつくれなかつた」

「その時のことを考えば言うべきだつたと思うよ」

以前、運び屋はダニエルに軍人であつたことを話していたらしいが、色々やつていたとしか言つていなかつた。当然のことながら、本名すら名乗つていなかつたとあって、ダニエルからその答えを引き出すことは出来ない。更に、基地へ入つた後に、受付に居たナイト少佐に照会してみたところ、「運び屋の身分証明が出来ない」と言い、モハビエクスプレスの運送業者は基本的に通行証明書のみ確認するだけで、N C R政府発行の身分証明書は確認していなかつた。基本的に確認するのは、入国だけであり、現在N C R国民でなければN C R領内の立ち入りは出来なくなつていて、既にレギオンの諜報員やB O Sのテロ攻撃も相まつて、入国審査は非常に厳しくなつていて、

軍人なのか照会を求めたが、軍人の名前や出身は基本的に部外秘である為、本国ではない以上非常に時間が掛かるらしかつた。

ナイト少佐は運び屋の事情を聞き、軍とモハビエクスプレス本社へ連絡を入れてみると、何とか運び屋はN C R国民である仮身分を手に入れた。身元保証人は勿論、ダニエルを介したモハビエクスプレ

スであり、名前などの素性が明らかになるまでキャリアシックス（六番目の運び屋）と名乗るしかない。

「で、これからはシックスと名乗るべきなのか」

「まあ、俺はそう呼んでたし違和感はないな」

「私も違和感ないですね、それに運び屋さんって呼ぶと他の方々も該当しちゃいますから、こちらとしては大いに助かります」

「機械だもんな」

と酔っぱらった調子でウリエルと肩を組み「イエーイ！」と叫んでいる感じ、気楽でいいなと運び屋改め、シックスはその様子を微笑していた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

新カリフオルニア共和国 首都シェイディ・サンズ

二代目大統領の名前が愛称として定着いる現在、首都名がNCRであることは専ら改名すべきであるという議論が持ち上がっている。

Vaultシティーと比べると、まだまだ都市建設は始まつたばかりに思えるが、政府中枢の建造物は殆ど建設されてから間もなく、ペンキの色も真新しい。

その内の一つ、新カリфорニア共和国最高裁判所もその一つである。旧アメリカ合衆国の最高裁判所を模した最高裁判所であるが、近くには裁判終了後にすぐ絞首刑や銃殺刑ができるよう、処刑場も設置されているのは核戦争後の習わしと言えるだろう。嘗て、統一政府が無い頃は「犯罪」＝「死」に直結するものであり、NCR建国当時も保安官が判事と処刑人を兼ねている場所があつたほどだ。その名残であり、未だに刑務所が十分設置されているわけでもなく、大規模な組織犯罪や重大犯罪は多くの場合、絞首刑か銃殺刑が言い渡される。ただ「重労働」に耐える被告人であれば、重労働が課せられる重刑務所やNCRCFFなどの戦線に近い場所へ移送される。

そして、最高裁判所の中でも一番大きい裁判室には司法長官を最高裁判長とする他、各州の州裁判官が集まる重大事件を扱う裁判が行われていた。本来ならば、多忙な司法長官や各州の裁判官が集まるなど、ほとんど見られない事だ。だが、この裁判が取り扱う事件はNCR内でも非常にデリケート且つ今後の経済を左右する案件でもあった。

こうした大法廷はNCR建国以来、史上7度目であり、その多くは政府中枢の誰かが汚職や叛逆容疑、若しくは重大犯罪、大規模テロ事件の容疑者を捌くために召集される。マスコミにとつては注目度を集め、世間に注目される大裁判とあってか多くの報道陣が集まるもので、既に裁判所の外では多くのマスコミ関係者が詰め掛けていた。

傍聴席は満杯であり、近くには司法省の軽装備保安官ではなく、  
暴徒鎮圧のスペシャリストが完全武装で警備に当たる。厳戒態勢  
(ライオットレンジャー)

で挑むそれは政治的問題や犯罪組織の関与が疑われる被告人を守るためにもあった。そんな状況下に苛立ちは隠せない人物が一人傍聴席に座つていた。

何時もならカウガールの風貌でキヤラバンショットガンを携えて傭兵と共に行商人として活動する妙齢の美女、ローズ・オブ・シャロン・キヤシディーであつたが、今着てているのは紺の女性用スーツを身に纏い、キヤシディー・キヤラバンの専属弁護士と共に傍聴席に座る。彼女の目には理屈と感情が混ざり合い、被告人のいる席へ憎悪の視線を送る。もし、ここにショットガンがあれば即座にぶつ放し、20番ゲージの散弾がまき散らされることだろう。ただ、その前に近くにいるベテランレンジャーになります切りにされるとと思うが、どちらにせよ彼女の愛用ショットガンや拳銃は裁判所の入口に預けてあり、今は丸腰だ。

「キヤス、落ち着けよ」

「ジョン、言つておくけど……貴方が止めなければこの裁判は無かつた。どの道、彼女は私が血の風呂<sup>ブラッドバス</sup>に叩きこむつもりだつたし……、こんな裁判茶番よ」

——死刑に決まつてゐる。

キヤスは付き添いの弁護士のジョンに聞こえるような小さい声で物騒なことを言う。それに対してもジョンはわずかに口角を引き攣らせ、眉間に摘まんでストレス性頭痛を和らげる。それなりに業績を上げてゐる中堅行商「キヤシディー・キヤラバン」。NCRでの運輸業機械化により、国内でも私財を叩いて高価な核搭載トラックを運用した中堅企業として名を馳せていた。NCR外でも、モハビではバラモン行商を中心に危険地域への行商も行つており、軍や各コミュニティーでも名の知れる存在だつた。

キヤスも後十数年で半世紀生きることになると考へた彼女はウエイストランドを行商人として生きることを辞めた。NCRのオフィスビルに本社を構え、隣の専属弁護士のジョンと婚姻し、彼女のお腹には新たな生命を宿していた。そして、業績も良く順風満帆の生活を送ろうとしていた。

だが、第一次フーバーダムの戦い直後、モハビ地域での業績が悪化する。それは度々レイダーと思しき一団に奇襲攻撃を受けたためだつた。従業員を失つたことにより、NCR政府や軍の伝を利用して、襲撃事件の捜査を行うよう依頼した。最初はフーバーダム、ボルダーシティーでの損失やレギオン残党の掃討戦。BOSへの対テロ監視など、軍のやることは多岐に及ぶために最初はあまり捜査が進まなかつたものの、モハビでの中小キヤラバンの衰退と大手キヤラバンの躍進に不信感を抱いたNCR軍部と連邦保安局は、マフィアなどの犯罪組織とキヤラバン企業の共謀容疑を疑い、捜査を再開した。そして、目撃証言や遺留品からモハビ各地で光学兵器の不法売買を行うヴァン・グラフファミリーとNCR国内でも大手のクリムゾンキヤラバンが捜査対象として上げられた。

ヴァン・グラフファミリーはエンクレイヴ製の鹵獲兵器を製造販売する武器商人であり、元エンクレイヴ構成員子孫が犯罪組織を統括。グロリア・ヴァン・グラフを頭目としたファミリーがモハビの光学兵器売買を牛耳っていたのだ。NCRモハビ方面軍司令部は直ちに強襲作戦を決行。パワーアーマーを主とする機甲部隊と航空部隊によつて攻撃を行い、ヴァン・グラフ・ファミリーは壊滅。光学兵器は一部を除き接収された。そして、その攻撃によつて発見したのが、ヴァン・グラフファミリーとクリムゾンキヤラバンの共謀犯罪。ファミリーはNCRと敵対する部族や組織に武器を供給していることを掴み、クリムゾンキヤラバンもそれに関わっていたことが明らかとなり、NCR世論は沸いた。NCR国内の流通シェアは7割を超える、一

大流通企業として名を馳せていましたことから衝撃は凄まじく、後援としていた政治家も汚職容疑が掛けられ、N C R 国内での贈収賄関連の汚職が明らかとなつた。

もはや、クリムゾンキャラバンの株価は大暴落しており、売りが殺到していた。倒産は可能性としては低いが、業績を立て直すには当分先か、シェアをMr. ハウスのグループ企業であるモハビエクスプレスに奪われるのは必須である。そして、世の注目を集めた大裁判の判決が発表されようとしていたのだ。

### 「裁判官の入廷！」

警吏の声が法廷に響き渡り、検察官及び弁護士、そして被告人と傍聴席の人々は起立して裁判官が入廷するのを見届ける。各州の裁判長が入廷し、司法長官が中央に着席して起立していた人々は同時に着席する。

大法廷内は着席した椅子の音が響き渡り、すぐさま判決を言い渡されるのかと視線が裁判官達に集中する。先程まで行わっていた最終弁論にて終始、被告人は無言で何も話さなかつた。被告人質問や証人喚問など行われていたが、被告人は全て無言を貫き、裁判官達の心証を悪化させてもどうともしないと思つてゐるかのようだ、勝ち誇った表情を見せてゐた。法廷画家はどの様に書いてゐるのか定かではない。だが、傍聴席に座る記者はその様子を不審に思い、「疑惑の法廷」「不審な被告人」など様々な憶測が飛び交うことだろう。

「これより判決文を読み上げる」

司法長官が判決文を読み上げると宣言し、法廷は先ほどよりも増して静まり返った。長官の宣言から一拍、二拍と時間を置くが、慣れていない傍聴人などは非常に長い間隔だと思ったに違いない。

「主文……被告人アリス・マクラファティを有罪とし、禁錮2年に処する」

「なんだってえ!?」

キヤスの怒号が法廷に響き渡る。それを皮切りに傍聴席のあちらこちらから怒りの声が上がる。「静粛に!」裁判官が叫ぶものの一向にそれはやむことなかつた。確実に死刑として死刑か射殺と思つていたのにも関わらず、なぜかそこに持つっていたのは禁固2年という軽い处罚たつた。

傍聴席の人々は死刑を望んでいたとあつて不満は裁判官の方へ向かつた「なんで殺さないんだ」「しつかりと裁判しろ」と叫ばれ、近くにいたレンジヤーや刑吏は厳戒態勢で傍聴席の荒れように驚き、直ぐに裁判官や弁護士などを守るように陣形を整える。

「静粛に!」

裁判官は木槌を打ち付けるが止むことは無い。

「一時休廷! 傍聴席の市民はすぐに退席!」

被告人の安全を守るべく、レンジヤーと警吏は壁となり、手に持つていたポンプアクション式ショットガンのフォアエンドを引き、マガジンチューブの12ゲージ散弾を機構に装填する。威嚇するかのように行われた動作は傍聴席にいた怒り狂う民衆を押さえ、警吏は出入

り口を開放して強制的に傍聴席の市民を立ち行かせていく。キヤスラも最前列に居たためか、直ぐに法廷の退出を求められ、彼女は腹を立てながら、外へと出ていく。

「在り得ないわ、あの婆が禁固だなんて……」

「もしかしたら、証人保護を受けるんだろう」

法律に詳しいジョンは苦々しい表情を浮かべる。

戦前のアメリカのように、犯罪者の証拠を密告する人物は保護される。これは戦後の新カリフォルニア共和国でも言えることであり、重要な証拠を握つていれば、刑務所に送らずにどこかへ監禁するのが一番なのだ。

今回の被告人であるアリス・マクラファティは権謀術数の魔性の女であり、クリムゾン・キャラバンモハビ支店長でありながら、会社の半分を実質支配下に置く女である。自社の利益、自分の利益になるとであれば、どんな犯罪を犯しても構いなく、犯罪組織とは幾らでも関わるような悪人であった。

既に証拠として挙げられたのは、ヴァングラフの他にグレートカーニーズ、陸軍の横流し軍人などである。だが、もし公表されていない証拠があり、公に出来ないものであればどうだろう。それが国家を搖るがす様な証拠であれば大問題である。

2人が会話をしている内に被告人のマクラファティと護衛の兵士達が現れ、緊張によつて空気が張り詰める。その時を狙つたかのように

マスコミが乱入してきた。

「おい！どこのどいつだ！マスコミを入れた馬鹿は！」

「マクラファティさん！今の心境を！」

「ニユーリノのファミリーを告訴するのは本当ですか!?」

「軍部の腐敗に対して証言するとの事ですが、減刑されたのはそのためですか！」

今にも襲い掛かりそうなマスコミの猛攻に壁となるレンジャー隊員のショットガンは武器とならず、威圧も効かないマスコミの対応に苦慮しつつ、出来るだけ離れるよう怒鳴るものの収まる事はしらず、発射炎の代わりにカメラのフラッシュが焚かれる様は戦場を思わせる熱気で包まれていた。

「大法廷前廊下でマスコミの妨害！至急応援を！」

次々と増えていくマスコミの数に圧倒された精銳のレンジャーは護衛対象を守れないと感じたのか、応援を要請する。あまり強引に退けても、レンジャーによる暴行沙汰に発展しかねない。だが、手加減していれば被告人への護衛が出来なくなる危険性もあつた。

「第一小隊！急いでマスコミ連中をどけろ！」

「ほらー！下がつて！下がつて！」

後衛として準備していた第一歩兵師団から出向してきたと思しきMPがマスコミの壁を掻き割るようにして割り込み、散らせるように押し出した。

指揮官らしき男は被告人に目を合わせると、ふと口を開いた。

「マクラファティさん、大丈夫ですか？」

「ええ、早くあいつらを追い出してちようだい！」

「それは出来ません」

「どうして？」

N C R の軍服を身に纏い、憲兵少尉の階級章を付ける将校は否定する。マクラファティは理解できず、ヒステリックのように叫ぶものの、将校はまるであざ笑うかのような表情で言葉を紡ぐ。

「貴方は我々との契約を守つて下さるつもりがないようですね。ここで契約は満了という形になります。シーザーの盟約は絶対です、では」

キヤスが気づいたときにはもう遅かった。第一歩兵師団出向のM指揮官はレギオン軍が鋳造する短剣で彼女の胸を突き刺したのだ。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

「何している！」イツを押さえろ！』

「離せ！シーザーに栄光あれ！」

周りの兵士が乱心した指揮官を取り押さえようとするが、それに抵抗し指揮官の男は手に持っていた金属の球体のピンを引き、安全レバーを外した。

「グ、グレネード!!」

叫んだつかの間、爆発によつてマクラファティや周囲のMPとレンジャーが巻き込まれる殺戮場になり果てた。キヤスはその様子を遠くの柱の遮蔽物から見守つていたが、一連の動きは全て耳にしていた。

「ジョン、あの婆はもしかして……」

「ああ、キヤス。奴はレギオンに味方した売国奴さ」

そして、この事件はレギオンの殺し屋が國の中枢で暗殺を行つたとして報道され、敵のスパイがNCR国内に紛れ込んでいるということが世間に晒された。

## 十九話 C a e s a r c o n s i l i u m

サンセット・サルサパリラ

ネヴァダ州や一部のカリフォルニア州などを跨るモハビ砂漠全域で見かける清涼飲料水である。スカコーラよりも歴史が長く、サウスベガスの本社に近づくにつれて、ボトルの数は多くなっている。

だが、味の方はどうかと聞かれると何とも言えない。現在はNCR一部で栽培されるサルトリイバラ属の植物の根を使っており、ルートビアに近いが、その独特な風味は薬草の如く臭い。その香りは湿布のような刺激臭がしているため、ガーゼに染み込ませれば何かの効能が見込めると思われるかもしね、だが、糖分が多いために、何かしらのミュータントが酔つてくる危険性がある。

唯一の利点は放射能汚染されていないことだが、水分がある程度供給されているモハビにおいて、ヌカコーラの次に人気がある飲み物と言える。というか、それ以外に水分がないのなら飲むしかない。なので、不味いとしても、飲まなければ生きていけないのだ。

だが、例外はある。以外にも愛飲者はおり、まことしやかに伝わる伝説があつた。ボトルキヤップの裏に輝く星を見つけ、それを集めてサルサパリラ本社に行くと伝説の財宝が手に入れられるのだと言う。それを求めて強盗や殺人を起こす者もおり、戦前から生きている者は「馬鹿なんじやない?」と呆れ顔をする。何故なら、その宝物と言うのが子供のために作られた保安官バツチだと言うのだから笑えない。

「動くんじやねえ!ぶつ殺す!」

パンクヘアのレイダーに近く、凶悪そうな顔をする女は10mmピ

ストルを撃ち、廃車の物陰に隠れたひ弱そうな青年を殺そうとする。

「ちくしょう！なんで俺がこんな目に！」

数日前に出会ったその女は悪そうな割に話せば気の合う奴だった。一緒に動いていくにしたがつて、それなりの中になり、ハブに付いたら両親にも紹介しようかと思つていたのだ。だが、青年——トーマスの幸運の首飾りを見ると、豹変して銃を突きつけたのだ。まさか、金目当てだと思わない彼はキヤップの入つた袋を渡したが、それでも銃を突きつけ続け、隙を見て応戦したのだ。だが、肝心の銃が動作不良を起こしてしまい、万事休すと言つた感じだつた。

「糞糞！こ、降参だ！何でも渡してやる！だから殺さないでくれ！」  
「はつ！出来ない相談だね！そもそもあんたに近づいたのはママのおっぱい臭いあんたが好きだつたんじやない。私はあんたの持つてるスター・キヤップが欲しいのさ！」

——何で幸運のお守りを？

財宝の眉唾に近い伝説を知らなければ、珍しいキヤップだとしてお守り代わりに持ち運ぶのも少なくない。だが、それは一部の人間からすれば喉から手が出るほど欲しく、人を殺しても手に入れたい悪人共が沢山いるのだ。

「それにあんたの事はここで殺さないと、他の奴にスター・キヤップを持つていると知られちまう！あんたはそこで蟻の餌になるんだね！」

ゆっくりと近づいてくる足音はトーマスに死を知らせ、その瞬間を耐えようと目をつよくつぶる。だが、その瞬間は訪れなかつた。風を切る音と共に、女の頭部ははじけ飛び、あごから上が無くなつてしまふグロテスクな状況になつっていたからだ。

「ひい！？」

突然の事で驚くトーマスであつたが、彼の目には恐怖と共に重武装な旅人と風変わりなロボットを連れていた。

「あ、すまないんだが事情教えてくれない？」

A vertical decorative border on the left side of the page. It features a repeating pattern of stylized 'X' marks and small dots arranged in a grid-like fashion.

「あ～めっちゃいますね・・・・・」

「だな……」ここまで来ていたか・・・・・・」

シツクスは双眼鏡から一プトンの黒煙が登る様子を見つめていた。既に事を終えているのか、銃声や悲鳴は聞こえないものの、ゴムの焼ける匂いが遠方まで流れてきており、シツクスは鼻を抓みながらその光景を眺める。

二プロトンは人口500～1000人程の比較的大きい集落の一つである。スローンやサーチライト、前哨基地に近いためにNCR兵に好まれている町でもある。だが、其れは兵だけであり、士官や下士官、若しくは精銳のレンジヤーや古参兵はあの町を歓迎しない。

所謂、花を売る仕事。売春宿を行つてゐる所であり、前線

が近いためにNCR兵の慰安として娼婦が來ていた場所であった。元々は寂れた町だったものの、喰うに困った住人が春を売つたことをキツカケに娼婦と言つた人種が増加した。NCR兵の他にもスラヴエンジヤーやスローンの採掘労働者もおり、町の治安は非常に悪かつた。加えて、NCRCFも流入したために更に悪くなるかと思つたが、無断離隊や巡回ルートを逸脱した分隊が遊びに来るなどしたものの、「敵」ではなく「客」として迎え入れてしまったのだ。

某フルメンタリー曰く「ソドムとゴモラと呼べる掃溜め」と表現しており、シックスがレギオンの軍旗が町の周囲に刺さつていることを見るに、彼らがどのような行いをしたのかすぐに理解した。

「……あの様子だと一個中隊はいるんじゃないかな?…」

「突入しますか」

「いやいや、馬鹿言つてんじやないよ」

シックスは呆れたようにウリエルの頭を叩く。

「ハリウッド映画じゃあるまいし、マシンガンとランチャー抱えて一個中隊潰すなんて出来るわけない。更にここまで進入する部隊と言う事は、奴らの練度は高いぞ」

何せ、河を隔てたこちら側の領域はNCRが支配していると公言するエリアである。つい最近になって、レギオンの浸透攻撃が行われて疲弊している。その支配エリアに深く入り込み、重要拠点でない場所を攻撃して虐殺（マサカー）を行えると言う事は彼らの力量が伺い知れる。

「じゃあどうします?」

「道を迂回してノバツクに向かう。……やつらを野放しにするのも気が引けるがな」

手元にあるAR-15では近距離からでしか狙えないし、同等の中隊規模でもレギオンの精強さと比べたら、逆にNCR兵の中隊は壊滅しかねない。

「砲撃支援を求めるのはどうでしょう?」

「確かに、NCRCFを制圧してからこっち辺の作戦地域を支援砲撃するためには、砲兵基地を建設する手筈だったな」

2人は同業の運び屋と別れてからいろいろな情報収集をしてから前哨基地を後にした。レンジャーから頼まれた蟻退治も終えてから、ゴーストと名乗っているレンジャーから「二プトンの様子が知りたい」とウリエルが頼まれたらしく、軍用無線機の周波数を教えてくれたらしい。

その時にNCRCFを制圧に向かつた部隊は砲兵基地を建設した後に、スローンのデスクロー退治を行うという情報を掴んでいたウリエルはシックスに今後、砲撃支援が行われることを伝えた。

「でも、二プトンに前哨基地を置いたりはしないだろう。あんな風に自分たちがここに居るなんて知らせたら馬鹿だ。あれは見せしめだから、直ぐにあの場所を引き払うだろうさ」

——俺が指揮官ならそうする。

二プトンを襲つたのは、NCR兵の慰安を妨害する事やNCRの玄関先に近く、恐怖を与えられるからに他ならない。NCRCFやスローンなどの障害が無ければ、前哨基地から空港跡地に作られた基地まで補給路としているNCR軍は広大なモハビに軍を分散させるほかない。もし、二プトンやサーチライトに部隊を集中させれば、ダムが手薄になつてしまい、レギオンに隙を見せかねない。

今後、こうした破壊工作や補給路への攻撃は日に日に増していくと思い、シックスの表情は優れなかつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

其処は嘗てラスベガスに本社を置く、小さい気象観測システムを開発する企業がネヴァダ一帯の気象観測のために施設を置いていた。今となつては分からないが、戦前に都市伝説があつた。

『其処には軍の新型秘密兵器が収納されている』

『核戦争に備えるために軍が物資を備蓄している』

『死体を研究するマッドサイエンティストの秘密基地』

などなど、その場所の噂などは眉唾ものもあれば真実も混在する。多くの都市伝説は真実を元に嘘と偽り、推測によつて肥大化されいく。その内の一つが『気象観測施設に偽装した貯蔵施設』と。

裏付けであつたのが、ここは元々 vault 建設予定地であつたが、突然建設がストップした。だが、その後も多くの資材やトラックが行き來し、いつの間にかぽつんと気象観測施設が立てられていた。周囲には警備員の他に重武装の警備ロボットが常駐しており、不良学生の何人かが不法侵入で逮捕されたことが伝説の契機となつてゐる。

そうしたことから、軍隊を駐屯させるに足る平坦な土地があつたために、古代ローマをリスペクトしたシーザーレギオンの大部隊はこの場に駐屯する。テクノロジーに対して忌避している彼らであつたが、

コロラドを攻撃するNCRはヘリを使用するために、どこから持ち出したのか対空機関砲や対空ミサイルなどのハイテク兵器を配備しており、これまで彼らを監視していたNCR兵は驚愕を隠せなかったら。

だが、彼らは知らなかつた。彼らの足元には忌避すべきハイテク兵器群が息をひそめてスリープ状態になつており、大隊規模のロボットが主の命令を待つていることを。

そして、駐屯地の中心。陣営を見渡せる比較的高台の場所に大軍を指揮する司令部があつた。そのひと際大きい天幕に入つた人物、パル・バス・インカルタはローマ式敬礼を行う。

「シーザーに忠誠を！」

「シーザーに忠誠を！」

シーザーが敷いた政策の一つに統一した敬礼を行うことがある。これは400年も前に勃発した二度目の世界大戦において、国民を束ねるために使つた敬礼をモチーフにしており、多種族連合であるシーザーレギオンを結束させるために、規律と共に教え込んでいる。

ある者はシーザーを讃えるために軍歌を作り、またある者はシーザーの威光を宣伝すべく、多くのスパイ（フルメンタリー）を各地に派遣している。それはNCR領内にも入り込んでおり、政治腐敗の激しい首都において入り込むのは容易かつた。

「殿下、ネルソンでの肅清は完了いたしました。」

「ゞ苦勞……NCRの様子は？」

「傍受した無線連絡によりますとサーチライトとネルソンに部隊を開する模様です。既に各駐屯地から部隊の抽出が行われております。」

シーザーは満足した顔で玉座に座つており、果物の皿を持つ奴隸をいつたん下がらせると、羊皮紙に書いてある作戦計画を読む。

シーザーの思惑であるNCRへの心理的攻撃、そして戦力の分散は成功した。他にも様々な陰謀に加担していた。既に後継者に本国の内政を任せしており、自身は疲弊する双頭熊を仕留めるべく、軍を巧みに操っていた。内政よりも軍を指揮するほうが性に合っているのか、NCRへの破壊工作は多く成功していた。

「そうか……。インカルタよ、お主は今日のカリフォルニアタイムズを読んだか？」

「いえ」

「そうか、あれが一面に載つてたぞ」

どこで入手したのか。『NCRA ネバダ方面軍司令部発行』と判子を押されたNCR全国紙として発刊されている新聞をインカルタへ渡す。其処には一面で『大法廷で爆弾テロ！・シーザーの陰謀か！？』と号外記事で書かれていた。

「あの女は我々との盟約を忘れていたようですね」

「所詮、あの程度の俗物だ」

シーザーの命令によつてマクラフアティが流通させる物資をレギオンへ流し、更にNCR軍への物資を意図的に遅らせるなど、多くの

所で役になっていた。彼女の他にもNCR議会にも現政権の政策に反対し、内通する議員も多くいた。政権を退陣に追いやるために敵まで利用する、腐ったNCR富裕層を利用する方が簡単に仕留められるとシーザーは思っていた。しかし、意外にも腐つても国を守る者も多いたらしく、マクラファティは副業で捕まつた挙句、軍上層部にレギオンのスパイを教えると盟約を破つたのだ。

マクラファティの利用価値はゼロに等しく、最早その価値はNCR世論を沸かせるための生贊位にしかなく、命を捧げても良いフルメンタリーによつて行動に移された。

既に抱き込んだマスコミは政権批判の記事を掲載し、ラジオでも数曲政権批判の放送をしている。アメリカの屋台骨とも言える民主主義や自由主義と言つた概念を掲げたNCRは自らの楔によつて傷ついていく。

表現の自由や報道の自由、言論の自由の名のもとに、売国奴に等しい議員の後押しから政権批判をシーザーの意思によつて行われていく。既にシーザーと言う名の寄生虫に双頭熊（NCR）は内側から蝕まれ、屠られていく。既に世論は厭戦気分が出て来ており、ちらほらと種が芽吹き始めていた。

「まさか、NCRCFの脱獄やスローンへの破壊工作、フィーンドへの兵器供給には驚きました」

「クリムゾンキヤラバンにはシルバーメダルを送らなければな」

シーザーの笑いと共に近くにいた側近も笑い声が漏れる。

クリムゾンキヤラバンはシーザーとの盟約の元、数々の破壊工作の隠れ蓑として活動した。クリムゾンキヤラバンの大半は善良なNCR市民であるが、それを利用し「流通大手の信用できるトレーダー」に扮してNCRCFの囚人に強力な兵器を提供し、スローンの奥でデスクローの卵を設置。そしてフィーンドには数々の物資を提供した。

しかも、多くがNCR製と言うレギオンの存在を全く出さずに行えたことは、指揮したインカルタとて意外であつた。ここまで防諜や国家への忠誠が薄く、溶け込みやすいとは思わなかつたためだ。近年、NCRも本腰を入れて捜査をするが、取り締まるのが労働者層であるため大した効果は無い。

シーザーはこのまま進めば年明けにはNCR入りするとにらんでおり、コロラドに入りつつある部隊も撤退を余儀なくされるはずだと考えていた。

しかし、懸案事項が一つだけあつた。

「最近になつて出来た傭兵会社…………あれはどうなつている？」

「レイヴンクロウと名乗る民間軍事会社ですね…………現在調査中です」

シーザーの計画に無かつた組織。レイヴンクロウ警備保障。

多くの分野に突如として現れた組織。非常に高い技術力と資本力を武器に勢力を伸ばし、NCR正規軍よりも高い練度と質を保つ民間軍事会社である。レギオンはかなりのプロフリゲートを送り込んだものの、多くが帰つてこないかプロフリゲートの拠点を地図から消された（・・・・・）りしたために、後手に回つた状態であつた。

NCR軍中枢に潜り込ませた潜入工作員の報告から推測するにエングレイヴの元要員を主軸に活動しており、彼らの後ろ盾にはシーザーを毛嫌いする軍人出身の議員や政財界が絡んでおり、そこに介入するのはレギオンの諜報部隊でも手が出ない有様だった。

「奴らは亡国の亡靈（エンクレイヴ）だ。奴らが裏に居ると不味いが、

そこはどうなのだ？」

「難しい所です。彼らの本隊はオイルリグの一件以降壊滅しましたので。ただ、生き残った主力が東海岸に潜伏しているとまでしか……。放射能の被害が多く、東の領域から出れば異形共が待ち構えています」

アリゾナを中心に広がるシーザーレギオン。彼らもまた豊富な自然環境の中、放射能のない生活を送っているが、いつたん東の領土から出てしまうと多くが放射能に汚染されているため、直ぐにグール化するなどして被害が出ている。東海岸に行つたのではないかという憶測が流れているが、向こう側へ行く者やこちらに来る者は少なく、情報は断たれているのが現状であった。

「ふむ、潜入工作の件は慎重に進めろ。奴らの対策は練っているが、我々の信条に反する行為であることは変わりない。」

「畏まりました」

シーザー。

嘗てはN C Rの国民であり、アポカリプスの使徒として活動していたが、N C Rの腐敗ぶりから東部の部族に身を寄せ、精神的な物から作り替え、テクノロジーを無くした生活に戻ろうとしていた。だが、相手がヘリなどの航空戦力を用いる時、槍や弓矢で落そうにも無理がある。銃火を交える相手に全て剣で戦うのは撃つてくれと言つていいようなものだ。

レギオンは高度なテクノロジーは邪とするも、銃などの原理が簡素な物は許容している。陣地に例外としてある対空砲や対空ミサイル

はその例外として挙げられるが、貴重なベルチバードを戦線に投入しないというのがシーザーの所見だつた。

シーザーは天幕を挙げて、フォートから見えるフーヴィアーダムを見る。其処には西海岸の電力をカバーできる巨大な発電施設が広がつており、既に復旧した電線や地下電線を通つてカリフォルニアまで送電している。もしそれを止めればどうなるだろうか。

粗悪な原子力発電に頼らざるおえない状態のまま発電を行い、メルトダウンや暴動が発生するカリフォルニア。NCRは瓦解して、プロフリゲートを一掃できるだろう。

シーザーは嘗てNCRで経験した記憶を思い出す。アポカリップスの使徒になる以前は富裕層の家庭で生まれた。順風満帆だったが、親の会社が買収され、資本主義の名のもとに搾取され、家族は崩壊。今は亡き妹は極貧街で春を売り、梅毒でこの世を去つた。アポカリップスの使徒になつても心の穴を埋めることは出来ず、善の心で人に尽くしても何も変わらない。金ある者は全てを食い物にしていき、貧しき物には一銭も与えず餓えていく。ならば、武によつてすべてを肅清し、武が正義である世界を創る目標を掲げ、西海岸制圧を目論み邁進を続けてきた。

彼の読み通り、NCRは多くの汚職に伴い、瓦解寸前に陥つている。現在のキンバル大統領は身内政府であり、仲の良いゴマすりを重用するという悪化の一途を辿つてゐる。NCRは機能不全に陥るのも時間の問題だった。

「西海岸は私の物だ……」

悲劇を経験した男は二度と繰り返さないために行動を起こす。それが善の心が発端であつたとしても。結果として善かどうかは後世が判断するだろう。

### 第三章 N o v a c

#### 二十話 U n t e r n e h m e n G r e i f

##### ノバツク

元々、デイノ・デイーライトモーテルのネオン看板「NO VACANCY」が破損して「NO VAC」と表示され、現在の呼び方となっている。元々は十字路や幹線道路沿いの燃料休憩やストリップ地区に行く前にここで休憩を済ませる観光客の泊まる場所とされ、名称としてはデイノ・クロッシング（恐竜通り）などの呼び方になるのだろう。

戦後もその立ち位置は変わることなく、NCRから来る旅行者や商人、軽歩兵連隊の休憩場所としても知られ、独立町としてその地位を保っている。NCR前哨基地からは離れているものの、ノバツクはNCRの色合いが濃い。というか……

「おい、ウリエル……あれは？」

「双熊旗ですね……ここはNCRの飛び地かな？」

ちらりと見えたNCR国旗である双熊旗が翻っているとなると、「ここはNCRの領土です」と宣言しているのに等しい。だが、よく見るとその国旗を翻っている所をよく見れば中央に星条旗が垣間見え、そしてネヴァダ州の州旗もあることから、中庭と捉える方が自然だった。

すると、近くにいたスカヴァエンジャーの一人が話を聞いていたのか近づいてくる。

「あんたらはじめてかい? ここはN C R退役軍人が多くてね、むこうからこつちに移り住んだ奴もいるくらいなのさ」

「へえ、じゃあこゝは独立町ということでいいんですか?」

「まあ、そう言う事だらうな。とは言つても重要な決定事項はモーテルの婆が議長やるけど、結局町の総意を汲んで決めるから誰が一番つてわけでもないな。有事の時は退役軍人が先頭に立つし」

レプコン試験場によくスクラップ目当てで行くらしいが、今はフエラルグールが沸いているらしく、下手に近づけないらしい。

「フェラルを掃討しないのか?」

「したくて、こゝ最近は銃弾の値段は高騰してるからな。向こうのネルソンがレギオンの連中に占領されて、ここにもつい最近偵察部隊が近づいたことあつてさ。今はあの道の向こうに部隊が駐留してるけど、この分だと突破されるかもな」

スカベンジャーは指をさし、ティラノサウルスが頭を向ける方へ目線を向ける。シックスはついつい近くのNCR軍の状況が知りたくなり、色々と質問してしまう。

「こつちはかなり劣勢だな……大丈夫か？」

「どうだろうな、NCRも結構頑張ってはいるけど、素人目でも防諜が些か雑に見えるけどね。」

彼は喉が渴いたのか、水筒のふたを開けて乾いた喉を潤していく。

「あんたもNCRの人かい？」

「多分な、事故で記憶を失つてて」

「そりや、ご愁傷様。ああ、俺はここいらでキャラバンをやつてる、ジヨセフ・スマスだ」

「一応、モハビエクスプレスの……ああ、本名まで忘れたからシックスか運び屋とでも呼んでくれ」

シックスとジョセフは握手を交わし、シックスは友好の証と情報のお返しとしてバックに入っていたウイスキーを渡すと、ジョセフの目は嬉々とする。

「助かるよ、そろそろ切れそうだつたんだ、また何処かで」

「ああ、じゃあな」

ジョセフはパツパツとなつた大型背嚢を背負い、「よつこらせ」と言うと、入手した軍需物資を売りさばこうと、一番売れそうな場所へと向かつていった。この場合だと、最前線に最も近い、キャンプ・フォーロン・ホープに違いない。

「さてと、宿を探すか」

「ええ、ここはどんなバッテリーが待つてるのでしようね」

「……」

Mr・ハウスが付けたお目付け役だろうが、本当に仕事する気があるのか？

シックスは呆れた顔をしてノバックに入つていった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

キャンプ・フォーラン・ホープ  
決死隊駐屯地を指揮するボラトル少佐の表情は暗かつた。駐屯地の兵は度重なるレギオン兵の攻撃から疲弊しきつており、脱走も幾つかあつた。物資は常に欠乏し、存在していることで敵の侵攻を遅らせているといえよう。駐屯地は危機に瀕していた。

大規模なぶつかり合いではなく、他の補給線破壊によつて餓えらせるような攻撃。更には度々基地に狙撃や未熟な兵に打撃武器を持たせた自殺突撃。度重なる攻撃は陥落には至らせらないものの、士気は最底辺に落ちており、まるでレギオンの指揮官があざ笑いながら作戦指揮しているようにすら思える。

ボラトル少佐は埃の被つた軍用糧食の箱に入つていたインスタントコーヒーの袋から賞味期限切れの紙パックを取り出した。プラスチックやビニール製品などはほとんどが医療用器具の保管や保存のために使われており、湿気を通じにくくするためにバイオ燃料から抽出した植物性ビニールを内側に貼つたそれを開け、粉状のコーヒーを金属製マグカップへ入れていく。

「バラモンの粉末ミルクは……ないか……」

NCRの主な乳製品は保存の効きやすい加工品ばかりがあり、生産量もかなり少ない。放射能によつて変異した牛、バラモンによつて供給されるが、変異はまちまちであるために乳房の大きさや数が不揃いであり、アメリカ特有の酪農機械化の足枷となつてゐる。核戦争さえなければ、自動搾乳機ぐらいのテクノロジーは簡単に手に入つた。だが、アメリカ全土を焦土にしてしまつた現在、失われた技術は多く存在する。BOSなどの武装科学結社は兵器に転用可能な技術しか収集していないし、即戦力となるものや人類の脅威となる存在以外は眼中にない。それはNCR政府も同じであつたが、建国から幾年も経つて、富国強兵といった政策には軍事の他にも、国民の生活向上も行わなければならぬと気づく。失われたテクノロジーを復刻するため日夜、科学者達は過去の産物からどのように製造していくのか、詳しく調べ、または新たに生み出す必要があつた。

そのためにはまず、新たな技術や科学を発明する科学者が必要になり、国民の学力を向上させ、識字率を上げなければならない。ボラトル少佐もかつてはアポカリップスの使徒から学問の知識を得て、NCRの高等機関で学び、大学の奨学金を返済するために陸軍に入隊。そして、なぜか少佐の位まで昇進し、戦線維持に全力を注いでいた。

文学などを学んでいたからか、NCRの文学界における躍進はそうした産業育成に出版社にでも就職するという選択肢があつた。意外にも軍人という職業が天職であつたらしく、軍内部でも指揮能力はかなりのものであると太鼓判を押されてゐるだけあつて、壊滅しかけたネルソン駐留部隊と自分の率いている増援部隊を統合してネルソン

に防衛線を張っている。だが、その戦力も大分減少している。これまで指揮していた一個大隊とネルソンに駐留していた二個中隊を統合した部隊は情け容赦のない攻撃によつて、一個大隊程度にまで減少していた。

「少佐、各基地に派遣した補給部隊が到着しました」

「そうか、帰ってきた部隊の数は？」

「3個隊です・・・・・・・・」

淹れたばかりのコーヒーを地面上に叩き付けたくなる怒りが込み上げるもの、部下が見ている手前、そんなことをすることはできなかつた。苦々しい表情を浮かべる少佐への言葉がない部下は、クリップボードに記された補給品リストを手渡した。

「各部隊に均等に物資を支給しますが、武器弾薬がかなり消耗しています」

「航空部隊の爆撃やヘリによる攻撃要請はどうだ?」

「司令部は捕虜の解放を最優先にしろとの通達が・・・・・・・・」

「あの大統領の腰巾着が！前線の状況を知らないでよくぬけぬけと・・・・・・・！」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、ボラトル少佐は怒りを露わにする。だが、それに驚く者はいない。怒りは真つ当なものだ。膠着状態の続くフォーロンホープ戦線を打破するには打撃力を有する装甲師団か航空部隊による近接航空支援をして大打撃を食らわせ、敵を木つ端みじんにするしかない。

「再三、ヘリによる攻撃を打診しましたが、対空兵器の存在もあるために却下されました」

ボラトル少佐はため息を吐く。こればかりはどうしようもなかつた。レギオンはブルヘッドシティー防衛のための攻撃ヘリを経験したためか。戦前の地対空ミサイルを引っ張り出してきた。大戦中には西海岸に配備されても、使用されることのなかつた鈍重な中国の対地攻撃機を対象とした車両型ミサイル兵器を配備したのである。戦前のジェット戦闘機であればなんとかなりそうだが、ベルチバードなら話は別だ。

貴重な航空戦力であるベルチバードはNCRにとつて虎の子に等しい。戦術的優位を覆すような真似はしたくないし、落したベルチ

バードをプロパガンダに利用してもらいたくない司令部は墜落の可能性のある戦線への投入を控えている。さすがに戦況打開のために虎の子であるベルチバードを投入したいボラトル少佐でも、憎きレギオンのプロパガンダに愚かな将校として宣伝されるのは好ましくない。

副官の少尉は防衛計画の書類や報告書をボラトル少佐に渡して司令部テントを後にする。

—これなら、ボルダーシティー防衛戦の時の方がまだましだった。

と少佐は独り言を言いそうになる。部下とレンジャー2人を残してしまったことは彼にとつて失策だったが、それでもレギオンの連中を釘付けにしてボルダーシティー中に仕掛けた爆薬を起爆させ、レギオンの大群を吹き飛ばした。肝心なのは、戦争に勝利する手段ではなく、勝利した後の後始末だった。ボルダーシティーの住民にはNCRへのヘイトがたまり、有効な復興策を打ち出せぬまま、フーバーダム要塞のコンクリート輸送の中継基地としていく関係でかつての街並みを修復することはしなかった。

ボラトルは頭の中で悔恨に苛まれるが、突如として銃声が響き渡つたため、すぐさま近くの無線兵へ尋ねた。

「今どの銃声は?」

「確認します・・・・・・・・こちらHQ、全監視所へ。銃声の位置を特定し、最寄りの巡回班は報告せよover」

(こちら北側監視所!て、敵の攻撃を受けている!敵の規模はいつ…)

「北側監視所！応答しろ！」

「敵の襲撃だ。偵察行動を行う全隊員を帰還せよ。全部隊は至急防  
御態勢に…………」

命令を下そうとした瞬間、室内が真っ白に染まり、まるで金槌で殴  
られたような衝撃に襲われた。それが閃光によつて視界が潰された  
事や強烈な爆裂音によつて三半規管が揺さぶれたことに気が付くま  
で時間を要した。

「おつと、ここが司令部か。貧相だな」

視界が晴れ、ボラトルが見たのは自分達と同じ格好をするN C R の  
野戦服に身を包んだ兵士だつた。だが、その顔は見たことがない。腕  
には真っ赤な布を巻いていて、手には正式採用していない手斧と9 mm  
拳銃を握りしめており、見るからにそれは偽装したレギオン兵士だつ  
た。

「こいつが指揮官じゃないか？」

通信兵を撃ち殺し、倒れていた警備兵の喉元を他のレギオン兵が切  
り裂いた。噴水のように吹き上がる血しぶきがテントの天井を赤く  
染め、下衆な笑い声を響かせる。外では応戦する銃声と爆音が響き、  
組織的な反撃が出来ていなかつた。

「首をぶつた切つて、センチュリオン殿に見せよう。奴隸の一人を貸  
し出してくれそуда」

血と脂で汚れたマチエットが兵士の手に抜けたと思うと、ボラトルの目の前の地面に刺さる。ゆがんだ表情を浮かんだ自身を見、改めて自分の進んだ道が間違いだと気づいた。もし自分の進みたい道に進んでいればこんなことにならずに済んだだろう。

だが、もしその道を進んでいたとしても、目の前の文字も読めない野蛮人に鉛弾を食らわせることができないのは悔しいことだつた。

「死んだらワシントンやらリンカーンによるしく伝えてくれよ、糞くらえってな」

振り上げたマチエットは宙を舞い、へばり付いた血液がテントに付着する。次の瞬間にその刃がボラトルで染まるだろうと思い、彼は身構えた。

その瞬間、テント内に爆発ではなく、鉛弾が嵐のように突き刺さり、部隊の配置図や周辺の部隊展開図など穴をあけ、ボラトルを殺そとするレギオンも先の通り、ハチの巣になつて地面へ倒れた。

「少佐！ご無事でしたか！」

突入してきたのはレギオン兵士ではなく、レンジャー・ハットを被り、精銳部隊に供給されるM4自動小銃を構えるレンジャー隊員であつた。彼の後ろには残存兵力と思しき重火器兵や衛生兵、ライフル兵など、兵科オールスターズと言つたところだろう。だが、この組み合わせはこの非常時にお目にかかるとなると、この後に起きることは

一つしかない。

「少佐！こゝはもう持ちません！退却を！」

「…………」

NCR歩兵に紛れて基地に潜入したレギオン兵による攪乱攻撃。その後、騎馬兵と歩兵の電撃攻撃。明らかにNCR軍は後手に後手を重ね、司令部まで木端微塵に吹き飛び、指揮官以外の兵士も半ば戦死状態。これでは防衛遂行は困難だつた。

「…………全フォーロンホープ防衛線部隊に通達。現時点をもつて現陣地を放棄。退却する！」

### 度重なるNCR軍の敗北

これはネルソンやキャンプサーチライトに続くNCR軍の敗北であつた。

一方、フォーロンホープ防衛線近くに位置する放棄された旧軍バンカー内から声が聞こえた。

(話を聞くんだ！ドッグ！)

「ドッグ、おなか減った！」

(まつたく、首輪まで飲むなんて、F E V変異体はいかれた奴らが多く  
いる。いいか、マスターからの命令だ)

無線の男の声にも聞こえるが、無線の出力よりも強力なのか、クリ  
アな回線で入っているのかわからないが、目の前で話しているような  
声がバンカー内で響き渡る。

(いいか、このあと、N C Rの落伍した兵士やレギオンの追撃部隊がく  
る可能性がある。そうしたら、お前は渡してある催眠ガスで奴らを生  
きたままとらえる。おやつとして食うな。生かして私の噴水のところへ連れてこい。そして地下鉄で全員連れてていき、噴水の場所まで引  
きずつていくんだ)

「了解です。マスター」

(わしに令呪や英靈がいれば……………どうでもいいか。  
ドッグしつかりと仕事をしろよ)

寂れたバンカーは来るであろう客人を待ち構えるべく、準備を進め  
るのだった。



## 二十一話 Come Fly With Me

「シックスさん、こんな映画知っています?」

「え?」

「宇宙飛行士を目指していたのだけど、結局行けずに技師として N A S A に入り定年。だけれど、自分の設計の衛星が壊れて、定年おじん 宇宙飛行士が宇宙にいくやつ・・・・・・知りません?」

「すまん、戦前の映画は詳しくないんだ」

「残念、今と同じ状況ですよ」

ウリエルから渡された無線機とヘッドセットによつて会話する  
シックスは放射能防護窓越しに、外見からはほとんど同じにしか見え  
ないグール宇宙飛行士やフェラルグール乗員を見つめていた。

その傍らでせつせとレプコン社が設計した宇宙船の整備を行つて  
おり、痙攣と呻き声のフェラルグールがいるにもかかわらず、普段と  
同じようにスパナやトンカチで修理をしていくウリエルの姿があつ  
た。ロボットには反応しないのか、フラツと音のする方向に寄つては  
するりとそのそばを抜けていく。すでに作業は殆ど終えており、長年

復旧活動を続けていたブライト信奉者はまるで研修生のようになしか見えない。そもそも、宇宙工学などの技術は非常に高度なものである。核戦争後の荒廃した世界の中でそれらの技術を身に着けているのは、戦前から生きている超老人か、もしくは戦前から技術を保持し続けてきた組織の一員の他にない。

「あのロボットは一体何者なんだ？ N C R のイモ共じやない、 B O S はそもそもあれを手放さない……レギオンなんて論外だ……どこで拾つてきたんだ？ 包帯男」

「グッズプリングスだよ。ついてきた」

自分をグールと勘違いしている男、クリス・バーバーサムは V a u l t で習得した工学技術を駆使してレプコン試験サイトに放置された宇宙植民プロジェクトの一環である有人ロケットの整備を行つていた。ただし、多くのスカベンジャー や旅行者によつて散々荒らされたレプコン試験サイトに残つているものは少なく、奥の機密エリアでロケットの破損部品を組み立てる傍ら、各地にブライト信奉者を派遣して部品の収集に当らせた。多くの行方不明者を出しながらもなんとかやつてきたのである。

だが、スーパー ミュータントの一団が襲来したことでの計画は頓挫する。一先ず、ロケット格納庫は隠すことができたものの、上層階に籠城する羽目になつた。グールは食べ物を食べなくとも生き延びることができる。生物学的に不可解なことが多すぎるが、彼らの目標である土地に行くためにはミュータントの蔓延る倉庫区画を突破しなければならない。決死隊を編成して突入しようかと議論し始めた所で訪問者が現れる。それは彼らにとつて好機であつた。グールの対処

のためにやつてきたシックスとウリエルはフエラルグールを退かせながらやつてきたことに一部の信奉者は怪訝そうな表情であつた。

彼らの教義にある彼らの存在は凶暴な友人であり、殺すべきクリーチャーではなかつた。それはさておき、シックスは半ば仕方なく、スーパーミュータントの亞種であるナイトキン掃討に向かう。だが、潜入中に聞いた彼らの会話。彼らはただステルスボーアといつた携行型光学迷彩装置を探していたのだ。その話を聞いたシックスはパワーアーマーを着た機甲部隊をも蹂躪できる見えない彼らと戦うことを避けるため、一先ず大佐と呼ばれている頭目と話し、ステルスボーアを探した。グールの商人に頼んでパソコンに触らせてもらい、納入仕様書と送付指令書を見つけたシックスは大佐に見せた。

彼らは無いことを知つて憤慨したもの、仕方なくその場を後にした。あとはブライト信奉者たちを手伝い、未だ徘徊するフエラルグールを連れて約束の地とやらにいく支度をした。本来ならレプコン社やスカベンジャー御用達のスクラップ販売業者と取引しなければならなかつたが、ウリエルのお陰でそうすることなく、放射能防護窓から長時間眺める羽目になつたのだ。

「本当に行けるのか？」

「レプコンはロブコ社の子会社だったが、多くの企業複合体や政府との付き合いがあつた。宇宙開発事業もその一つだ。政府の宇宙開発機構との技術協力があつたと記されている。問題ないだろう」

ババーサムは自身のことをグールと勘違いしている科学者だが、持ちうる知識は非常に高度なものだ。ストリップ地区のVaultでリアクター管理をしていてが、そのためにはげてしまつたのではないかとシックスは推測する。彼はそれをグール化したと言つていたが、

どうでもいいことだ。毛根が弱り、毛が「くなることは加齢によるホルモンバランスの乱れと考えられる。放射能障害の一つとしてよく挙げられる。

（作業終わりましたよ、ブライトさんがクリスさんに言いたいことがあります）

「了解、あんたにだ」

「スムーズスキンが俺に？」

「いや、ウリエルが中継してブライトさんと会話できるとさ」

格納庫は高い放射線なため、シックスは入ることができない。耐放射線防護服をも貫くであろう非常に高い放射線。普通の人間ならば、即死してもおかしくない。なぜ、ブライト信奉者がババーサムを外で作業するように言つたのか。

哀れなグールと思い込む男への同情か、それとも仲間故に死なせないようにするためか。どちらにしても、彼は死よりも辛い「置いていく」という選択肢が待つている。

「貸してくれ。今からそちらに降りますから……え・・・・・」

みるみるうちに表情が強張り、まるで伝説のヌカコーラクアンタムを飲んだ試飲体験者のように蒼白な顔となる。傍から見れば、愚かな男が騙され、信じていた者たちに置いてけぼりを食らう。ウェイストランド人基準で言えば、悲劇のような喜劇。一時、酒場で噂されて馬鹿にされる話だろう。

その様子を見るシックスは遂に見るに堪えず、その場を後にする。

次は聞いていた試験サイトの発射管制塔にて、点火スイッチを押すだけ。もうこの場には要はない。

後に残るのは、号泣する男だけであつた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

(すいません、調子乗つてネタ入ります)

(前作の序盤に人気があつたと思われる料理回になつています)

(本作とは全く関係ありません)

「不味い・・・・・・・・」

ロボットと一人のウェイストランダーの野営地。ぼそりとつぶやいた一言がロボット、—ウリエルの心をえぐつた。

「ひどい！まさか他の女にもそんなことを！」

「いや、そこは『だつたらあなたが作ればいいじゃない』って冷めた夫婦みたいなセリフを……ってなんでノリツツコミを……」

ウリエルの女性のような言動とコントのようなボケの連発にとうとうシツクスのツツコミは限界になっていた。というか、ここまでボケれば突つ込むほかないという感じである

そして、シツクスは手元にある器を見る。それはNCR軍が製造する兵士の雑嚢に必ずあるスチール製食器である。器の中にはウリエルが作った料理がある。

それはアメリカの代表的料理『ポークビーンズ』別名『ベイクドビーンズ』とも呼ばれ、日本では大豆を主に用いるが、アメリカなどはインゲン豆などを入れて、甘辛いソースで作っている。16世紀ごろにはその原型があり、南北戦争中にも兵士に支給され、塩漬け豚肉とトマト、豆を煮詰め、岩塩や胡椒をトッピングする。

21世紀後半のアメリカでは保存料込みの賞味期限無期限やとんでもなく長いもの「あなたの孫も食べられる」のキヤツチフレーズで親しまれる国民食である。西海岸がNCRになつてからも、トマト栽培やインゲン豆栽培は進められ、養豚場が少ないとために代わりの肉を投入しており、NCR食品医薬品局認定の缶詰が流通しているのだ。

味はどうかというと、アメリカの大味ということで理解していただきたいたい。そもそも、ウェイストランダード味など気を付けるものなど少

ない。そして味覚のないウリエルも同様であった。

「食べるもの少ないですから、好き嫌いしないで食べてください」

「いやいや、どう見てもそこの方焦げているし、肉も入ってない」

シックスはある事情で舌が肥えている。本人もそれについては覚えていなかつたが、ウリエルの作つた味見をしていない料理が不味いことはわかる。そして、シックスの説教が始まった。

「味も重要なんだぞ。戦前じや味を楽しむとかあるけどさ、サバイバルにおいては危険察知の方法なんだ。毒や腐つてたらやばいだろ。苦かつたりすっぱかつたりすると嫌なんだよ」

「成程！」

以外にもすんなり納得したウリエルだった。

「んでどこがダメなんですか？」

「焦げているのもそうだが、ポークビーンズは煮物なんだ。ちょっと次の野営まで待つてくれ。作り方教えてやる」

「わーい（棒）」

そして日が落ち、昇っていく。ギャングやレギオンの斥候を仕留め、装備を奪いながら次の

野営地に到着すると、シックスは雑囊からフライパンを取り出した。

「ではこれより料理講習を開始する！」

「「「おお～！」」

そこにはウリエルの他にも、スカベンジャーや巡回中のN C R 兵士の存在もあり、何が始まるのかと待ち構えていたのだ。

「よし、材料は以下のとおりだ」

〈ポークビーンズ4人前（シックス）〉

- |            |             |
|------------|-------------|
| ・インゲン豆のさや、 | 二束（もしくは松の実） |
| ・ハラペーニョ    | 適量（個人）      |
| ・ザンダールート   | 1本          |
| ・ポークビーンズ   | 一個          |
| ・肉詰め       | 一個          |
| ・岩塩        | 適量          |

「戦前の食品を二つも？」

「え、これ使うんですか？」

「いや、豚<sup>ポーク</sup>がないわけだし……」

とシックスは弁解するが、説明は続していく。

まず、NCR産玉ねぎは入手できないために、ザンダールートを代用。千切りにしたうえで、葉っぱの部分もみじん切りにする。そして、ハラペーニョも細かく刻んでおく。肉詰めは官から取り出し、ある程度潰しておく。

次にフライパンに油をひき、肉詰めをつぶしたものを炒めておく。次にザンダールートの実を投入して更に炒め、色が着くまで弱火にする。そしてインゲン豆のさやから出した豆、なければ松の実を投入する。

煮込んでいくが、「甘辛い味」にするには、元のポークビーンズの味も加えておく。

「あれ、普通に入れちゃうんですか？」

「トマト缶もトマトが入手できなかつたからな。そこは理解してくれ」

そして、甘くなれば、バナナユツカフルーツを適量練つておいて、味見しながら足していく。

「甘さというのは塩分を際立たせ、肉のうま味を引き出す。入手出来たら使うといいよ。それか、NCRの製造する合成甘味製品を入れるのもいい」

「あと、煮詰める時には味を見つつ水も入れていく。ここでリススピみたいに水っぽくならないように炒め続ける。豆はすぐに火を通すけど、よく炒めておく。この時に辛味を強くしたいなら刻んだハラペーニョを入れるのもおすすめ」

程よく煮ることが出来たら、個々の皿に載せて、残していたザン

ダールートの菜の部分を盛った上に置いておく。

「あとはNCR糧食のクラツカーカ、それともトウモロコシの粉で練つたトルティーヤに載せれば完成」

—召し上がり

完成したポークビーンズはウェイストランドでもお目にかかることがない料理だろう。もしかしたら、ストリップ地区にならあるだろうが、荒野の真ん中にある野営地にある料理は群を抜いて旨そうに見える。

「おおく、あの不味い肉詰めが！」

「h o l l y s h i t ! なんて旨さだ!!」

「甘い！そして辛い！旨いな！」

NCR軍の支給される軍用糧食はかつてのハイテク米軍の戦闘糧食<sup>M R E</sup>と程遠く、缶詰や植物性ビニール袋によつて梱包されたクラッカーなどがある。味はと言えば、察していただけたらいい。戦前から米軍戦闘糧食は最も不味い飯と言われているが、NCRも高力口リーで腐らない、そして内部被ばくしなければいい考え方で作つている。味など二の次である。

それを考えれば、NCR兵がなんで泣いているのかわかることだろう。戦場では、火を焚けば食事中だと気づかってしまう。加えて、砲撃用の監視ドローンに搭載された熱赤外線センサーに察知されてしまう。そうすると、冷や飯を食うとあるように不味い飯を食うほかない。

「ああ、久々に生き返るな」

「マツカラーンの食堂は本当にダメだからな」

「ああ、聞いたことある。マツカラーンの一一番ダメなところは飯がクソすぎる」

シックスはどこで聞いたか覚えていないが、マツカラーンの兵站部門に属する食堂の提供する飯は不味いと言われている。それこそ、戦闘糧食に勝ると劣らないと言われるほど。必ず食休みにはトイレに行列ができるらしい。風のうわさであまりの不味さに政府高官『外交官』が食あたりを起こしてN C R 食品衛生協会の役人を派遣する羽目になつたと話を聞いていた。

「成程、参考になります。甘みと塩分を適度に入れればいいんですね？」

「メニューによるが、このメニューだとそうだな」

シックスの脳裏にはサバイバルや多くの先人達の知恵によつて色々なレシピを持つている。だてにサバイバル s k i l l は高くない。出来ることなら、ウルトララグジュの料理人からレシピを教えてもらいたいと思っている。一部では人食いの噂が流れていたが 80 s 部族の存在や部族民の一部では、儀式的な者や食料不足によつて、タンパク質不足を補うために食人を為すこともある。シックスは実際、あつたことがある（とはいっても隕氣）が、モールラットに似ていると言られて、肉類が食べられなくなつた記憶があることから、まだ若かつたのだろう。

「でも私気づいたらいました」

ウリエルはメモっていた手を止めてシックスを見やる。

「私はボットだから、味見できないです」

ぎやくのようにずるつとこける一同。

—なんで気づかなかつたのか？

シックスは薄れゆく意識の中で後悔する。フライパンに載つた次の料理を見つつ、「ああ、これは焦げる」とつぶやいたとか……